
ネットゲエの世界よ、ようこそ！(仮題)

ReiLei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトゲエの世界よ、ようこそ！（仮題）

【Nコード】

N1926Z

【作者名】

Reilei

【あらすじ】

2032年もあと2週間を残すばかりとなった頃。

翌週に控えたクリスマスに浮かれる東京都心、池袋に突如として『イクドラシル世界樹』がその威容を現す。

頻発する魔物の現出、反社会的プレイヤーにより繰り返されるテロ行為、世界は安定を失っていく。

全ての始まりは世界最大のVRMMORPG、『The World』を動かしていた未知の箱『System Yggdrasil 1』の突然の暴走。

ゲームと現実が融合した奇妙な世界でプレイヤー達は奔走する、かも知れない。

2次創作ではありませんので、いずれタイトルを変更すると思います。

TS要素を含みますのでご注意ください。

主人公は最強ではありません、むしろ周囲が強いです。

2011/01/11：多分次回更新01/13だと思う。

その日の朝も、随分と冷え込んでいた。

朝8時過ぎということもあって気温はいつものように一桁前半。そもそも日中帯ですら二桁になることはない、そんな日が続いている。

この部屋は分厚い断熱材や2重窓などの北国も真つ青な過剰装備しかし、暖房を入れていないのだから、それなりに寒さには強いはずなのに外と大して変わらない程度に寒かった。

暖かな廊下からドアを開けた途端に流れだしてくる冷氣に彼女は身を震わせる。

肩下で切り揃えた、今時珍しいコシのある黒髪。

猫のような少々つり目気味な目が性格に反して、キツめの印象を与えている。特徴らしい特徴のない、それでも可愛いかわ爱不いかと言え、それなり以上には可愛い部類に入る。それなりに恵まれてはいても、贅沢を言えば『もう少し、しおらしい顔立ちのほうが良かった』と、彼女はそんなことをいつも思う。

そして、どちらかと言うと穏やかな性格の父親に似て、大人しい印象の兄を羨ましく思う。

「せめてタイマーくらい入れておきましょうよ……」

エアコンが付いているというのに、まともに活用されていないことを嘆く。

ベッドの上に無造作に置かれているリモコンを操作して起動する。流れだしてくる暖かな空気が心地よかった。

「兄さん、いい加減起きなさいよ。聞いている？」

彼女の声に反応して、ふかふかの羽毛布団がもぞもぞと動く。

「あと10分……いや30分」

彼女はまどろみの中で毛布に包まれて、お約束のように呟く声にただ呆れる。

聞き慣れているようでどこか違和感のある、いつもよりどう見ても音程の高い声に奇妙な違和感を感じ取る。結子ゆいこの兄である悠早ゆうさは男性としては少々音程の高い声が特徴であった。しかし、毛布の間から漏れる声は、それよりも更に高い。

まるで、女性のような澄み切った柔らかな声音。それは割りと彼女にとっては聞き慣れた声。

「なんで伸びるのかなあ……って、え？ え？ うん？ あれっ？」

彼女の目が羽毛布団と毛布の隙間から覗いている、余りに長く、淡い青みがかった銀の髪が存在を見つける。

明らかに日本人のモノではない髪。

それも恐らく、女性のものだと彼女は断言できた。

「……………えっと、これはどう理解すればいいのでしょうか？」

頭をフル回転させても思考がまるで追いつかない。

彼女は様々な可能性を思い浮かべては、それを片っ端から否定していく。

（まさか兄さんが女の人を連れ込むとか……それはないですね、うん）

それこそマンガやラノベじゃあるまいし、と思考を打ち消す。

（でも、さっきの声って……ないない、ありえない、ありえない）

その声は明らかに聞き覚えがあった。

いや、むしろよく馴染みのある声。毎日のように、下手をすると現実時間よりも遙かに長く聞いている声。高すぎず、低すぎず、派手さはないけれど、澄んだ不思議と良く通る優しい声音。相変わらず無駄な凝り性だと最初は思わず笑ってしまった記憶すらもあるそれ。聞いているとなぜか癒されてしまうような、そんな声。

しかしその可能性は彼女は真っ先に否定していた。

それは常識的に何よりも有り得ない。

まるでゲームかマンガでしか起き得ない、そんな荒唐無稽な話。

「ゆい、１０時までには起きるよ……」

悠早はスロー再生するようにそれだけ呟く。

そんなだらしない様子に盛大に溜め息を吐く。

（いや、今すぐ起きようよ……むしろ叩き起こすべき？）

彼女は大きく息を吸う。

そして吸い込んだ空気の全てを一気に吐き出す。

「兄さん、起きなさい……」

怒鳴り散らす小うるさい母親のように声をあらげる。

そして同時にお約束のように掛け布団と毛布の隅を掴み、バサッという小気味良い音と共に安住の地を奪い取る。勿論、申し分程度に引き剥がされまいと言う抵抗もあった。

ささやかな抵抗も全く無意味である。

「ひゃっ!？」

まだ冷たい外気に触れて、なんとも可愛らしい声が漏れる。

結子はベッドの上で文字通り猫のように丸くなっている、そんな様子の割りと見慣れた『兄』の姿を微笑ましく思う。そして、『どうしてこうなった?』と問いかける。

その疑問に対する答えはどこからも返ってこない。

人間驚きすぎるとかえって冷静になるらしい。

彼女はそんなことを考えながら、兄であったものの頭から細く長い指の先へ、髪の手、爪先までを繁々と眺める。

不健康なほどに白い肌は血管すらも浮いて見える。

長い髪の色は全体としては銀。

強く光を浴びている部分は淡い青紫。

朝日を乱反射して不思議な輝きを放つ髪に思わず見とれる。

(相変わらず無駄に可愛い……じゃないって)

結子は何度か深呼吸する。

ずいぶんと細く小さくなった肩を揺すりながら叫ぶ。

「……………え、え、えーっと、とりあえず起きて、どうなってるんですっ?」

「ゆい……………朝から騒がないで欲しいんだけど……………」

低血圧にはこの寒さは辛い」

「そう言う問題じゃなくて!! 非常事態、エマージェンシー、メーデー!メーデー!」

別に今日は労働者の日ではない。

「うるさいから……脳に響く」

悠早はと言うと呻きながら枕に顔を深く埋める。

そしてモゾモゾと手で結子の手を払いながら、行儀悪く奪い去られた毛布を足で引き寄せようともがく。

すると長い髪が乱れ全身をくすぐるように蠢く。

「ゆい、髪くすぐつたいからやめて、ほんと」

結子は仕方がない、と呆れ気味に肩から手を離す。

「だーから……」

寝返りをうち、2度寝を決め込もうと悠早は身体を動かす。

そんなことをしている間にも妙な違和感が積もって、彼の思考に警鐘を鳴らす。声の高さ、全身に触れる髪の感触、何よりもベッドがいつもよりも随分と広く感じられること。

それが彼を眠りから覚まし、思考を急速にクリアにしていく。

「……………ん？ あれ？ へ？」

悠早はムクリと重い身体を起こす。

ずいぶんはつきりとしている意識に比べて、目覚めを拒否しているような重い瞼を擦る。周囲を見渡し、飾り気のないデジタル時計で今日の日付と現時刻を確認する。

小さく1度だけ頷く。

そのまま視線を天井のシーリングライトから本棚へと這わせる。最後にロッカーの扉の姿見を見て固まる。

何度も瞬きをして目をゴシゴシと擦る。

「……………え」

啞然とした表情のまま、頬をつねる。

そんな兄の様子を見ながら結子は窓の外へと視線をそらす。

「えっと、何これ？」

「だ、か、ら、メーデーだって言ってるじゃないですか……………」

二人の会話はそこで途切れる。

ただ、鏡の中にはファンタジーの世界からそのまま飛び出してきたような美少女がいた。

美人というにはまだ幼さの残る、そんな可愛らしい顔を歪ませて。

目が覚めたら『女の子』になっていました。

そんな異常事態にも関わらず、二人はそれなりに落ち着いていた。少なくとも泣き喚くことも、錯乱状態になることもなければ、オロオロと混乱してしまうようなことも不思議となかったのである。むしろ、いつものように濃く入れたアッサム茶葉を使用して、シナモンで香りづけしたロイヤルミルクティの香りを愉しみながら、悠々と軽食を摂る位の余裕は持ち合わせていた。

悠早は背が縮んでしまったためにかなりダブダブになってしまっているパジャマ姿のままで、何をするわけでもなくブランチと洒落込んでいる。

結子も二人がやっているネットゲの掲示板を眺めながら阿鼻叫喚の様子を楽しんでいた。

「なんか事実は小説より奇なりって言うのかな、こういうのを」

悠早は2杯目を注ぎながら悠長に、相当他人事の口調で呟く。

「兄さん、ずいぶん冷静ですね……」

「赤の他人になっている、とか気づいたら異世界でした、よりはまだいいんじゃないかな？」

「それはまた素晴らしいプラス思考ですね？」

程度の問題であるが、少なくとも慣れ親しんだ世界である事に彼は安心している。

流石に異世界に放り込まれて、悠々と生きて行けるほど彼は自分が――主に精神的な面で――たくましいとは思っていない。それなりに極一般的な現代っ子、もしくはひ弱な文明人だと、そう認識している。それ以前に、ボイススカウトなどに参加したこともなければ、頭のオカシイ両親に山籠りさせられて身についたサバイバル能力なんてものがあるわけもなく、そもそもアウトドア系の人間でならない。どちらかと言えばインドア派の『オタク』である。

外見が変わったという程度なら、まだ耐えられる範囲の問題であった。

むしろそれなりに『慣れ親しんだ』外見であるのだから違和感は一切無といっても良かった。

「でも、掲示板を見てると、同じような状況の人が沢山いるようですよ？」

「そう」

結子はそんな『兄』の様子を見ながら恨めしく思っていた。

彼だけこうして『ゲーム世界』の外見を手に入れたというのに、

彼女はと言えば何も変化がなかったという事実。彼女自身、別に今の容姿が嫌いなわけではなく、それなりに気に入ってはいる。これ以上を望むのは贅沢だという思いもある。

それでも彼女が望む姿を実現した姿が現実でも手に入ればよかったのに、とそう思ってしまう。

そしてそんな思考をしている自分に呆れて溜め息を吐く。

「神様って不公平……」

無意識のうちに言葉が漏れる。

「それで、ゆい。今はどうなってる？」

余りにもスレの流れが早く、着いて行くのもやっとなんという状態。それでも、断片的な情報から彼女は今起きている事象を整理していく。

「TWには昨日の午前2時頃から接続不能になっていて、運営は緊急メンテナンスだと言い張ってるそうで」

「緊急メンテナンス……ね？」

「はい、緊急メンテナンスらしいです」

悠早の得た容姿はあるゲームのキャラその物であった。そのゲームは通称は「TWO」又は「TW」と呼ばれる。

『The WORLD』

それは『真なる異世界を体感する』を謳い文句にしている世界的に人気の高いネットゲ。

それも世界中の100万を超えるプレイヤーが一つの世界を共有

すると言う、この2031年現在においても非常識と言われるほどの規模を誇るVRMMORPGである。圧倒的な空気感とリアルさ、規模などどれを取っても他の同種のゲームからは頭一つ二つ以上抜けた存在。

同時接続者数は最大で168万人を最近記録し、未だに増加を続けているという。

プレイヤー数——有効アカウント数——は全世界で5700万人と公称されている。

システムの概要は全て非公開であり、多くのエンジニア達がこのゲームのインフラを実現するための構成や規模などについて熱い議論を交わしている。その結論として『現在のコンピュータ技術では不可能』と言う結論に達すると言われる。

だからこそ、それを動かすサーバは『オーパーツ』とまで呼ばれる事すらある。

「この状況じゃなければそれで納得したんだけど……ね？」

二人は昨日、大規模なシステムアップデートがあった事を理解している。

そして、こんな状況でなければ大規模アップデートにつきものの『バグ』もしくは『不具合』への対処のための『緊急メンテナンス』で誰もが納得しただろう。

実際にはどう考えてもそれでは収まっていない。

ゲーム中のアバターの容姿が現実反映されている異常事態、有り得ない状況。

少なくとも誰もその明快な原因は知りようもない。

「ですねえ……」

「ある意味不具合には間違いなさそうだけど……でも、美味しい」

彼は暖かな紅茶を、今という時間を精一杯に満たす。

結子は窓に映る彼女自身の姿と、変わってしまった兄を見比べて
小さく溜め息を吐いた。

そのままタブレット端末へとそっと視線を戻す。

深夜2時。

普段は静かなオフィスが突如として、文字通りの意味で戦場と化していた。

鳴り響く電話と次々と上がるアラートの発する警告音に、彼は頭を抱える他ない。

一昨日の数年ぶりのゲームエンジンの刷新を含む大規模アップデートの後、何事も無くいつものようにバグ一つ、問題一つなく極めて安定して動作していた。

サービス開始以来、人為的なミスを除けば何一つ問題の発生しなかったシステムの突然の暴走。

それも今では完全に制御を失い、事態は刻々と悪化の一途を辿っていた。

僅か30分前、突如システム管理者ユーザ、つまり全システムにアクセス可能なroot権限の喪失。

それに続く、正体不明の多数のモジュール、機能の起動。

それが何を引き起こすか、根本的に何を司っているのかを誰一人知らない。

そもそもマニュアルすらも存在しない。

「それこそパンドラの箱でも開いたか……クソッ」

男は右手で拳を握ると、デスクにドンという強い音と共に叩きつける。

彼は30半ば、エンジニアとしては正に円熟期。

このゲーム、『TW』こと『The WORLD』の設計・開発

から携わり、今ではインフラ部隊を率いるリーダーとして多くの部下を指揮する立場。社内ではゲームのインフラについては誰よりも詳しいと、俺にわからないことは他の誰にもわからないと、そう自負していた。

しかし同時に、彼はこのシステムについて『何も知らない』のもまた事実であつた。

それを誰よりもよく理解していた。

「一体、何が起こつた……………柳沢！ そつちはどうだ！？」

「どうやってもroot権限を取れませんよ……………それどころか数分前からログインすら出来なく！」

「西沢リーダー、フロントは電源を強制的に落としたと報告が入りました！」

その報告に一息つき、思わず肩から力が抜けかける。

しかし、直ぐに気を引き締め眼前に広がる数枚の有機ELモニタへと向かい直す。

「普通の機材なら電源ボタンを落とせばそれで終わる話なんだが……………忌々しい」

彼はサーバールの奥深くに鎮座する箱の姿を思い出す。

一般的なサーバ機器であれば、最悪の場合は電源ボタンを長押しするなどして強制シャットダウンを走らせることができる。それすらも出来ないような状況であれば、最終手段として電源コードをすべて引き抜いてしまえば——そんな事態はまずありえないが——それで良い。

実際に一般的なサーバで構成されていたフロントエンド系、つまりWebやログインと言つたサーバ群は電源コードを全て引き抜くことで停止させた。常識的に考えれば有り得ないことであつたが、

何故かシャットダウン系の命令を一切受け付けなくなってしまうていたための非常措置であった。

これで新規にユーザがゲームへとログインすることは不可能となる。

それだけでは何の解決にもなっていない。

しかしゲーム本体を動かしている機材を止める方法を彼は思いつかなかった。

（だから俺はあんなものを使うのはやめておけと最初に言ったんだ……言わんこっちゃない）

TWを動かしている機材は一般的なサーバ機ではない。

それは出自不明、そもそも本来何に使われるべきものなのかすらもわからない。

それ以前に、そもそもこの時代の人間の知識の及ぶ範囲のモノですらもない。

宇宙人や未来人の未知の道具。

この時代にあり得ざるモノ。

人に過ぎたるもの。

オーパーツ。

そう呼ぶのが最も相応しいモノであった。

「原始人にライターを与えたようなものだ……ハハハハハ」

彼はただ、そう自嘲するしかない。

その様子を不審がった部下の一人が憔悴した表情で話しかける。

「西沢さん、あとはイグドラシルを落とせば……」

「不可能だ……あれは落とせない」

「……………はあ」

「今だから言うが、あれを落とす手順・手段は一切存在しない」

その言葉の意味を『理解出来ない』と言う表情と共に周囲の動きがピタリと止まる。

最初期からのごく一部のメンバーを除けば、中枢部であるそれについて知るものは殆どいない。

誰もが、それが何であるかすら知らずに触っていた。

それが現実だった。

「どういう事ですか？」

「そのままだ……あれは人知の及ぶようなものじゃないんだ」

その表情には次第に諦め、達観が混じりつつある。

彼から見れば、このゲームTWは正に奇跡だった。

そんなモノがこの6年と言う長期に渡って何の問題も起こすことなく動作していたのだから……それを奇跡と呼ばずに何と呼ぶだろうか。

大きさで言うと50センチ四方よりも小さい程度の純白の小箱。

精々10Uサイズに収まってしまっ程にコンパクトさ。

その中に、それは想像を絶するような……世界中のすべてのコンピュータが束になっても足元にも及ばない様な膨大な演算能力が秘められているモノ。彼、西沢がその昔に簡単なプログラムで計測してみたところ最低でも現在最速のスーパーコンピュータよりも三桁は高速という目を疑うような結果があった。

彼の予想によれば、それは『世界シミュレータ』の類である。

そう確信できるほどに仮想世界を実現するために都合の良い機能が揃っていたのだ。

「それは説明になってません」

「全くだ」

「……………」

いつもは冷静な、頼りになる上司の顔に浮かぶ複雑な表情が周囲をより惑わせていく。

そしてまるでそんな彼を嘲笑うかのように、システムは彼の画面“だけ”に次々と様々なメッセージを送ってくる。ただ彼を焦らせ、混乱させ、冷静な思考力を奪うように、そんな悪意すら感じさせる。明らかにそれがすでに彼の手を離れたということを見せつけているように見える。

膨大なメッセージが止まっては流れ、投げられては止まり消えていく。

断片的に得られる情報だけでも未知の機能が次々と起動している。

（見せつけているのか……わざわざ、人に判る言葉に直してまで！）

この機械は彼らの希望に応え続けてきた。

あれが欲しいこれが欲しいとそう願えば、その機能が実現される魔法の箱。

薄々ながらもそれが生きている、もしくはそれに意思がある事は少なくとも彼は理解していた。

「あの噂は本当だったんですか？」

「……………」

長い沈黙を破って、ゆつくりと言葉を紡ぎ出した部下に彼は何も答えない。

むしろ、沈黙をもってそれを肯定する。

「あれがどれを指すのかは知らないが、間違っではないだろうな」

急激に場の喧騒が、波が引くように周囲に伝染し収まる。

キーボードの打鍵音が止まり、喧騒が静まり、鳴り響く電話の音だけとなっていく。

彼はこの会社が潰れることは間違い無いだろうと、そんな些細な心配をする。そしてこの場にいる人間の大半は散り散りになって行く。中には再就職が難しい人間もいるだろうと、それも心配と言えば心配であった。

そんな顛末な事を憂いている彼自身に呆れる。

「すでに”あれ”は制御を離れた……何が起こるかわからない」

彼はそう呟いた。

平穩を破るように携帯の着信音が鳴り響く。

キッチンで洗い物をしている結子も珍しい着信に興味をひかれて振り向いている。

結子から見て悠早は人付き合いが嫌いで、友人も少なく、ワイワイガヤガヤと大人数で騒ぐのも好まない。知っている兄の友人と言えぱ片手でお釣りが来るほど、電話をかけてくる相手となるとそれなりに名前が絞れてくる。

事実上は両親と一人だけだと言うことを理解している。

そして恐らく両親のどちらかだろうと彼女は想定する。

二人が小学校に上がる頃から、揃ってSE、つまりシステム・エンジニアをしている両親は家に帰ってくるのも遅くなった。それだけならまだしも、デスマに巻き込まれて忙しい時などは月に数回し

か帰宅しない、下手をすると1ヶ月家に戻らない事もざらだ。

電話すらも滅多にかかってくることはない。

たまに電話があると思うと『今タイにいるけどお土産何がいい？』
と言うことも過去にあった。

暫く帰れないといって、3ヶ月も顔を見ないこともあった。

悠早が高校に上がるまで、そんな根っからの仕事人の両親に代わりに二人の面倒を見ていたのは今でも健在な祖父母であり、めったに顔を見せない両親よりもそちらに二人は懐いていた。父方も母方も祖父母は揃って二人のことを心配し、気遣い、可愛がっていた。

二人は典型的なお爺ちゃん、お婆ちゃん子であった。

なかなか見事な放置プレーと祖父母の教育のお陰で、二人は揃って家事は一通りできるようになっている。

それでも実の両親には違いなく、それなりに彼らの生活の心配はしていた。

(今はどこに居るんだろう……)

結子はどこに居るかもわからない両親の事を思い出し、ふと心配をする。

電話に出るのが心底嫌そうな悠早の表情に苦笑いが漏れる。

「誰だろう……？」

盛大に溜め息をつきながら、悠早はめんどくさそうに手を伸ばす。
そして、表示されていた名前に思わず後悔して、自然と連続で溜め息が漏れる。

「……って、洋二か」

高校の同級生であり、悪友といっても良い間柄であり、それでも

中学以来不思議と縁の切れる事がなかった……そういう意味では彼にとつては数少ないリアル友人の一人。しかし、その縁を間違つても大切にしようとは彼は思っていない。

電話に出るべきか出ないべきかとぐるぐると思考を巡らせる。どうせ『アキバ行くぞ!』とか、そんな程度のものだらうと予測する。

名前を聞いた結子もその瞬間に興味を失ったようで、洗い物へと戻ってしまう。

「なんだ、高柳先輩ですか……」

「残念な洋二でした……」

悠早はそう呟くと遠慮無く、問答無用で通話を拒否する。これも彼にとつてはよくあることに過ぎない。

「兄さん、友達無くしますよ?」

「何でこんなに人間関係って面倒なんだろうね……」

「さあ、どうしてでしょうね?」

結子もまた同じようにあまり人付き合いが好きな方ではない。そもそも、八方美人に愛想を振り撒けるような器用な性格を彼女もしていない。

争いは同レベルの間しか起きない、そんな言葉を思い出す。

「いいけどね……」

悠早のつぶやきを遮って、再び着信音が鳴る。発信元は先ほどと変わっていない。

「高柳先輩がわざわざ拒否されてもかけてくるって珍しいですね?」

「なんだろうね……」

彼も諦めて通話ボタンを押す。

直ぐに耳元で響いてきた図太い声に、何度目ともわからない溜め息が漏れる。

（何が楽しく朝からこいつの声を聞かないといけないのか……）

穏やかな午前中の時間の全てが、その存在のお陰で台無しという気分である。

『おい、悠早。今すぐ池袋のライブカメラを見ろ！！　とんでもないことになってるぞ！！』

「洋二……朝からうるさい」

その女性らしい高い声に沈黙が訪れる。

『って、お前誰だよ！？　あれ、結ちゃんか？』

「悠早ですけど、何か？」

『……………はあ？』

「もついいよ、もつ」

説明することはおろか、話すことすら億劫になり、容赦無く通話を切る。

そのまま、すぐに機内モードを設定し全ての通信を遮断する。

その様子をしっかりと見届けた結子は、何かがツボに嵌ったらしくクスクスと必死に笑いをこらえている。

遊佐に近づくと、それがいかにも自然に隣に腰を下ろす。

「先輩はなんて？」

「池袋のライブカメラを見ろって？」
「？」

何かが起こっているらしいという嫌な予感が二人の意識に共通して流れる。

平常時ならばすぐに再生が始まるような、大して画質も良くないライブカメラの配信だと言うのに一向に再生が始まらない。自宅側の回線には余裕があると言うのに、動画の読み込みに随分と時間がかかる。それ以前に配信サイト自体が余りにも重たい。

サーバ側の回線に相当な負荷がかかっていることは明らかだった。不安が募っていく。

「……！？」
「………えっ？」

二人は揃って息を飲み、目を見開く。
言葉が出てこない。

余りにも衝撃的な光景がカメラを通して映しだされている。

街が壊れていく。

玩具や大昔の特撮のセットが破壊されるように、いとも簡単に、ゴミのようにビルが崩れる。大量のコンクリートが砕け、雲一つない空を粉塵が舞って覆い尽くしている。この時代から30年も昔の歴史の転換点となった、二人にとっては歴史でしかない911同時多発テロを思い起こさせるような光景。

余りにも無力で無慈悲な破壊行為。

映画か何かかと思えないほどの非現実的さ。

その下にどれだけの人がいるのかなど想像もつかない。

数千、下手をすると死傷者、行方不明者は万を超えるかもしれないと二人は思う。

しかし同時にそれは創造的でもあった。
コンクリートで塗り固められた都市を粉碎し、成長を続ける巨大な影の存在。

恐ろしい速度で大地に根を張り、天高く伸びようとする大樹。
二人はそれがなんであるのかを瞬時にして悟る。

「世界樹《イグドラシル》……？」

02（後書き）

補足

・デスマ

各所がいい加減なIT業界では、プロジェクトの終わりが近づくと特によくある事。

自家に帰ることも出来ず、現場に缶詰、月労働時間は300近くなることも？

開発系の人たち特に頑張れ、超頑張れ。

現在時刻は10時半過ぎ。

東池袋の外れに突如として出現した世界樹は成長を続けていた。言葉のままに、街を呑み込みつつある。文明の象徴である近代都市を易々と破壊しながら、天高く伸び続けている。ニュースによれば既に一帯は警察により封鎖され自衛隊の派遣が決定。多数の死傷者・行方不明者が出ているなど、現場は悲壮な状況らしい。

その高さは1000メートルを超えたとの報告すらある。

今ではスカイツリーを遥かに抜いて国内最大の高さに達している。その偉容は、二人の住む港区の高層マンションからはつきりと眺めることができる。

そんな異常事態にも二人は意外と冷静だった。

と言うよりも、慌てたところでどうにもならないと言うのが正しい。

TWについては未だに運営会社からの公式なアナウンスはない。

問題のゲームサーバはダウンした状態を保ち、運営会社と揃って不気味な沈黙を貫いている。今はネットワーク的にも完全に切り離されているようで、『Ping』コマンドを始めとした手段で外部から現状を確認する事は不可能。少なくとも一般的な情報収集の手段は皆無の状況だと言う。

この異常事態にも関わらずスレを見れば『早くメンテ終われよ』やら『運営、金返せ』やらと中毒者達の罵倒雑言が溢れている。廃人様達にとってはゲームの方が遥かに重要なんだ、と悠早は苦笑いするしかないが、それもよくある事である。そんな彼は彼で、ノートPCに向かって、ゲーム内の友人・知り合いと連絡を取っていた。リアル友人よりもネットの友人を重視する辺り、本人は気づいていないようだが大概である。

それは結子も大差はない。

「兄さん、それ、で」

「うん？」

結子は悠早の肩越しに画面を覗き込む。

昨日までなら現実ではまずあり得ないような距離感。

それでもTWの中であればごく普通であった、そんな近い距離。友達同士と言うには少々近すぎ、そっちの人だと思われるかも知れない。兄妹と言うよりは、仲の良い姉妹——容姿はどうみても姉妹には見えないが——と言う表現がわかりやすい。

結子にはいささか季節外れのシトラスの香りが心地よかった。

これも慣れ親しんだモノ。

「今日はどうなったんですか？」

わざと耳に息を吹き掛けるように話しかける。

結子から見ると、悠早が耳元で囁かれるくすぐったさに必死に耐えているのが面白い。もともと、このくらいでは悠早は——ゲーム内で——慣れたもので反応に乏しいのが彼女の機嫌をほんの少しばかり悪化させる。

視線が会つと、悠早はクスリと微笑んで肩をすくめる。

「えつとね……、ティッシとメイさんは来るって言ってたかな？」

「ほうほう」

彼女もよく知る名前が上がる。

どちらも仮想世界内では、あまり一緒に遊ぶと言うわけではないけれど、悠早を通してそれなりに仲が良い。

何の話かと言えば、やけくそ気味の『OFF会』である。

要するに『リアル容姿が変わっちゃった記念』と言うノリの産物。

あまりの危機感のなさに結子は呆れるしかない。

しかし同時に何ともこの面子らしいとも思い、辛気臭くなくても仕方無いしねと一人で納得しておく。

彼女から見て『暇潰し』と言う点では悪くはない。

「二人とも外見変えられたみたいで、楽しそうだったかな？」

「はあ……それはまた怨めしいくらいに羨ましい話ですねっ！？
今の私なら念力だけで人が殺せそうな気がしますよ、はい」

結子の瞳は微笑んでいるようで笑っていない。

静かな闘志、いや私怨に満ちたオーラに悠早の表情がこわばる。

「眼力じゃ？　つて、そんな睨まなくても……」

「はあ……」

彼女は溜め息をつく、身体を悠早の背に預ける。

さりげなく左手を首に回してくるところに彼は恐怖を感じていた。
今の彼の身体は、仮想世界の身体能力が反映されていれば決して非力ではないはずである。現実的に考えれば細く柔らかい身体の何処にそんな力があるんだとツツコミが入るのは間違いない。

そもそも力が反映されているかどうかと問われれば、不思議と確信を持って『YES』と彼は答えられる。何故か身体がそう教えてくれるような気がしていた。

それならば、同時に結子もまた同じように仮想世界の力を得ている可能性が高い。

そうなった時は必然的に『S t r』スキル値が低い悠早が不利である。

「ほんと神様って不公平ですよねぇ？」

「そうだねえ……じゃなくて、別にゆいは可愛いから良いじゃない？」

「私は欲深いんですっ！！」

結子の声が耳を通して脳に響く。

悠早はうんざりした表情に変わっている。

「わかったから、わかりましたから！」

「兄さんは、な・に・も・わかってませんっ！！」

結子は首に回された腕にゆっくりと、加減しながら、それでも確実に力を込めていく。

少しでも楽になろうと、あわよくば振り払って抜けようともがけばもがくほど状況は不思議と悪化していく。ある人に仮想世界で習った拘束技術であるが、悠早が彼女がそんなものを使えることなど知るよしもない。次第に身体が動かせなくなり、固定される。

仮想世界ならまだしも現実だからこそその恐怖。

悠早は次の行動をシミュレーションするが打開策は思い付かない。そんな表情が彼女の加虐心を刺激する。

「でも月曜からどうしようとか、色々悩みはあるんだから……」

「そーですねー」

「ティッシも会社辞めようかとかばやいていたし」

「それは大変そうですねー」

結子は抑揚のない棒読みで返し続ける。

それに合わせるように、更に首の隙間が埋まっていく。

力加減を間違えれば窒息、下手をすると首が折れかねない。

「すごい棒読みだね？」

「気のせいです、オー、勘違い、みたいな？そう言う感じです」

気がつけば頬と頬が触れ合うほどに二人の顔は近い。

悠早は仮想世界でも滅多に無い程に近い、何だかんだで可愛らしい妹の顔を直視できず、ふわふわと視線だけを彷徨わせる。数秒から数十秒に1度、視線が交差するたびにニンマリと肉食動物的な微笑を浮かべて、何かを伝えたそうにしているのが見える。

そう、彼女はただじつと悠早を見つめ続けている。

彼女が何を考えているのか、何が言いたいのかはさすがに読み取れない。

（なんだろう…… W I S ください）

どうやらテレパシーとか、そういう系統の便利な能力はないらしい。

結子は小さく溜め息をつく、痺れを切らして言葉を発する。

「ところで、私も着いていっていいんですか？」

「ティッシと一緒においでって言ってたよ」

あまりのどうでも良さに、悠早の肩から力がガクリと音を立てて抜けていく。

そんな彼の気も知らずにゆい子は鼻歌すら口ずさみそうなほど上機嫌になり、満足そうにコクリコクリと頷いている。しかし、悠早からするとその動きが頬ずりされているようで、何ともくすぐったくて仕方がない。

それでも、ある程度わかってやっていることだろうと振り払わない。

余計なことをして機嫌を損ねるような度胸は彼にはない。

「あの人は話がわかりますね、うん」

拘束が緩まり、締め付けが優しく包みこむように変わる。

（むしろ拒否する理由がないんだけだね……）

悠早は、自分たちがなぜ彼女……ティッシと呼ばれる人物とこうも仲が良いのかよく疑問に思う。

片や”いろいろな”意味で世界中に名を知られた、ギルドやクラに属さない独立系のトッププレイヤーの一人。方や、平均よりは上だけれど、それほど目立つような事もない一般人。普通に過ごしている限りは接点らしい接点はまず生まれえない、それ程の実力差がある。

同じ学校のプレイヤーや昔からの知り合いには七不思議の一つとまで評される。

（ああ、でもSOPのローンどうなるんだろう……流石にリアルマネーで払えとか言われたら泣くよ）

どうでもいい事を思い出しながら、そんな社会人をしている彼女の言葉を伝える。

彼女も相当な甘党好きだと言う事は、近しい間では有名だった。

「なんか美味しい甘いものでも奢ってくれそうだよ？」

結子の表情が、相応の女の子らしく微笑む。

二人は否応なしに散歩がてら歩いていた。

何時ものようにメトロでささっと出られるだろうと思っていたのが、

大きな間違いの始まりであった。現実にはメトロは一部の線は終日運休が早々に発表され、他の線も運行を止めている。

その原因は言うまでもなく世界樹の現出である。

東池袋駅近くに突如現れ、急激に成長し巨大化したそれは周囲一帯を破壊し尽くしたと言って良い。凡そ半径1キロメートル圏内が被害に遭い、その中心数百メートルは文字通りに『消滅』の被害を受けている。それは地下空間も例外ではなく『根』によって有楽町線と副都心線は路線の一部区間が崩壊してしまった。丸ノ内線も線路が激しく変形する被害を受けている。

他のメトロ路線は直接的被害はなかったが、念のため運行休止。JRも山手線他が止まっている。

そのため首都圏の交通網は大混乱の様相を呈している。

内閣は非常事態を宣言したもの、有効な対策が打てていると言うには程遠い。流石に都心のど真ん中を食い破って大樹が生えてくる自体を想定しろと言うのも無理があるので多少は同情の余地がある。死者・行方不明者は休日だったこともありまだ少ないと言われているが万を超えるのは間違いない。負傷者はその数倍にも達するだろうが、治療する人手は圧倒的に足りていない。

被害総額は計算するのもアホらしい額だろうと言える。

ここまでの混乱は2021年の関東震災以来だろう。

そんなわけで二人はオフ会集合場所の有楽町駅まで歩く。

そこまでしてオフ会がしたいのかと問われれば答えは、どちらかと言えば『NO』であった。その割りに何故こうして出歩いているかと言えば、他にやることを思い付かなかったと言うことが大きい。

二人とも何もなければ、休日は仮想世界にすることが多い。

そのTWがサービスを停止しているので、要するに暇なのである。
わ「すごい目立っている気が……まさか外人の気持ちがわかる日が来るなんてね」

悠早の今の容姿は否応なく日本では目立つ。

可愛らしい顔立ちに、不思議な輝きを放つ淡い青みがかった銀髪。サイズの合っていない大きめの濃紺のPコートの下からはチエツク柄のプリーツスカートと言う出で立ち。そこから黒のオーバーニースに覆われた足が伸びる。コートに覆われて判りにくいけど、ほどよく細いすらりとしたモデル体型——結子との身長差がほぼ足の長さの差、と言う現実が彼女の気分を悪くしている——など目立たない要素の方が少ない。

中でも、やはり髪の色がもつとも人目を引く。

「その見た目で人目を引かない方が、それはそれでおかしいと思います」

「そうなんだけど、あまり理解したくない」

「ちよつといい気味です」

結子はそう言って頬を膨らませ、ブイツと顔を背けてしまう。

どう見ても服の持ち主——コートだけは悠早の物だ——である結子本人よりも、凡そ似合っ様になっているのが彼女としては面白くない。あらかじめ解っていたことだけれど悔しいものは悔しい。

着替え——主に下着的な意味で——を手解きした時に見た光景が彼女の脳裏に浮かぶ。

仮想世界なら下着を含めた着替えなど、ワンクリックであった。人によってはそれも含めて楽しんでいるようなプレーヤーも割りといったようだが、悠早にはそう言う趣味は特になかったらしい。現

実ではそうはいかず四苦八苦した挙げ句に結子に教えを乞いに行つた。

物自体はインベントリに全てでは無いが、装備品は多少は残っていたので——ロストしている物も多々あつて、いまいち残る基準が判らなかつた——それを使用した。

ただインベントリの癖に1度取り出したものは2度と収納できない。

引き出すことはできても預けることはできない。

悠早はその半端な制約にこれを与えた何者かに小言の一つも言いたくなつた。

武器とかどうするんだと頭を抱えたが、解決策は浮かばなかつた。

どちらにせよ流石に非現実産だけあつて、染み一つない血管が透けて見えるほどの肌の白さ、きめ細かさが強く印象に残つていた。仮想世界でもあまり身体のラインが出ないような装備ばかりであつたため甘く見ていたが、出るところは出て引つ込むところは引つ込んだ体型には『羨ましい』以外の感想が思い浮かばなかつた。

思い出せば出すだけ、腹立たしさが喉元まで沸き上がってくる。とりあえず、八つ当たりだと理解していても止まらない、やめられない。

結子の心情はそんなところだ。

「……………目が笑つてないから?」

「軽い冗談です、イツアジョーク?」

「なぜ疑問系……………?」

「気、の、せ、い、です」

悠早は一応、妹様の不機嫌の原因は理解してはいた。

だからと言ってどうにかできるような話ではない。

彼から見ればそんな気にするようなことではないように思えるが、

彼女にとってはそれなりに大きな問題であるらしい。
感覚の差は埋めようがない。

「はぁ……」

「なに溜め息なんてついてるんですか？　せつかく”可愛い”女の子になれたんですから、楽しまないと損ですよ？」

「むしろ何を楽しむのか聞きたいんですが？」

結子は待つてましたとばかりに、ニタリと笑う。

すぐに、それを言わせるんですか？　とでも言いたげに頬を赤らめる。

そのまま身を乗り出して上目遣いで見つめている。

（ないからさ………たぶん）

悠差は何も見なかった、聞かなかったことにして、目を逸らす。

「いわゆるTSな訳ですから、することなんて決まってるじゃないですか。むしろお約束は消化すべきだと思いますが、………いかがでしょう？」

「心の底から遠慮いたします」

強い口調で断言する。

妹様は頬を膨らませているが、敢えて気づかないふりだけでもしてささやかな抵抗を試みる。

「姉様はサービス精神が足りません！　精進すべきですねっ！！」

「後ろ向きに善処します」

要約するならば『NO』である。

暫くは彼女の玩具にされそうだと悠早は溜め息を付くことしかできない。

それでも、それで気が少しでも晴れるのなら安いものなのかもしれない、などと損得勘定を試してみるが精神的なダメージを考えると微妙なことに気づく。でも、大赤字にならなければいいと希望的観測をしている。

どちらにせよ前向きに努力し、行動するのは彼の趣味ではない。

「そこはむしろ斜め上方向に飛んでください、是非」

それは無理だと、悠早は心の中でツッコミを入れた。
銀座の街はまだ遠い。

01（後書き）

補足

Ping：最も基本的なネットワーク疎通確認コマンド。応答を要求するメッセージを投げて、相手から応答が帰ってくることを確認する。

SOP：悠早の武器「Staff of The Prophet - Elaris Almacina」（預言者アルマキナの杖）の略

WIS：Whisper、ささやき、要するに1対1チャット。

なんか妙な略語が出てきたらだいたい装備名かスキル名です。

駅前の個人経営の小さなカフェで物憂げな表情を浮かべている。

日本国内のごくありふれた光景の中にあつて、彼女の居る窓際の1席を中心とした区画だけは、異質な雰囲気 に満ちている。まるでファンタジー世界を周囲1メートル四方だけ切り出してきて、きつちりと日常の1コマにはめ込んだような、そんな違和感、異物感。

物静かに何処かを見つめる彼女は余りにも美しかった。

人によつては天上の女神や天使の姿を思い浮かべるかも知れない。いかにも東欧系の美少女といった顔立ちに、瑠璃色の瞳。

ウェーブのかかった細く柔らかなロングヘア。

金色に近い色合いのプラチナブロンドを、黒いレースのリボンでポニーテールに纏めている。

そんな華やかな雰囲気 の容姿とは裏腹に、その服装は非常に地味だといつて良い。

それこそ、『それなんて喪服ですか?』とでも問われかねない程の見事な全身黒ずくめ。光沢のないゴシック・ドレスの——ゴスロリではない——の上から、ケープ付きのコートを羽織る。今日はそこまで冷え込んでいないと言つのに、これでもかと過剰なほどの防寒装備。

周囲の客達の好奇の視線さえ意に介さないと言つた様子。

世間様の一角が大混乱の只中にあると言つのに、駅前の人通りは平常時のように多い。

そんな通りすぎては消えていく人の波を、意味もなくじつと観察している。

クリスマス直前の休みであるためか、やたらめつたらと初々しいものから円熟したものまで様々なカップルの姿が見受けられる。彼らの表情は一樣に幸福そうであり、中には世界中の幸せを独り占め

とても言いたげな者も居る。なんだかんだで自分達には関係ない、そんな思考の人間は多いらしい。

もつとも、そんな若者の街の一つは壊滅的打撃を受け、絶賛封鎖中である。

そうでなくても彼女はとてもではないが浮かれた気分には程遠かった。

「ほい、つてか……なにを見てるよ？」

「……………うん？」

男が、彼女の前に湯気が立つカフェラテをトンと音を立てて置く。彼女は視線すら動かすことなく、窓に映った姿越しにその声の主を捉える。

その優しい声音に違わない、穏やかな表情の好青年の姿。まあ凡そイケメンの代表、それこそ芸能界に入っても恐らく十分にやっていけるだけの人も羨む美形。それでありながら厭味ったらしさや、鼻にかけているところもなく世の中が不公平という証左とも言える人物。スポーツのイメージで言うところとテニス、楽器ならばピアノ、そんなイメージを持つ者が多い。

これで性格やら頭やらが悪ければまだ可愛げがあるのにと、彼女はよく思うのである。

しかし現実には神は2物も3物も与えたようで、トップではないが頭よし、運動もでき、人当たりも良い。性格には若干の難があるが、それでも悪いとか捻くれているとか言うわけではなく、むしろ好印象のほうが遥かに強い。

凡そ、非の打ち所が無いような真人間の見本のような人物。

彼は椅子を引くとゆったりと腰を下ろす。

「随分とボーッとしてるな、と、ね？」

「色々と考え事をしていただけです」
「そっか……」

彼女の答えは随分とそっけない。
そんな反応を見ながら、彼は思わず口元が緩む。
そして視線を瞳から頬へ、薄い唇へ。小さな耳から前髪、首筋へ、そして流れるようなポニーテールの先へと視線を移していく。白磁のマグカップの縁を滑るようにして弄ぶ、不健康なほどに白い肌と指の動き。

彼女はそんな舐めるような視線にも特に反応はない。

「まっ、しかし、現実で見ても思わず見惚れる美人さんだなあ……」
「……………」

その言葉に、これまでと打って変わって眉を顰める。
露骨に『不快』と言う表情を顔にしている。

「あのね、真介……こっ恥ずかしいからそう言う物言いは止めて欲しいわけですが？」

「いやあ、自他共に認めるロリコンの俺でさえありだと認めるぞ」
「それは全く嬉しくない高評価ですね……」

彼女の外見は、年齢的には16から17程度に見られることが多い。

多少は幼い雰囲気を残した顔立ちのせいかな、立ち居振る舞いや表情によっては更に数歳年下に見られる事もあった。どちらにしても『少女』というには年を喰い過ぎており、女性と言うにはまだ幼い。敢えて表現するのならば、それこそ『乙女』辺りが適切だろう。

とにかく少なくともロリコンという人種のターゲットになることはまずない。

こういう時は怒るべきなのか、嘆くべきなのか、喜ぶべきなのか、難しい所であった。

世間一般の女性はこういう時にどんな反応をするのだろうと、くだらない思考の海へ沈む。

「はぁ……上手くないもんだ」

彼、高柳 真介は盛大に溜め息をつく。

「でも世界つてのは不公平だよなあ……俺も外見変えてほしかった」「もったいないお化けが出るのではないでしょうか？」

彼女は血管が数本切れかけるのを意識しながら言葉を搾り出す。彼が今の外見を嫌っているわけではないが、別のものに憧れているのをよく知っていた。

胸の前で拳を握って語り始めると、『また始まった』とうんざりした表情に変わる。

あこがれの銃器がどうだ、男キャラとはこうあるべきだという論に始まり、美形重視の和RPG批判やら、メカニックがどうだと、話が脱線に脱線を重ねてあらぬ方向に、流されるままに流されていく。結局のところ、彼としてはハリウッドのゴツイ合衆国軍人のようなタイプのほうが好みだということである。

そして、実際に彼らもプレーするTWにおいて、彼はその理想を具現化するように現実の容姿とは似ても似つかない姿をしている。スキンヘッドに無精髭の生えた顔面と身長180半ば、浅黒く日焼けした肌に包まれた筋肉ムキムキの大男。機関銃やらRPGやらを担いで戦場を駆け回っていても不思議ではないような姿。ゲーム内で古代金属と呼ばれる高性能金属製の鎧を身に纏い、150センチを超える巨大な剣を片手でやすやすと振りまわす。

だからこそ、一見さんの日本人には外国人だと間違いないと思われ

る。

オタクの話はとにかく長い。

彼女は途中からカフェラテを愉しみながら、適当に相槌を打って流す。

「でも、俺としてはやっぱり優男よりもゴツいマッチョの方が好みなんだよなあ……浅黒い肌で、いかにもアメリカンなのが」

「はあ、もう今さら何も言いませんけどね？」

やっと終わったと、小さな溜め息が漏れる。

真介は語り終えたぜという満足感に満たされた笑みを浮かべながら、砂糖もミルクも一切入れないブラックのコーヒーで喉を満たす。彼は別に通ぶっているわけではなく、単に甘いモノが苦手なだけである。家ならば緑茶、外ならばブラックコーヒー、場所によっては紅茶、全てをストレートで飲むのが彼の流儀である。

その姿を野蛮人を見下すような表情で眺められているが、彼は全く意に介す様子はない。

なんでこいつは、と言う彼女の呟きも聞こえていないようである。

「で、優希」

「なんですか？」

「いや、別に口調まで変える必要はないかね？」

その真介の言葉に、彼女は随分と難しい表情に変わる。

彼女と言うより彼、藤宮 優希の中ではまだ全てに折り合いがついているわけではない。

彼もまた、今朝始まった変異に巻き込まれた口であり、仮想世界内の容姿に知らぬ間に変えられていたので一応は被害者である。

彼は彼なりに考え、朝起きてからああでもないこうでもないと思

る舞いを検討してみて、仮想世界のキャラ時と同じようにしていないと落ち着かないという結論に至っていた。さすがに丸6年以上も慣れ親しんでいるので、急に変えようとするのは抵抗があった。自分自身で作り上げてきた物を叩き壊してしまうような恐怖感があったといっても良い。

だから可能な限り、それらしく振る舞っていようと決めていた。彼にとっては割りとどうでも良いことだった。

「気分的なものと言うより、癖ですね」

「いいけどな、呼び方はやっぱり『メイ』の方がいいのか？」

「どちらでもいいですよ……そんな些細なこと」

真介は腕を組み、『些細なコトなのか』と真剣な顔で考えこんでしまう。

そこまで呼び方は深刻になるような問題なのだろうか、小一時間問い詰めた気持ち喉元まで沸き上がってきたのを無理やり飲み込む。そのまま、実際に呼ばれ方を脳内でシミュレーションしてみるが、どれも微妙すぎた。この仮想世界の容姿で居るときにリアルネームで呼ばれるのも妙な気分が抜けないが、現実だというのに仮想世界の名で呼ばれるのもシックリと来ない。

どちらがよいかわれると、まだ仮想世界の名のほうが考える。

そこまで考えて、それはどうなんだと否定する。

「そっか、それならメイにしておく」

「そう」

「気分的なものだけどさ、その方がしっくり来るわ」

「そう言うものですか？」

「そっいうものさ」

「いいですけど………」

優希は喉に魚の骨がつつかえたような、そんなすっきりしない表情をしている。

視線が一箇所に定まらず、頭が左に右にと規則正しく左右に揺れる。そして時折、何度も何度も頷いたかと思うと、すぐに首を小さく左右に振ってそれを否定する。そんな行動を幾度と無く繰り返して、最後に溜め息を吐く。

結論が出ることはなかったらしい。

真介はそんな様子を微笑ましくも、苦笑いしながら眺める。

「で、メイ的にはどうなのよ？」

「それは、どういう意味の質問ですか？」

「いや、リアルに女になった気分とか？ 一応は大した意味がないんだけど、お約束っていうやつさ」

「あのですね。ここ1年はむしろこちらの身体でいた時間の方が長いんですから……どうも何もないですよ？ あまりの違和感のなさにむしろ笑うしかないほどですからね」

「へえ……って、やっぱりそういうもんか」

仮想世界TWは現実世界とは時間の流れが大きく異なる。

多くのプレイヤーに様々な時間のプレーを楽しんでもらいたいと言う事らしいが、ゲーム内の24時間が現実世界の凡そ4時間半に等しい。現実時間の1日は仮想世界時間の5日半ほどに相当するため、人によっては体感時間的に仮想世界で過ごしている時間のほうが圧倒的に長いプレイヤーも決して少なくない。

それこそ土日にログインし続けていれば、ほぼ間違いなく仮想世界の体感時間のほうが長い。

現実側から仮想世界へはデータを一切持ち込む事ができず、逆にデータを持ち出すこともできない。これが出来れば、仮想世界で勉強やら仕事をしたほうが捗ってしまうなど面倒が起きる可能性を排

除するための措置である。それでも、仮想世界では教師や一部の異常な記憶能力を有する者が、本などを丸暗記し塾や予備校的なことをしているプレーヤーも少数ながら存在している。

運営側も厳しく取り締まるつもりはない事もあり、そういった行為を目的にゲームを始める者も多い。

ただRMTだけは異常に厳しく取り締まられているのが救いだろ
う。

どちらにせよ優希などはかれこれ6年にも渡って慣れ親しんでいる『もう一つの身体』なのだ。

それもここ数年の連続的なアップデートで有り得ないほどにリア
リティーも増していた。

それこそ、肌や皮下の肉の質感から産毛の感触までである。

「でも、真介もそうだと思いますが……力が戻りきっていないから
か妙な違和感がありますよ？」

唯一の違和感は、身体に宿っている力が半端なことである。

今の身体のコンデিশョンでは仮想世界内ほど俊敏には動けず、
同じように振舞おうとしても意識に身体がついてこれないのは確
実であった。優希はそんな仮想世界の異常な運動能力が必要とされ
るような事態は考えたくもなかったが、全く『ない』とも言いきれ
なかった。しかし、今何かあったとしたら恐らく対応できない、そ
んな怖さを感じている。

それも少しづつであっても、確かにその違和感も埋まりつつある。
完全になるまであと1日、そのくらいだろうと予測している。

「なるほど」

真介も似たような感覚は少なからずあった。

今ならば、恐らく数多くの陸上競技で世界記録を片っ端から更新して回れる気がしていた。

人間としては規格外もいいところの運動能力、昨日までと何も変わらない身体の何処にそんな力が宿りつつあるのかが不思議で仕方がない。それを言い出すと、目の前の『彼女』、その細く筋肉も殆ど無いような身体に秘められた力の大きさのほうがよほど不思議である。

医者や研究者が泣いて喜びそうだと、そんなことを思う。

そして、何よりももう一つの不思議な感触がある。

「あと、俺だとさ」

真介はお腹の、ちょうど臍の辺りを我が子を撫でるように摩ってみせる。

そこに……、その丁度内側とでも表現するしかない場所に存在する異物の感覚。

実際に何か物質が埋まっているわけではなく、あくまでも感覚的なもの。

「腹のこの辺に、この辺りに武器があるのがわかるんだ。相棒の武器がさ」

真介の仮想世界TWでの相棒である一振りの片手直剣の姿が思い浮かぶ。

それは優希もまた同様であった。

「私もそうですね……真介と違って2本ですが」

「SoEとWoYか……？」

片方は神器そのもの、もう一方も準神器と呼んで良い高性能武器。

彼女を彼女たらしめていた、昨日まではワールド内で1本しか確認されていなかった武器。地味な見た目ながら圧倒的な存在感を放つ、性能的に神器というに相応しいその『杖』の姿を真介ははつきりと思い浮かべることができる。

それがあるのなら、不思議と安心することができる。

敵に回られると厄介極まりない性能であるが、見方とできるのなら頼もしいものはない。

相当にドベタな支援プレーヤーであってもそれがあれば凡そどうにかになってしまう。

「正解です」

彼女は柔らかに微笑んだ。

02（後書き）

補足

S O E : おなじみの杖、S t a f f o f E l n i a。燃費
お察しで攻撃力UP

W o E : 神器級杖、T h e W a n d o f Y g g d r a s
i l l。治癒能力大幅UP

T h e が付けられている武器がいわゆる神器級装備。

特に頭にT h e がつくものは希少、超レア。

別にサーバ内に1本しかないわけではないが、本数は少ない。

優希の服装。

イメージは銀河鉄道999のメーテルでどうぞ。

「そっぴや、午後はどうするんだ？」

「少しオフ会に顔を出そうかと思っています」

真介は『は？』と何を言っているのか判らないと言つ表情で呆然としている。

折角の美青年が台無しになつてしまつてゐるが、それをツツコまないのは優希なりの優しさ——アジア的優しさという便利なモノ——である。

実際に優希が彼の立場に入れば似たような反応を返すだらう事は間違ひなかつた。

それでも、その場のノリと勢いというのは非常に恐ろしいもので、一瞬の躊躇いもなく『問題ない』と回答してしまつてゐた。朝起きても何が起つたのか良くわからないけれど、気づいたら性別そのものが変わつてゐた異常事態と、朝方のナチュラルハイな妙なテンションの複合的な産物である。

そして、半時ほど経つてから『何やつてるんだらう』と自問自答してゐたのは別の話である。

ただ優希としては彼の知り合いの多く——首都圏、23区近郊居住者だけであるが——が、参加を決めてゐた以上は『参加しない』と言つ選択肢は存在してゐなかつた。

彼は後悔もしてゐなければ、反省もしてゐない。

「ふう……」

たつぷり数分間の沈黙の間に、追加オーダーしたダージンリンの香りを堪能する。

そして、窓ガラスに映る『それなりに絵になつてゐる』自身の姿

に満足する。

「おいおい、こんな時にそんな企画をしたおバカは誰だよ……とて
もじゃないが正気とは思えねえ」

優希は当たり前だ、そんなのは決まっていると言わんばかりに肩
をすくめる。

その『彼女』の姿を思い浮かべながらどう調理するかと、考えれ
ば考えるだけ楽しみが広がる。

彼女は真介の天敵なのだから。

「お馬鹿って……サイ君がそう言っていたって伝えておきますね？」
「……………誰に？」

2杯目をゴールドドロップまでゆつくりと注ぐ。
ダージリンらしい、マスカットフレーバーの甘い香り広がり鼻孔
をくすぐる。

「誰って、ティッシュですけど？」

白磁のティーカップを弄びながら優希は淡々と答える。
真介の顔から血の気がツーと引いていく。

「……………」
「真介？」

「……………」
「生きてますか？」
「や、め、て、く、れ」

真介は消えるような声で呟く。

「……………メイ、まだ死にたくないから止めてくれ!!」

ガタンと店内一杯に響くような音と共に立ち上がると無駄に大きな声で叫ぶ。

音の大きさもさることながら、『死』という単語に反応して周囲の客の注目が集まる。しかし、それも割とすぐに若いカップルの痴話喧嘩の類らしいと理解されたようで、生暖かい視線へと変わってしまう。傍から見れば中のよい美男美女のカップルに見えても不思議ではない。

次第に他の客たちは聞き耳を立てながら、自分達の世界へと戻っていく。

そんな中で、優希は真介の予想以上の反応に肩を震わせる。

「相変わらず、ティッシ苦手なんですネ……………」

「いや、むしろあれと普通に話をしてられる人間を尊敬する」

「怯えすぎだと思います」

そう言いながらも、無理もないと同時に思う。

彼女の放つ威圧感や雰囲気、それを引き立てる容姿と必要以上に恐れられる要素は余りにも多い。ある意味では、仮想世界TWにおいてPKerや廃ギルド以上に恐れられていたと言っても過言ではなかった。しかし、同時に多くのプレーヤーの目標でもあり、優希にとっては仮想世界において1、2を争うほど付き合いの長い、オーブンベータテスト以来の付き合いの人物であり、戦友であった。親しい集まりでは『比較的』穏やかな彼女も、外では難しい顔をしていることが多かったのも記憶している。

その辺りが彼女の印象をトツキ難くしているのだと優希は思う。実際に、一睨みされただけでプレーヤーが逃げ出すのも日常茶飯事であった。

そして参加者のリストの中のもう一つの名前を思い出す。

「そう言えばユーリも来るって言っていましたね……………」

「あの人もよくわからんな…………あれと馬が合う時点でさ」

真介の目は、理解出来ないものを見たようにあまりにも遠い。

「真介の基準はそこですか？」

優希はただ苦笑いすることしかできない。

悠早は1階にあるカフェの椅子に力なくへたり込む。

いかにも慰労困憊といった様子で、表情にも美しさにも影が射しているように見える。

項垂れ、何度も繰り返し溜め息を吐く。

（なんで、女の買い物ってこんなに長いんだ……………）

妹の買い物に付き合わされる度に、彼はそう心底思う。

某デパートと言うか百貨店？に入ってからこれ2時間半近くも、様々なフロアに引きずり回されて居たのである。純粹に彼の服——と言っても安全をとって結子と共用できるもの——に始まり、下着から、雑貨や小物から食器に調理器具、果ては化粧品までである。

彼は全力で抵抗して見せたにも関わらず、腕力もとい『Ster』値に負けて引きずられていた。満足な抵抗にもならず、何度も転けかけながらずるずると…………彼は早い段階で無意味だと悟って諦めていた。

ステータス的にはS t rで悠早が凡そ30で標準的な支援職よりは少し高め、結子は手数重視のA g i系だがS t r値は70前半である。ざっと2・5倍の差になるが、実際に発揮される力の差となると4倍近くにまで開く。

文字通りに子供と大人の差がある。

（まあ確かにしてないよりは可愛いけど、けど……認めたら負けじゃないか？）

朝とは違って、薄化粧した自身の顔が映る。

元々がノーマイクだったのを良いことに——TWでも化粧はあったがしていなかった——、普段ならばまず踏み込むことのない化粧品売り場へと連れ込まれた。様々な香りが混じった鼻を突く空気に当てられて、すぐに気分が軽く悪くなる。

そこまでなら割とよくある話であった。

そのままカウンターに座らされ、なされるままに意味不明な用語を聞き流しているうちに化粧を施されてしまっていた。元々が色白で、あまり健康的な印象ではなかったのが、唇に赤味を加えるだけで随分と健康的に見え、印象が変わっている。

彼から見れば何がどうなったか判らない。

結子は真剣に色々と質問していたが、それが耳に入っているわけもない。

それでも、確かに数割り増しくらいで可愛かったことを認めるのはやぶさかではないと言う微妙な心境。これを認めると何かが終わってしまいそうな気がしていた。

疲労感の大半は精神的なものに間違いない。

「ああ……疲れた」

そんなお疲れの様子のお悠早とは打って変わって、結子は鼻唄混じ

りの様子。

買ったものは流石に宅配にしてみましたので身軽だ。

「私は全然疲れてなんていませんよ、むしろ楽しかったです。でも、体力的には問題なさそうに見えますけれど、姉様？」

彼女は意地悪そうに言う。

「主にメンタル的な意味で……ね？」

「姉様は随分と繊細で柔らかな精神をお持ちなんですね、驚きました」

「いや、あのね………ゆい」

どうして妹にここまで良いようにされているのだろう。と悠早は頭を抱えたくなる。

そんな様子を眺めながら結子はクスリと笑って、肩をすくめる。

「冗談です」

これからオフ会でケーキを食べると言うのに、結子はシブーストを口へと運ぶ。

蜂蜜漬けのリンゴと、クリームの甘い香りが悠早を悩ませる。

彼も主に結子や、やたら甘いモノが好きな仮想世界の友人たちの影響で、今ではすっかりスイーツというものに目がない。流石に一人で入っていくような度胸はなく、妹とよく食べに行くほどである。だからと言って、『甘い物は別腹』と言えるほど胃袋は大きい。い。

今ならいけるかも知れないと思いながら、紅茶だけで必死に我慢する。

結子は知らない間に物欲しげな表情をしている悠早を見て口元が

ニやつく。

「でも、サイズが同じで済むので助かりました」

「戻っても無駄にはならないしね」

「本当に……ああ、もう、ちよつとだけ恨めしかったりもします」

「聞こえないーい」

悠早は足元への粘っこい視線を送られているのを感じて、何度も首を横に振る。

それに合わせて長い銀の髪が揺れ、乱れる。

「あと1時間と少しありますね」

「このままゆっくりしたいんですが………」

結子は次に何を見に行こうか、どうしようかと思考を巡らす。

家の茶葉が残り少なくなってるから買いに行こう、新しいブランドを買ってみるのも良いか、何処のブランドにしようかと紅茶の在庫を思い出す。それ以外にもまだまだ、買っておきたいもの、見ておきたいものは山のようにあった。

彼女はここでへたっている訳にはいかない。

「だらしないですね……そんなんでどうするんですかっ!？」

「そんなんでいいよ………そんなんで」

「……はあ」

結子は仕方が無い思いながらも、醒めた視線で兄をじっと見つめる。

まるで丁度よい玩具を見つけた子供のような、そんな表情をしているように悠早には見える。

怯える草食動物のように身体が小さくなっていく。

「何で溜め息を……………っ!？」
「!?!?!？」

爆発音と思われる重低音が二人の耳に響く。

それも至近距離だと判るほどの大きさ。

明らかに交通事故による衝突音とは異なり、なにか巨大な物体…
杭か何かを地面に打ち付けたようなそんな音であるように悠早は感じた。それこそバンカーバスターでも打ち込むか、地下でトン単位の火薬でも爆発させればこんな音がするのではないか、と彼は思う。

しかし現実にはそんなことは起こりえるわけではない。

大規模なテロによる破壊活動の可能性が悠早の脳裏をよぎる。

日本はまだ比較的平和であるが、世界的にはテロ活動は2000年以降は沈静化する様子もない。

むしろより大規模に、より過激になってきているとすら言われている。

「なんの音ですか……………今のって？」

「何だろう？ 交通事故か何かでもあったのかなあ……………」

しかし悠早が気になった事があった。

交通事故はありえないが、大規模な爆発というには爆風が吹き荒れたようには見えない。

少なくとも窓の外は平穏そのものであった、そのように見えていた。

それから間を置かず悲鳴が聞こえてくる。

それは徐々に大きく、多数の叫びへと変わってくる。

「さあ、見に行きましょう！」

結子の言葉にだらしなくあんぐりと口を開けて固まる。

「すごい野次馬根性だね、ゆい？」

「事件は現場で起こっているんです！ 話の肴のためにも、私の知的好奇心を満たすためにも、精神の安寧のためにも是非行きましょう！」

「いやいや、じつとしていようよ？」

「姉様は私が夜にあれが気になって気になって眠れなくなってしまったても良いと言っんですか！？」

「意味判らないから」

悲鳴以外が収まったかと思うと、突如としてまるで雷が落ちたような音が連続して響く。

途切れることなく12回、それは最初の1発も考えればテロというには余りにも大規模にすぎる。

それに混じって聞こえた獣の遠吠え。

「えっと、なんだろう……この嫌な感じ？」

「さあ姉様、俺この戦争が終わったら結婚するんだ的なノリで行きましょう！」

「死亡フラグは勘弁して欲しいね？」

逃げなければ死亡フラグが立つと、そんな予感を悠早は覚えていた。

03（後書き）

すごい前回の切り方が中途半端ですが気にしてはいけません。
あと、あちこち直します。

銀座3丁目交差点。

休日でもなくても人で溢れる街の中心。

ほんの20分、いや10分ほど前の日常はそこにはない。

あらゆる人の負の感情が満ちている空間。

存在しているのは非日常的な、非日本的な凡そ平和とはかけ離れた光景。

何処かの紛争地帯にでもいきなり迷い混んでしまったかのような、破壊と殺戮の傷跡が生々しい。砕けてひび割れたアスファルトの路面に、人であったと思われる肉片やガラス片、コンクリートの塊など雑多なモノが散乱している。肉片に限れば、ちぎれた胴体の破片や、下半身だけの物体、内蔵だと思われるなにか、そして目を見開いたまま転がる生首まで。

恐らく数十名と言う単位の遺体の一部。

常軌を逸した惨状に結子も野次馬根性を後悔する。

「……………あれって？」

しかし二人の視線はそこへは向いていない。

決して現実から目を逸らしているわけではなく、それ以上に衝撃的なモノがほんの数メートルほど先にある。

今も新たに人を食い千切り、飲み込もうとしている化け物。

陽光を浴びて黒に近い濃紺色に染まった毛皮に覆われた闇の色の獣。

全高は2階に届くほどで、3メートルにも達する巨躯。2つの頭部を持ち、それぞれが異なった意匠の角で飾られている。最大の武器はその大きさに似合わない俊敏性、そして前肢から時折覗く鉤爪。1撃でも当たれば命はなく、かすっただけでも大怪我を負うことは

間違いない。

二人はそれを知っている。

悠早の脳内にその情報が流れ込んでくる。

（ヘル・ハウンド……………ランク８８以上、それもNMって、おい！？）

昨日までのVRMMORPGとしてのTWには、他のゲームで言うところの『レベル』は存在していなかった。

何故ならTWはほぼ純粋なスキル制であつたからである。

ステータスすらもスキルの一部であり、ステータス系スキルと技能系スキルをどう配分するかが一つ重要なポイントだった。そして技能系スキルをどれだけ振り、どのような組み合わせで上げるかによつて、キャラクターの特性が決まる。

それに加えて『資格（Credential）』と呼ばれるものにより、職業毎の専門性が生じる、そんなシステムを採用していた。例えば『聖職者』系資格を取得すれば、聖属性に属するスキル群が出現し、『剣士』系であれば武器種別『剣』の専門スキルが出現し、上げることが可能になる。

プレイヤースキル
スキル振りと装備、PSが強さを決定する。

レベルと言う絶対的な指標は存在し得ない。

しかし、それだとPTを組むにもあまりに不便である。

凡その強さの指標として代わりに存在していたのが『ランク』である。上げれば、より高難易度のクエストが受けられる、店売りアイテムが安くなるなどの特典がある。ただし上げてもキャラクターそのものにボーナスがつくようなことはない。

純粹に指標としての機能。

４年程度のプレイヤーの平均が８０前後と言われている。

視界にいるヘル・ハウンドの８８は難易度としてはかなり高い部

類に入る。平均的なプレイヤーのPTが挑むダンジョンであればボス程度の強さに当たる。ソロで余裕を持って挑むなら、ランクで15の上積みが必要と言う経験則を当てはめると100を越えていないと厳しい。

悠早はランク的には中の上だが、純支援職であるので戦闘力は皆無。

結子は魔剣と言われる高性能武器を持ってすら平均を下回る。

他に人を数人加えて、PTでゲーム内で挑まなければ倒すのは困難であると断言できる。

現状としては、挑めば大怪我は免れず、死の危険性も相当に高い。さらに悪いことに『NM』——正しくは『Named Monster』と言い、言わば無数に湧く雑魚ではなく、固有名を持ったモンスターである——と略される言わばボスであり、同ランクの個体よりも数段強力である。

「ねえ……兄さん？」

「……………うん、思ってる通りだと思う」

そう、二人で挑んでもまず勝ち目はない。

その時、化け物の上空に円を基調とした直径10メートルにも達する、巨大な魔方阵が出現し始める。TWであればモブの扱う魔法としては上位、プレイヤーが扱える類のモノではない大魔法。魔法攻撃の規模と詠唱時間は慣れれば、魔方阵の大きさと相手のランクと格から凡そは予想することができる。

それらを適切に予測し、判断して適切な指示を与えるのも支援職の役割の一つであった。

右の首が首を持ち上げ、その構成に集中している様子が見える。

「マズイ……」

ヘル・ハウンドの扱える範囲内で最大級の範囲攻撃の到来。

注ぎ込まれる大量の魔力と、完成へと向かう魔方陣が放つ圧力を前に悠早は身を動かすことができない。何かしなければいけない、何をすべきかは判っているが動けない。

ボス戦に慣れたプレイヤーであれば、過剰ダメージによるデイスペル——詠唱破壊——を試みるか、速やかに安全圏へと退避する、対魔法防御系バフの使用などの行動をとる。

結局のところ彼は危険性の高いボス戦の経験は少ない。

比較的安全圏での行動が中心であり、ボス戦も最後方からの支援補助に徹していた。

理論・理屈の上では理解していても経験が決定的に足りていない。

「兄さん……！？」

「……………5、4、3」

心臓の鼓動が激しい運動の後のように高くなる。

嫌な、冷たい汗が全身から吹き出す。

「2、1……………来る」

「……………」

獣が吠える。

悠早はとつさに結子を引き寄せ、抱きしめる。

それを合図として、悠早がカウントダウンを終えたとほぼ同時に攻撃魔法が発動する。

魔方陣が一際眩しい蒼い輝きを放つが、すぐに黒い霧に包まれる。そこから放たれる数十本にのぼる光を通さない純粹な黒、漆黒の雷撃。

いまだに輝きを放つ魔方陣を中心に、広がった傘の骨のように四方八方へと破壊を振り撒く。それは大蛇のように蛇行しながら回転

し、コンクリートの建物を切り裂き、アスファルトの道路に深い亀裂を残す。外壁どころか柱までも粉碎され、文明の象徴である近代建築がいとも簡単に、轟音を立てながら崩れていく。砕けた大量の窓ガラスの破片が降り注ぐ。

拳銃で応戦していた警官がその直撃を受け燃え上がる様子を捉えた。

身体の先端から崩れ落ちるようにして燃え尽きていく。

二人に見せつけるような過剰な破壊行為。

ヘル・ハウンドはTWにおいては『知性の獣』に分類される。

それも犬・狼型ではまず目にする事のないランク100を優に超える深淵の狼『Fenrir』、地獄の番犬『Kerberos』を代表とする幾つかを除けば、高い知性と物理・魔法攻撃を兼ね備えた強力な化け物。その絶大な破壊力がもたらす結果に言葉が出てこない。

悠早は左の首が確かに二人を見ていると認識する。

深紅の瞳がいつそうその輝きを強める。

「いや、さ……さすがに」

笑っている、彼はそう感じる。

（逃げられない……むしろ）

逃げれば広範囲に被害が拡大する、あれは追ってくると言い切れた。

そして結子では到底あれの相手をするには難しい以上、彼が引き受けるしかない。自己犠牲などと言う崇高なモノではないが、実の妹を目の前で殺されるのは見たいとは思わなかった。

これで兄妹仲が悪ければ、また違ったかもしれない。

「ゆい、逃げろ……。3分、そのくらいの時間は稼ぐ」

「兄さん、なに血迷ってるんですかっ！？ 死にたいんですか！？」

結子は左腕を掴み、珍しく激しい口調で捲し立てる。

戦闘型でない時点で勝ち目はない。

それでも、特に防御支援を核としたスキル、テクニク構成を取っているため、死なない戦いはそれなりに可能に思えた。ただし、どれ程持ちこたえられるかは未知数であったが。

それでもカップ麺が出来上がる程度、妹一人逃がす時間を確保するは可能だと踏んだ。

その後どうするのかは考えていない。

「キリエを張り続ければそのくらいはたぶん持つ……はず」

「アホですか、バカですか、さっさと逃げますよ？」

「逃げられなさそうだし……ねえ？」

それまで一歩たりとも動かなかった獣が右足を踏み出す。

悠早は大きく息を吸い吐き出す。

唱えるべき言葉は『システム』が示している。

「System command, summon weapon.
Staff of the Prophet, Elaris
Almacina……………」

悠早は獣の瞳を見据える。

体の正面前方数十センチの地点に魔法の青い光を散らしながら1本の杖が出現する。

名は『Staff of The Prophet - Elaris Almacina』、和名は『預言者アルマキナの杖』。

ゲームのものとは思えないような、シンプルなデザイン。

TWにおける武器のデザインはFからAまで順にランクが上がるごとに華美な装飾が施され、金ピカで宝石を多数あしらったゴテゴテとしたモノへと変わっていく傾向がある。しかし、不思議とSランク以上……所謂神器、準神器クラスとなると逆にいきなりシンプルで、単純なデザインになることが多い。支援職用の杖の最高峰として知られるWoyこと『The Wand of Yggdrasil』などは、真紅の宝玉を埋め込んだだけの樹の枝にすぎない。

彼の武器であるSOPもそんな準神器の末席に位置する武器らしく例に漏れない。

古代金属製の代表である『真なる銀』、ミスリル製の棒の先端に、アメジストのような色合いの宝玉。

飾りと言えば、宝玉を支える三首の蛇くらいのもの。

「冗談ですよ……ね？」

「割と本気」

それなりの、この場においては何の力もない人々に比べれば十分な力があっても、足を引く張る事にしかない事が確かな現実に唇を噛む。幸か不幸か、彼我の実力差がわからないほど彼女は愚かでもなければ、無謀でもない。どちらかと言えば、TWにおいても前に立ちながらも周囲に守られていたということは理解していた。

半端な力、それが腹立たしくて仕方がない。

結子は力なく、兄を引き止めるために掴んでいた手を離す。

「ごめん……ダメだったら爺ちゃんと婆ちゃんにはよろしく」

悠早はそれだけを搾り出すと、走りだすと同時に詠唱を開始する。

悠早はモンスターの相変わらぬデタラメさに、遣る瀬無い気分が湧いてくる。

数十と言うプレイヤーでは有り得ないと断言できる数、いくら小型と言ってもこれだけの数の魔方陣が一度に展開されていく様子は圧巻であった。プレイヤーであれば仮想世界の魔法職の頂点に君臨する『魔女』であつても同時展開は精々10個程度と言つたところに過ぎない。

それも余裕綽々といった表情に感じられるのが憎らしかった。

この程度は前座もしくは小手調べ、居酒屋ならばお通しと言つ程度にすぎない。

先ほどの大魔法に比べれば、数は多いものの大したことはないように見える。

魔方陣の単純さから、魔法弾系の攻撃だろうと彼は予測して動く。当たらなければどうと言つことはない。

そんな考えの元に、獣の注意を敢えて引き付けるために遮蔽物のない道路を駆け抜ける。

もし攻撃が当たつた時にどうなるのかはやつてみなければわからない。たつた一撃だけで致命傷となるかも知れず、逆に魔法防御のお陰でかすり傷程度にしかならないかも知れない。下手をすれば前に見た警官のように苦しみ悶えながら燃え尽きていくのかも知れない。

要するにやつてみなければわからない博打である。

それでも即死はありえない、悠早はそれだけは断言ができた。

もつと言つならば、そのバフさえ維持し続けることが出来れば勝てはしなくとも負けることもないと言えた。

短時間でも膠着状態に持ち込めればそれでいい、それが彼の考えである。

その間に他の誰かが打開策を考えてくれることに期待するしかない。

「……………accljem illus nir・Kyrie El
eison!」

有効限度ありの絶対防御テクニックが完成する。

ゲーム内における仕様では耐久度、耐久回数どちらかが無くない限りは、攻撃から自動でバリアが展開され続けると言う非常に使い勝手の良い防御支援テクニックである。特に高い回避能力があればその効果は絶大で、殆どノーダメージで狩りを続けることができる。

使用上の難点はクールタイム——再使用デレイ——が5分と比較的長い事が挙げられる。

それでも防御支援の中では最高峰と評される優秀さである。

1番の難点は実のところ『取得がめんどくさい』という点に尽きる。

（避けきれるかね……………あの数を）

悠早は追加で無詠唱可能な極めて基本的かつ、小型の支援魔法を準備していく。

幾つかの魔方陣の輝きが強まるのを合図に攻撃が始まる。

04（後書き）

補足

K y r i e E l e i s o n （キリエ・エレイソン）

通称はキリエ。B i s h o p、H i g h P r i e s t 用支援テクニ
ック。

武器ランク

S +（神器）、S（準神器）、S -（伝説級）、A - F。

Aランク以上の武器は例外なく『古代金属』と呼ばれる物が素材。

身体の横数センチの空中を純粹な闇色の攻撃が通過する。全面から接近する追加の2弾攻撃の軌道を予測しながら、悠早は綱渡りを続けていた。

（左……右、びみよい）

数本の触手の襲撃を最小限の回避行動で躲していく。

外れた攻撃はすでに原型を留めないほどに碎かれ、破壊の跡が生々しいアスファルトを更に鈍い衝撃音と共に抉る。それなりに強度はあるはずであるが、薄皮を捲るように、余りにも容易に地面には傷跡が増えていく。

それに加えて時折混ざる闇属性の魔法弾。

一帯に漂う錆びた鉄の匂いが、悠早の集中力を乱す。

彼は血の匂いも、その見た目も好きではなかった。血液検査などは大の苦手で、注射器の中に満ちていく血液を見ているだけで気分が悪くなるほど。そんな彼にとって、この空間は拷問場のような物であったが、文句を言っても仕方がなかった。

ただ脳が現実を拒否しようとしているのか、世界から色が失われている。

一面のセピア色の世界が彼の視界に広がっている。

それが精神をまともな状態に辛うじて保っている有様。

ただ機械的に思考する。

身体を動かす。

自身の肉体とは思えないほどに思考と行動が繋がり、一致している。

それを知るわけもなく攻撃は無慈悲に間断なく続く。

数本つつ時間差をつけての攻撃ポイントは的確で、行動パターンを把握できてしまっている。

慣れたプレイヤーであればフェイントやらを織りまぜて対処するのだろうが、悠早はそう言った方法論を知らない。

（間に合わない……）

なんとか直撃だけは免れているが、それでも時折攻撃が身体をかすめて行く。

その度に自動防御が発動し、耳障りな甲高い音と共に淡い緑色の障壁がダメージを防ぐ。

（あれは……迎撃する、しかないか？）

悠早は右足を半歩分引く。

右手の杖を中段に構え、前方から飛来する1発の魔法弾へと照準を定める。

最低限の対モブでの戦闘訓練だけは習い、実践していたのが幸いだったと悠早は心底思う。

そしてその師が『最強』と呼ばれるレティシヤや、下手な戦闘職よりも近接戦闘が強いが——何故か——純粋な『支援職』であるメイリアであったこともまた良かったと言える。システムに頼るのではなくシステム外スキル群を駆使する戦闘方法は彼女らからの直伝であり、言い換えれば数少ない直弟子という幸運な身分であった。だからこそ、『下手なりにそれなりに戦える』のである。

これがここ数年の『ゆとり』プレイヤーであれば、支援は支援らしく、魔法使いは魔法使いらしく後方でじっとしているのが基本である。支援や魔法職が前へ出て戦闘をするようなこともなければ、

身を守る術があるかも微妙な所で、不意打ちに対して最低限の有効な防御も出来るか怪しい。そんな脆弱な後衛職を守るために、中衛的なポジションの身の軽い遊撃職をPTに加えるのがセオリーとなっている。

それに比べると悠早は、周囲に『戦闘ができる支援』ばかりであった。

見よう見まねであるが、ある程度は基本的な戦闘スキルが身に付いている。

型に従って、右足から踏み込み杖を前方へと突きだす。

基本的な単発の突き攻撃である『Single Spike』を発動させる。

極初步の攻撃に過ぎず、威力的には望むべくもないが使用後デイレイ——次のテクニックを発動させられるまでのデイレイ——が短く、硬直時間——行動不能時間——はほぼ存在しないため比較的扱いやすい。大技になればなるほど、使用後デイレイ、硬直時間、クールタイムは伸びていくため、使い所は限られていく。

青白い光を放ちながら杖の先端が魔法弾へと吸い込まれていく。魔法弾は音もなく破裂し、煙のような靄となって霧散する。

（迎撃成功、更に2……弾幕シューティングでもやってる気分だな）

他の多くのVRMMORPGと異なりTWでは『魔法迎撃』が可能であるがゆえに出来る芸当。

それはシステムの定義されているものでない。

バグか仕様かは不明と言う比較的広く知られた、メジャーなシステム外スキルである。

過去に運営会社に問い合わせを行ったところ、『問題ない』と言う返答があったので建前上は『仕様』と言うことになっている。実際には『修正不能のバグ』だろう、と言うのがプレイヤーの間の共

通認識である。

ある程度以上を持つ攻撃、もしくは対属性攻撃を叩き込む事で実現する。迎撃に求められる威力は迎撃対象の魔法の威力で決まると言われているが、実際のところ明確な基準は存在していない。要するに勘と経験が物を言う。

そのお陰で範囲魔法以外は『必中』の魔法攻撃は存在しない。

（あぁきりが無い……）

左足をバネに、後方へと数メートル跳躍。

半秒ほど前まで彼の居た地点を数本の触手が抉っていく。

2分。

3分……4分。

ただ無意味に時間だけが過ぎていく。

攻防は一進一退を続けている。

悠早は道路が穴だらけになるまでは1箇所で踏みとどまり、安定した動作が困難な状況になると数メートル単位で移動する。化物も本気ではないのか、それとも戯れてでも居るのか悠早を殺しに来てはいないような感触を受ける。

攻撃が彼のスキルで十分に対応可能な範囲に収まっているのが不気味だった。

そんな事を思考しながら、それをひたすら繰り返す。

その度に穴だらけになって行く道路を何の感慨もなく横目に眺める。

相手の懐へ飛び込んでしまえば多少は楽になるのだろうが、20本近い触手の群れがそれを許さない。

距離にして10メートル弱。

一瞬で接近できるはずの距離が余りにも遠い。

「ユーリ、下がって！」

永遠に続くように思われた奇妙な均衡は、その声を契機に突如として崩れる。

逆光を背にして、悪魔のような天使が舞い降りたように見えた。

断続的に響く道路に穴を穿つ破壊音

「ユーリが頑張ってるのもありますけど……ヘルハウンドも本気ではないようですね」

優希は辛うじて崩落を免れたデパートの5Fの窓越しに、巨大な漆黒の獣の姿を見下ろす。

そして獣から前方へ10メートルほどの距離を保って、青みがかった銀髪を振り乱す彼女の姿。

彼は窓枠に足をかけ、右手に杖を握りしめ、じつと静かに攻撃の機会を伺う。

すぐに出ていっても問題はないが、最初の1撃で可能なかぎり大きなダメージを与えておきたかった。

優希も一応は本質的には純粹な『支援職』の『Bishop』であって、接近戦闘は本職ではない。それでも倒しきる自信はあったが、正面から殺り合うと少々時間がかかりすぎると踏んでいた。これが単なる雑魚であれば力押しするところだが、あれは『NM』であり特にHP的な意味で——NMも弱いながらもボスでありHPは一般モンスターに比べて数倍多い——削り切るのは、強力な攻撃スキルがない以上は骨が折れる。

幸いなことに、システム外スキルである『ステルス』を使用して

いること、そこに彼我のランク的差が加わっているお陰で、彼はただ獣にその存在を察知されていない。

奇襲をするにはもってこいである。

ただ、今敵の攻撃を一手に引きつけている友人のユーリの負担を考えるとあまり時間もない。

ある程度（支援としてみれば相当に優秀だが）の自衛能力はあっても、戦闘能力は遥かに劣ることをよく知っている。

優希は右手に固く握られた白銀色の武器へ視線を移す。

彼の杖、S o E — S t a f f o f E l n i a — は一見するとその穂先から槍のような印象をつける武器である。

しかし近くで見れば、いささか武器らしくない2対の飾り羽と、瑠璃色の宝玉、そして刃のない穂先の流れるような優美な姿であることが解る。遠目には槍のようであるが槍ではなく、杖のように見えて杖ではないように見える。

その印象を受けるのは半分は正しい。

杖の中でも『M i g h t y S t a f f』マイトスタッフに分類されるそれは、その外見に比して巨大な攻撃力を秘めている。

一般的に杖は魔法攻撃力を増幅するために装備する。

しかし『M i g h t y S t a f f』はM Pを消費して物理攻撃力を増幅する。

つまり、S o Eは杖の中では例外的に純粋な近接戦闘用の武器である。

（攻撃の合間……ユーリには悪いけど、もう少し頑張ってもらわないと……）

全ての触手が本体から離れる瞬間を待っていた。

高威力の攻撃テクニクは消費M Pは勿論、様々なディレイが大きく使用に制約がある。

打ち込んだは良いが、その後の反撃で大ダメージを食らっては堪らない。

「今だ……」

一瞬の隙を見逃さない。

トンと窓枠を蹴り、空中へと躊躇うことなく身を投げ出す。

「ユーリ、下がって!!」

眼下で戦闘を続ける彼女に呼びかけながら、極小さな魔法を無詠唱で発動させる。

風属性のオリジナル魔法、名前は特につけていないが周囲は『WA』とか『Wind Assist』等と呼んでいるようであった。風を制御し、落下位置や速度に始まり、戦闘時の急加速、急減速から果ては空中機動までを実施することが可能なお手軽でありながら便利な品物。それでありながら極初步的なコードしか使用していないので、魔法制御や風属性スキルが低くても使用できる。

『複雑で巨大な大魔法よりも、初步の呪文の応用のほうが余程使い勝手が良い』

それは優希のTWでの友人であり、最強の魔法使いと呼ばれる彼女の言葉である。

多くのプレイヤーは見た目が派手で、一見すると——実際にダメージ量は大きい——破壊力の大きな大魔法を好む。実際にはMP効率と言う意味では、広範囲攻撃となると決して良くはなく無駄が多い。MP効率の良い単発系高威力魔法を使用し、多数を相手にするには呪文のMC——MultiCasting、多重詠唱——を持つて当たる。

プレイヤースキルさえあれば、その方が圧倒的に優位と言うのはプレイヤーの共通見解である。

そして、このWAは彼女の数少ないお墨付きを得られた物であった。

体感時間が数百倍にまで加速されていく。

細かな制御で落下地点を獣の右の頭部へと向ける。

ほんの数秒という短時間。

ヘル・ハウンドも突然の乱入者の存在に有効な対策が取れずに居る。

そもそも数秒で十分な対策が取れるわけもない。

「そーれっ！！」

獣の1メートル以上もある巨大な頭部が眼前に広がる。

真紅の瞳が見開かれ、驚愕か恐怖かはわからないが、そう言った表情が怯えているように見えた。

振り上げた杖に最大量のMPを込めると、一気に眉間へと振り下ろす。

テクニク名はPile Driver、優希がメイリアとして扱える最大威力の攻撃。

杭打ちの名の通り、槍もしくは杖を使用し下方へ向けて打ち込むための技である。

TW内ではそもそも槍や杖のようなリーチが重要な武器でこれを使わなければならないような状態は、相手に懐に入られている状態であり、言わば『すでに終わっている』状態である。だからこそ使いどころがよくわからない攻撃テクニクと言われていた。

しかし、WAを使用した空中機動が可能であればそれなりに使い道はある。

鈍い衝撃が優希の腕に伝わる。

咄嗟に組まれた薄い魔法障壁に阻まれて、わずかにその威力が減衰される。

しかし十分な威力を秘めた一撃が眉間へと深々と突き刺さる。

（よし……次）

優希はさらに穂先を引き抜くと、頭部を蹴り地面への落下体勢に入る。

攻撃の手を緩めず、PleDriverをコンボの起点として、次の攻撃へと繋げていく。

WAで落下速度を大幅に抑えこみ、横薙ぎ単発技『Circular』へ、そして『Singlespike』と頭部へ容赦無く連続の攻撃を浴びせる。特に2段目のCircularはヘル・ハウンドの右目にクリティカル・ヒットする。

柔らかな眼球を深く決る、生々しい感触が不愉快で仕方がない。

獣が吠える。

優希は更に数発の単発攻撃のコンボを繋げ、地面へと軽やかにと表現するには程遠い……SOEを地面に突き立て急制動を掛ける形で、強引に着地する。その衝撃は流石に大きな負担であったが、耐えられないほどのものではない。

ある程度はWAによって緩和されていた。

「ふう……………」

20本近くも蠢いていた触手が半減しているのが見える。

ヘル・ハウンドは魔法を司る右の首のそれなりに深刻なダメージによって、これまでのレベルで魔方阵を維持することができなくなっている。これもTWであれば一時的なステータス・攻撃力の減少

に留まり、ある程度時間が経過すれば元の水準まで回復するところである。その辺りは現実的でありながらも、同時にゲームらしさが必要であった故の措置だろう。

しかし深く挟られ、完全にその機能を喪失した瞳が回復する兆候は見えない。

ヒールを含めた治癒呪文で回復させられるのかは、優希の興味のある所であった。

「メーさん、大丈夫!？」

優希はただ1度だけ小さいながらも力強く頷き返す。

先程まですべての攻撃を一手に引き受けていた彼女も随分と余裕が生まれている。

触手の数は一気に10を切る水準まで減少し、魔法弾による攻撃は完全に停止している。触手による攻撃も鈍っており、それまで彼女を追い詰めていた切れ味はない。

（さてどうしようか……ううん、勝てないことはないけどだるいかも）

片割れに深手を負わされ、左の首の表情に怒気が満ちているのが見える。

遊びは終わりだ、そう瞳が訴えているように感じていた。

優希は、溜め息混じりに再び杖を構える。

余りにも非常識な数の死傷者に人手は全く足りていない。

彼女らと同じプレーヤーだったと思われる数人が治癒魔法で治療に当たっているが、焼け石に水の状態と言って良い。

このままでは満足な治療を受けることも叶わずに死んでいく人々も多いのではないかと思えるような状況。実際に四肢の一部を失っている、明らかに速やかに手術が必要な深手を負っている重症者も多い。それに加えて、事件が人の集まる交差点、それも街の中心で発生したために怪我人はこの一帯だけではない。

我先に治療を受けようとする、受けさせようとする人々の罵声や悲鳴は途切れることがない。

そこは完全に戦場であつた。

「兄さん……」

そんな中で結子はじつと終わらない戦闘を見守っていた。

周囲では慌ただしく様々な人々が動き回っているが、彼女の目にはそれは映っていない。

幸いにも加勢があつたことで、危機的な状況は脱したといってもそれ以上に事態が好転する様子はない。断続的に輝くエフェクトから確実に攻撃が行われ、ダメージを与えていることはわかってもらえが終わる予兆はない。

少なくとも獣の動きはまだ鋭いままであると言えた。

「あれ、……………この人？」

ふと目に留まったその姿に、彼女は見覚えがあつた。
170を越えるスラリとした長身。

刑事物によく出てくるようなトレンチコートが全身を覆っている。何よりも——お世辞にも目付きの良いとは言えない——猛禽類を思い起こさせるようなキツイ釣り目。右の瞳が翡翠色、左がダークブラウンのオッドアイ。いかにも白人系の美男美女の姿を取るプレイヤーが多い中であって珍しい日本人風の顔立ち。そしてそれに合わせるように腰の下まで伸びた癖のないストレートの黒髪が白い肌に映えている。

加虐心の塊のような、気の強そうな美人の姿。

そして同時に和服でも纏えば、極道の人か何かだと思われるのも不思議ではないほどの威圧感を感じさせる。

実際に周囲の人々もチラ見はしても、堂々と鑑賞するような人間は見当たらない。

あの感覚は間違いない、と結子は確信する。

仮想世界、VRMMORPGの代表作『TW』においてランク的には日本最高位の『116』を所有。

そして世界でもトップ3の一角を占めたプレイヤー。

その割には、彼女自身はゲームにすべてを捧げるような廃人ではなく、社会人として生活の傍らでプレーしているだけであった。それもプレー時間による差がつきにくいスキル制であること、そしてVRゲームらしくプレイヤースキルが随分とものを言う世界だからこそ可能な芸当。

数多のNMどころかMAMBM——大アルカナになぞらえた21種のMMBM——を含めたMMBMまでもソロで屠り続けるその姿から『MBM Freak』、『ボス狂』等の二つ名で呼ばれる。

中でも彼女の名を世界中に知らしめた1本の動画、MAMBMの1柱であるPEOこと『The Priests Elnia in Oblibion』和名：忘却の女教皇エルネアの亡霊——『ソロ討伐動画は、MAMBMを世界で初めてソロでの討伐に成功した記録として余りにも有名であり、語り草になっている。そ

の後も数多のMBMをソロで葬りその様子を動画配信サイトに投稿し続けた。一年半ほど前の大規模アップデートにおいて、MBMの大幅な強化が行われたのは彼女が原因であると言う都市伝説すら広まっているほどである。

良くも悪くも色々な意味、多方面で有名な彼女のその名を知らないプレイヤーは少ない。

「レティーさん？」

「……ん？」

彼女は『あんた誰？』と言いたげな怪訝な表情を向けてくる。

結子は自身の容姿が仮想世界のそれではなかった事を思い出し、次に彼女が基本的に初対面の相手に対しては冷たい、そんな人物であつたことも大昔の記憶からついでに思い出す。

キツイ容姿と一匹狼っぷりから気難しいと思われる、そんな人物であつた。

彼女の仮想世界での名はレティーシャと言う。

「ああ……えっと、ユイの中の人です。はじめまして」

「ゆいち？」

レティーシャは結子を上から下へと、あまり興味なさげに見渡す。その微妙な視線、絡みつくような感じはなく、舐めるような厭らしい物でもない……それに何とも言えない居心地の悪さを感じていた。

「はい、って何をしてるんです？」

「うん、観戦……と言っても、今来たところなんだけど」

レティーシャは視線を黒い獣へ向ける。

「ところで、あそこでワンコと戯れてるのはユーリだね？ もう一人がめーの字だったのはすぐわかるんだけど。ああ、でも流石にめーの字でもあれはめんどくさそうだなあ」

「そうです……」

「さすがにこれ以上破壊活動続けられても嫌だし、ワンコをひっぱたいて来ますかね」

レティーシャは緊張感のない呑気な口調で言う。

何よりもあの凶悪な化物を『ワンコ』呼ばわりし、尚且つ、あれをソロでも容易に撃破できてしまうほどの単純に『すごい人』であるという仮想世界での事実。それでいて普段接している分には大手ギルド等の連中よりも、何処にでもいそうな、割りと今時の何処かヤル気のない普通の人に見えて仕方がなかった。

その性格的な面の軽さと、見た目、実力のギャップに結子も最初は戸惑った物であった。

同時に彼女の目は笑っていないことにも気づく。

「あれをワンコ扱いなんですネ……相変わらず」

「犬コロでもいいけどな？」

レティーシャの機嫌はすこぶる悪かった。

彼女の好きな『街』を随分と派手に荒らされ、このままだと折角企画したオフ会がダメになりそうな事に対してである。何せ、彼女が呼んだ二人である悠早と『めーの字』ことメイリアこと優希の両名が絶賛戦闘中であり、終わったとしても警察が何かに同行を『お願い』されることはほぼ間違い無いと言えた。

そんな彼女の口から、乾いた笑いが漏れる。

「……………そんなのは、どっちでもいいです」

結子はさっさとあの化け物を始末して、戦闘行動を終わらせて欲しかった。

加勢が加わって安全性が大幅に上がったと言っても、何が起こってもおかしくはない。

そんな不満を込めた視線をレティーシャへぶつける。

「身体慣らしでもしますか。まあ、30秒もあればいけるかね……………」

彼女は頭を掻いてごまかしながら言う。

「……………はあ」

「System command, summon weapon」

「

彼女は淡々と流暢な英語でコマンドを唱える。

一呼吸おいてその武器の名を呼ぶ。

「The Grand Cross - Nemeseia!!」

グランドクロス。

それは巨大な十字架を持つ、審判の効果を有する鈍器の一群の総称である。

その中でも特に彼女のそれは神罰の執行者ネメシスの名を冠した神器、神罰の代行者である者の証明と解説される。仮想世界での入手方法はMAMBの一つが稀にドロップする事が知られている。そしてそれ以上に、レティーシャの名と共に広く知られた、特に著名な武器の一つ。

全長は2メートル近く、十字架部分だけでも80センチを超える

ほどの巨大さ。

彼女はそれを悠々と素振りしてみせる。

「まだちよいと重いか……」

レティーシャはまだ力が完全に戻りきっていないことが不満であった。

僅かな反応の遅れ、そして鈍器に身体が振り回されるような感覚が不愉快なのである。

それでもあの程度の化け物の相手なら問題ないと言い切れることもできた。

結子は苦々しい表情で『早く行ってください』と訴える。

レティーシャはそんな強い視線に肩をすくめ、結子の頭にポンと手を載せて言う。

「よし、真打は最後に登場するってやつさ」

ヘル・ハウンドの瞳ははつきりと彼女の姿を捉えていた。

悠早は急にヘル・ハウンドの攻撃の手が緩んだことを知覚する。

獣の真紅の瞳も、既に彼と優希の二人を見ていない。

その鋭い視線は随分と離れた人ゴミの一点へと向けられている。

獣は攻勢から守勢へと転じ、必要以上に攻勢を誘わないように触手を引き戻していく。しかも、同時により小型で制御しやすい、もしくはきめ細やかな制御の必要がない——つまり数を揃えられる質より量優先である——攻撃魔法を次々と組み上げていくのが見える。隙を見せないその姿と振る舞いは、さすがに高知能の魔物と言ったところである。

「……ん？　なんだ？」

2本の触手による牽制も役目は終わったとばかりに引いていく。悠早は突然の変化に何が起こったのか、状況を飲み込めずに居る。しかし、キリエの耐久度的に限界が近かった事もあって、それに合わせて数メートル後退する。

優希もまた同様に深追いはしない。

獣もそれに合わせるように、ゆっくりと後退していく。

（あとはティッシに任せますか……ね、相変わらず美味しいところを持っていく）

優希はこの数十秒前から彼女の気配に気づいていた。

もつと正確に言えば、彼女の持つ武器……人間の創りえる物ではない神器に分類されるそれが放つ気配にである。

仮想世界においては第6感的なシステム外スキルも幾つか存在していた。

その一つが世界に満遍なく満ちていると設定されていた力の源である『魔力』もしくは『マナ』の波長の変化を読み取ること。様々な情報を得ると言うものであった。これは特に捻りもなく『マナ・サーチ』やら『魔力探査』等と呼ばれていた。得られる情報は周囲一帯のモンスターやプレイヤーの位置情報に始まり、凡その強さや状態、装備の概要等がある。慣れればシステムで設定されている『索敵』スキルよりも優秀で、ソロプレイヤーならば必須に近いシステム外スキルであった。

特に固有の波長を持つ神器などの上位装備は、知っていれば判別するのは容易い。

優希は僅かな魔力の動きを感じ取る。

小細工なしに、前傾姿勢で正面から突撃してくる人影。

「小細工なしなんです…… 必要があるとは思えないですけど」
「ええ…… いや、ちょっと……」

優希は仕事は終わったばかりに、後方へと飛び退く。

それも右足をバネにした上にWAによるサポートを加えているとは言え、静止状態から後方へ向かって一気に10メートル以上もある。

その様子を『この場にオリンピック選手がいたら卒倒しそうだな』等と、半ば呆れ気味にどうでも良い感想を抱きながら悠早も後ずさることでさらに距離を取る。鼻歌でも口ずさむようにしてキリエの再詠唱を行うことも忘れない。

攻撃の危険性は減ったと言っても命の安全が確保されているとは言いがたい。

（つて、やっぱりティッシかい！）

悠早の横を長い黒髪をなびかせた彼女の姿が通りすぎていく。

獣が準備していた全ての魔法弾系の攻撃魔法と触手が、彼女と交差するそのただ一点を目指す。

ほんの数秒にも満たない時間が、スローモーションのように流れていくのを悠早は体感する。

手始めに数本の触手。

それに数十分の1秒という僅かな時間差をつけて、多数の魔法弾と触手が続く。

ゲーム中ではMBM——TWにおけるボスモンスター——戦でもなければ見ることが出来ないような、大量の魔法による攻撃が彼女の姿を完全に覆い尽くす。

彼女が攻撃を回避した様子はない。

アスファルトを食い破り、連続で手榴弾が爆発したように大量の粉塵が巻き上がり視界を塞ぐ。

悠早はその光景に、大丈夫だとわかっていても目を閉じてしまう。

「……………」

次の瞬間、レティーシャは平然と獣の目と鼻の先にいた。
彼女はしてやったり、と不敵に微笑む。

光学的な残像を残し、短距離を瞬時に移動し相手を欺く秘技。
彼女達の扱うオリジナルの中でも今のところ最上位に位置する特殊な補助魔法。

『擬似空間転移』

それはWAと結界を応用し、一瞬の間に急加速と急減速を行うことで実現する。

最大で約15メートルの距離を0.1秒程度で移動する事ができると言うモノ。

飛距離がそれほど長くない割には事前詠唱が必要で、消費MPも並の攻撃魔法など目ではないほど多い。そして間に遮蔽物が存在しない状態が大前提であり、万が一にも遮蔽物があつた場合には即死しかねないほどの大ダメージを仮想世界では受けていた。何よりも使用を困難にしているのは、開始位置と終了位置、そしてその3次元空間を正確に脳内で思い描く『空間把握能力』が必要である事だと言える。

連続で使えるものではない上に、何かと制約も多い。
それでも不意打ちをするにはもってこいの技。

レティーシャは落下制御をかけながら身を捻り、巨大な鈍器を振

りかぶる。

「くたばれ、犬コロ!!」

真紅のエフェクトを纏ったメイス用の単発重打撃『Skullbreaker』が発動する。

神の金属であり、古代金属の最高峰たるオリハルコン。

その独特な青味がかった銀の金属光沢を放つ十字架の一端がヘル・ハウンドの左首、脳天へと突き刺さる。

絶大な一撃は防御結界、そして大抵の物理攻撃を緩和する体毛も意味をなさず、鋭利なナイフで切り裂くように皮膚を食い破る。それでも攻撃は止まることなく、更に深くへと浸透していく。

肉を切り裂き、頭蓋骨へと達してもまだ止まらない。

骨が碎ける感触。

脳へと達した時点で彼女はようやく攻撃の手を意図的に緩める。

これ以上深くめり込めば、引きぬくことが困難な状況に陥る可能性があると考えてのこと。

左の首は断末魔の悲鳴をあげることすらなく意識が途絶える。

「とらあつ!!」

血に染まったグランドクロスを引き抜き、休む間もなくコンボによる追撃へと移る。

横殴りに頬へとオーバーキルの一撃。

傍から見れば全く意味のない行動に見えて、ゲームシステム上では意味のある行動。

それは単純に『コンボを繋げる』と言う一点においてのみこれは意味がある。

コンボはテクニク使用後の規定時間以内に、発動時の体勢などを含めて無理のないテクニクを繋げていかなければいけない。も

し規定時間が過ぎればデイレイが始まりコンボは終了する。技を繋げるため、体勢変更のために、それ自体には意味のない攻撃を行うのは割りとよくあることである。

彼女はその勢いに乗せて既に意識のない左首を蹴り飛ばす。

オレンジ色のエフェクトと共に弧を描く3撃目は右の首の顎を挟む。

それで終わることもなく、文字通りに『空中を蹴って』数十センチ飛び上がる。

その間にも鈍器は見事な円を描いて攻撃の初期位置へと戻り、そのまま手負いの右首の眉間へと深々と突き刺さっていく。

顎を碎かれた獣は断末魔の悲鳴をあげることすら叶わず、意識が途絶える。

「よしっ……」

レティーシャは満足気な表情と共に、風に乗って軽やかに地面に舞い降りた。

彼女は間違いなく強者であった。

そんな中で、悠早はかなり引き気味な視線を向けていた。

完全に両の首を破壊され息耐えた獣が、頭部から大量の血液を撒き散らしながら地面へと倒れていくのが目に映る。同時に、『システム』がヘル・ハウンドのHP消失を通知してきたことで、戦闘が終了した事を認識する。

それは勿論、声が聞こえたやら、メッセージが表示されたやらと言っわけではない。

ただ何となくそれを認識することができ、それを教えたのがシステムだと言っことが解る。

恐らく、頭の中に情報が流れこんでくると言う表現が最も近い。

「うわぁ……流石にあれば可哀想になってくるのは気のせい？」

まるで死体に鞭打つように横っ腹に一撃を加えるレーシャの姿。それを眺めながら、通りの反対側でやれやれと言った様子で肩をすくめている彼女の言葉を思い出す。

『ティッシは大の犬嫌いですからね……犬系のモブには容赦がないんです』

彼は本当にそうだと一人納得していた。

06 (後書き)

ゲームTWの説明はそのうちします、たぶん。

補足

MBM = Magnificent Boss Monster
ダンジョンやフィールドの最奥に潜むボスの総称。
強さはピンキリでソロでも比較的容易に撃破可能なQueen Antから、果てはランク100以上のプレイヤー数百人でかからなければいけないThe W.O.R.L.D.までレンジが広い。
倒して金銭的に割りに合うかと言うと結構微妙。

MA MBM = Major Arcana MBM

全部で22種のMBMであり、TWを象徴するモブ。

MBMの中では最も弱いものでもMBMとしては中位の難易度。
別にコンプリートしても得点はないとかなんとか。

いかにも警察署らしい、くすんだ色の壁の続く無機質な廊下。

今時珍しいと言っただけで珍しい訳ではないが、時代を感じさせる行事やら注意事項やらの貼られた掲示板。近年ではお役所ですらも、電子ペーパー技術を使用したモニタを使用した掲示が普及してきていると言っただけに、この空間だけは20年以上前の平成の時代、下手をすれば更に前の昭和の世から時間が止まっているように感じられる。その割には各所の最新鋭の防犯カメラや、円柱形の全自動お掃除ロボットやらが動き回っているのが何ともおかしい。

悠早は硬いくすんだ緑色の、これまた年代物の安っぽい椅子に腰掛けていた。

ところどころ化学繊維製のカバーが破れ、内部のウレタン素材が顔を覗かせている。

そして意味もなく、興味もなさげにただすることがないという理由で、何回目ともわからない回数を眺めながめて過ごす。最初はネットの巡回をして情報を集めて暇を潰していたのだが、それも阿呆らしくなってしまうている。

彼にはとにかくする事がない。

そして、この暇を食べる手段を思いつかない。

「はあ……ヒマ」

天井のLED照明を眺めながら、悠早は深い溜め息をつく。

結子と言えば、一応戦闘の当事者である3人に付いては来たもののこの場所の雰囲気にならなかつたようで外へ散歩に出てしまっていた。

署内は平常時ならば人の往来も多数有りそうだというのに人の気配は少ない。

銀座3丁目交差点での『怪獣事件』と、池袋でのイグドラシルの現出、そして各地から入ってくる正体不明の謎の生物の出現等の対応に追われているそうなので無理もない。池袋だけで死者・行方不明者は1万を優に超えると言われ、銀座の1件も死者数百名、負傷者はその数倍にも及ぶと見られている。実際のところ、未だに被害の全貌はつかめていない。

救助活動に現場検証、危険地域の封鎖と人手はいくらでも必要だった。

多くの人が現場へが出払ってしまっており、最小限の数しかここには人がいない。

そしてヒマであると同時に、悠早は奇妙な気だるさに支配されていた。

結子と一緒に外へ出なかった原因もそれが大きい。

それは現実での初戦闘による気分的なものであるかも知れないし、また大量のMPを消費しての治療活動によるものかも知れなかった。もしくはその両方であるとも言えた。

現場に曲がりなりにも仮想世界において『支援』と『治療』を専門とする『プリースト系』の資格を所持していた人間が3人もいた。悠早と優希は支援の専門であり、支援系の最高峰である『Bishop』であつたし、レティーシャも近接戦闘が専門であるがそれなり『支援・治療』能力もある『Dominicans』と呼ばれる、日本語にするならば異端審問官であつた。

流石に戦闘が終わってすぐに退散するわけにも行かず、駆けつけた警察官らに事情を説明した上で救助活動に当たっていたのである。それによって少なくとも数十人の命は救われた、と先ほど言われて胸を撫で下ろした。

その過程で明らかになったのは、プリースト系の『ヒール』とメイジ系の『ヒール』では名前こそ同じであっても、その効果は大き

く異なるということだった。ゲーム内でもプリースト系のヒールには状態異常治癒等の付加効果があるのは知られていた。それが現実になったことで、より大きな機能の差が認められた。

結局のところメイジ系のヒールは浅い傷は癒せても重症患者にはほぼ効果がなく、プリースト系のものはある程度重症患者にも効果があった。

それでも流石に、四肢切断といった部位損傷には対応出来なかったのであるが。

悠早はレティーシャの気配を感じ取る。

冷たくなっていた頬に温かな 金属の感触が触れる。

「随分疲れているようだな？」

「え、ああ……まあ」

それだけ言うと悠早の目の前にボトル缶のロイヤルミルクティを差し出す。

それなりに有名なメーカーの、しかしレティーシャから見ると安い茶葉をコテコテのミルクと砂糖で味付けしてごまかしただけと言う評のろくでなしだと語っていたシナモノ。悠早から見ればそこまで酷いものだとは思わなかったが、凝り性の彼女から見ればそういうモノらしかった。

悠早はそれを両手で包み込むようにして受け取る。

「こんな安っぽい上に糞不味いもので悪いが、我慢してくれ」
「いえ……」

レティーシャは250ミリリットルのお茶のキャップを外すと、喉へ流し込む。

そしていかにも不味そうなかめっ面へと表情が変化するのが見

える。

最近発売されたばかりの新製品のようにであるが、彼女の口にはお気に召さなかったらしい。

「ふう……って、これもまた微妙いな」

「そもそもペットボトルの味に文句を言っても仕方ないんじゃない……」
「不味いものは不味い」

成分表示をしげしげと眺め、ウンウンと唸っているのが見える。

そして、何を思ったのか不満気な表情をそのままに、腰に手を当てると風呂上りの牛乳を飲むように一気飲みをする。

その表情は苦い薬でも飲んでいいるような印象を受ける。

「まつ、お疲れさん」

飲み終えたペットボトルを軽く10メートル以上先のゴミ箱へとポイッと投擲。

それを『流石に入らないだろう』と呆れ顔でその姿を眺める悠早を他所に、ペットボトルは見後な放物線を描いてゴミ箱へと吸い込まれていく。ゴミ箱の縁に当たることもなく、ど真ん中への完璧なシュートに悠早は表情をそのままに固まってしまう。

レティーシャは余裕綽々といった表情を浮かべている。

「まあ、最近の特技だな」

「はあ……」

そんな特技はいらないと思っても、悠早はそれを口には出さない。

「本当にいろんな意味で疲れましたよ……」

「こっちも改めて人間ってのはホント自分勝手に我儘で口クでもね

えなと思い知らされた」

「ハハハハハ……同感ですけどね」

悠早は自分達の治療行為があれで良かったのかと思ひ返す。

医者はああ言った異常事態であれば、少しでも助かる可能性の高い患者を優先し、助かる可能性の低い患者の優先度を下げる。助かる可能性の低い者に時間を裂くのではなく、切り捨てて一人でも多くの命を助けなければならない。つまり取捨選択を迫られる。

助けることができた人達や、その肉親や知り合い達からは確かに感謝はされた。

同時に、明らかに助けようのない患者の親族から浴びせられた罵声も、敵視や恨み混じりの視線もはつきりと記憶に残っていた。

慈善事業で文句を言われては堪らないと言うのが悠早の思うところだった。

「ほんと醜い……良い感じに人間嫌いに拍車がかかりそうだ」

「まあ」

優希はと言えば、黙々と事務的に、多重詠唱を駆使してヒールをバラ撒いていた。

レティーシャはそれに比べると『女嫌い』の彼女らしく男性ばかり。それも年齢の若い人から優先的に治療していたのを悠早は覚えていた。そして汚物でも見るような冷たい視線が随分と怖かったのもである。

そして何も言わずに後ずさる人々の姿がなんとも滑稽であった。

（この人も嫌いな物が多いよなあ……ほんと）

悠早は腕を組み、壁に持たれる彼女の姿を見上げる。

「ところでゆいちは何？」

「ゆいなら、こんな所には居られません、って外に出て行きましたよ？」

「そっか……めーの字はまだ事情聴取っぽいしなあ」

レティーシャはやることなさ気な様子で、長い黒髪を指でも弄ぶ。彼から見れば何かを考えているようで何も考えていなさそうな姿でも、彼女を知らない人間が傍から見れば思考の海に沈む物憂げな様子は十分に絵になる。しかし、実際には『やっぱこの髪が邪魔だ、切るか』等と小言を呟いているのは聞かなかったことにする。

（勿体無い……）

実際問題として、腰の下まである髪など、それだけで相当な重量があり邪魔である。

手入れなど想像を絶するほど大変なんだろうと考えながら、悠早は視線を黒髪へ這わせる。

そして、沈黙。

悠早は明日の日曜はともかく、月曜以降の生活について思考する。彼は極一般的な高校生の身分であり、それを放棄する訳にはいかなないと考えていた。

同時に、この状況を学校側に同説するかは頭の痛い問題で、またほぼ間違いなく話題の中心にされてしまうだろう未来に気が重くなる。どちらかと言えば、教室の端で馬鹿騒ぎもせず、交じらず、放って置かれて、静かに慎ましく大人しく生活していることが彼の理想だった。

しかし、今の悠早の容姿は否応なく人目を惹きつける。それは恐らく何処へ行っても変わらない。

「ティッシはどうするんです?」

悠早は極一般的な会社員をしているレティーシャがどうするのが気になった。

その場にいるだけでも威圧的な雰囲気を纏う彼女は、普通に仕事をしていたのだろうかと思ふと思う。

携帯を忙しながらも滑るような動作で操作する、そんな彼女の横顔を見つめる。

「ああ、月曜からは普通に仕事だな……今休んだら大変なことになる」

「それはなむいお話で」

「全くだ。どこぞのバカがヘマやらかしたお陰で無駄に仕事は増えるわ、妙なバグは出るわ、客は細かいわ、そのクセ今更設計変更と出来るかって……ああ」

「まあまあ……」

悠早はブツブツと小言を呟き、時折舌打ちする彼女をなだめるように言う。

しかしレティーシャは視線を悠早へと向けることはない。

「しかし、この格好で仕事するのもさすがになあ……」

「すごい怖がられそうですよね」

レティーシャは深い溜め息を吐く。

そして乱暴に携帯をポケットへ突っ込むと、何も言わずに廊下をトント蹴りあげる。

「学生のユーリとめーの字が羨ましいぞ」

「こっちはこっちで意外と気が重いんですけど?」

「いいじゃないか、可愛らしい美少女とか。ほんと羨ましいわ」

そんな事を言いながら、悠早を上から下まで舐めるように見つめる。

変態セクハラオヤジ、もしくは奴隷商人から奴隷を買う金持ちに値踏みされる、多少まともな表現をするのならレスビアンなお姉様に見初められたような、どちらかと言えばガタイの良いゲイなお兄さんと言う方が近いかも知れない、そんな居心地の悪さ。

レティーシャの指が髪に触れるのがわかる。

手櫛で梳くような優しい指使いの奇妙な心地よさに戸惑う。

そして彼女は何度もウンウンと頷く。

「クラスの視線を独り占め間違いなしだな」

「全く嬉しくない件について……？」

悠早の肩がガクリと落ちる。

レティーシャは格好をつけて右手の親指を立てているのだが、それが妙に様になっている。

これだけの美人であれば何をしても様になりそうなものであるが。

「二人はずいぶん早かったんですね？」

ドス黒いオーラを纏った彼女の出現に、レティーシャの身体が固まる。

その声はいつものゲーム内で聞くそれと変わらず、穏やかで優しい……ように見えて、いつもと違ってアクセントに何処か棘があるように悠早は感じる。些細な差ではあるが、その微妙な違和感が喉に魚の骨がつかえたような違和感をもたらしていた。

特に怒っているというわけではないが、あまり機嫌は良さそうで

はない。

いつもなら王冠のような輝きを放つ、華やかなプラチナブロンドも心なしかくたびれて見える。

（こついうのを暗黒微笑って言うのかな……）

飾り気のない漆黒のタートルネックのワンピース。

手に抱えているのがコートではなく、大鎌であってもそれほど違和感はないだろう。

仮想世界では優希は常に『純白』を基調とした服装であつただけに、二人からすると今のその黒い姿はやはり随分と強烈な違和感があつた。それは仲間だと思つて接し、信賴していた聖職者女の子が、実は魔王の手先でしたと言われるような感覚。

それでも、その姿が正しいと思えるほど似合っているのは間違ひなかつた。

「めーの字、おつ」

「お疲れ様」

一瞬の沈黙をレティーシャが破る。

それまでの不気味なオーラが存在していなかつたかのように影を潜めていく。

原因が自分達ではなかつた事に悠早は胸をなでおろす。

「ところで、ティッシ？」

「うん？」

「オフ会はどうするんですか？ さすがにこの時間からでは……もう無理ですよね？」

優希は壁掛け時計へと視線を移すと、残念そうな表情になる。

悠早や結子がオフ会とそれに付随する普段はあまり食べられないようなそこそこ値の張るスイーツを楽しみにしていたように、それは優希も同様であつたらしい。それも学生である3人の支払いは大腹なことにレティーシャ持ちとなっていたのだから尚更である。

「ああ、大人組はこれから飲みだ。カーすけやリッチなんかは有楽町の緑の窓口で待つてゐるそうだ」

「はあ……？」

この状態でもオフ会を続行しようというレティーシャに悠早は呆れるしかない。

どちらかと言えば『飲まずにやってられるか』が正しいのであるが、悠早にはわからない。

「そういうわけだから学生組は大人しく帰ってくれ、仕事が忙しくならないうちに埋め合わせしよう」

「……………いや、ティッシ」

「それなら仕方がないですね、今日は引き下がりました」

「メーさん!？」

悠早は『それでいいのか!？』と心の中でツッコミを入れる。

そんな複雑な表情の彼を他所に、二人は次のオフ会の日程の話し合いを始めている。

更に追い打ちをかけるようにその場の雰囲気破壊する陽気な声が響く。

「姉様、ロー。ンに今冬限定のチョコの新商品が売ってたんですよ!」

「ゆい……何でそんなに元気なのさ？」

コンビニの名前入りビニール袋を右手に掲げてワサワサと振る姿が目に入る。

そんな結子の脳天気な様子と発言に、レティーシャと優希は思わず吹き出してしまう。

優希は頭を抱えて、ムニヤムニヤと何かを呟いている。

「なんでって、新商品ですから！　って……、レティーさんにメイさんもおつです」

「ゆいちは元気だねえ……」

結子を見つめる二人の視線はとにかく生温かった。

07（後書き）

オチが上手く付かなかった件について。
まあ予告通りの更新できたしいいか（マテ

悠早は突き刺さるクラスメートの視線に、早くも心が折れそうであつた。

仮想世界のスキル群やシステム外スキル群の効果・能力を引き継いでいるおかげか聞きたくもない・聞こえなくてもいいような囁きまで聞こえてくる。50歩ほどは譲つて『転校生』や『外国人』などは、まあまだ許せる範囲であつたし、そう思われても仕方のない現実があるのだから諦めても入る。しかし100歩以上譲つても『可愛い』とか『綺麗』等といった言葉を投げかけられるのは彼の精神に着実にダメージを与えていく。

別に歓声が上がるとか、そういった事はない。

しかし、仮想世界のシステム定義スキルやシステム外スキルの能力・効果が普通の人ならば聞き取れないような音ですらも認識を可能とする。上位プレーヤーともなればシステム外スキルである魔力探査によつて、自身に向けられる感情の機微すらも読み取ることができる。

悠早にはそこまでの実力がないのはこういう場合には幸なのか不幸なのかと、彼も考えこむ。

そんな能力があつたらすぐにノイローゼになりそうであつた。

「最悪……」

悠早は誰にも聞こえないような小声で呟く。

そして教室の窓に映る今の彼の姿に『まあ可愛いけどね』等と、他人事のような視線を向ける。

濃紺のブレザーとチェックのプリーツスカートと言う平凡な制服。かれこれ2年近くも間近に存在し、デザイン的にもありふれ見慣れた制服も着る人間が変われば随分と印象が変わるものと、人事

のように彼は思う。ある意味では、自分が今では校内で1番似合っているのではないかと言う奇妙な優越感すら抱いてしまう程に『彼女』は可愛らしかった。

何だかんだで巨乳のグラビアアイドルとまでは行かなくても、出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる。どちらかと言えば、均整のとれたスラリとしたモデルに近いスタイルはある種の芸術作品のような美しさがある。

そして流れるような銀の髪と美貌。

流石は仮想世界産の容姿だけあって非の打ち所が無い。

そんな彼を見る視線にはいい加減に慣れたと思っていたが、甘かったと彼は痛感する。

特に男子生徒の視線などは気持ちが悪くて仕方がない。

街中の見知らぬ人間であっても、その視線は不愉快極まりないモノであった。

それが曲がりなりにも顔も名前も知った相手からだというのが、負の感情を増幅する。

（あのバカ……）

悠早は教室の真ん中の最後部に位置する友人を睨みつける。

何が起こったのかわからないといった様子で、口をアホみたいにあんぐり開けて啞然としている……そんな姿が不思議と彼の癪に障るのである。

視線が合うと、友人である高柳 洋二はピクリと肩を震わせる。

ひそひそ話で『おいおい、睨まれたぞ』などの言葉が聞こえてくるが気にしないことにする。

「はあ……」

小さく溜め息をつく、教壇に立つ担任の横に並んで顔を上げる。

（初めての転校生体験とか……ほんとどうでもいいなあ）

目を細めて、いかにも不機嫌そうな表情で教室全体を見回す。

ギャルゲやエロゲ、もしくはアニメやマンガなどであればこの辺りで『ニコリ』と微笑んでみせるサービスくらいはする所なのだろうが、残念ながら彼はそこまでのサービス精神は持ちあわせてはいない。

結子がこの場にいれば『姉様はサービス精神が足りません!!』などと声を張り上げるだろう。

いつの間にかすっかり呼び方が『姉様』で定着した妹の顔を思い浮かべる。

そして昨日、つまり日曜日の夕方に近所に住んでいるこの学校のOBのお姉さんに頼み込んで女生徒の制服を調達し、満足そうなドヤ顔で『ジャジャー』と言う効果音が出てもおかしくない様子でそれを突き出してきた姿が思い出された。

悠早としてはあの行動力を他のところに向けてもらいたい所である。

「ええ、まあ……そう言う訳で土曜の事件の影響でこうなったと言うことらしい」

意識が軽くトリップしている間にも担任が状況説明をしていたようである。

クラスメートの大半は頭に『?』マークを浮かべるか、信じられないといった表情をしている。

（まあ朝起きたら女の子になってました、テヘ♪とかいう説明で納得する方がおかしいわな……うん）

悠早の視線は元凶——だと思われる——彼方にそびえる大樹へと向けられる。

今ではすっかり東京都心を覆う巨大な天蓋となった世界樹、イグドラシル。

悠早や結子の予想よりも一回りほど大きく、全高は富士山のほぼ半分である1800メートルにも達し、緑の天蓋の直径は4キロにも達する巨大さ。大地に目を向ければ根は池袋一帯を破壊し崩壊させ、池袋駅を超えて西池袋一帯にも達していた。その影響で池袋駅は閉鎖され、山手線を含めたJR、私鉄、地下鉄含めた各線は致命的なダメージを受け、復旧の目処は立っていない。

ちなみに山手線はJRの中の人が相当に頑張ったらしく、『C』の字型で運行を再開している。

また二人が通学に使用していた有楽町線は未だに不通で、自転車通学を余儀なくされている。

「おい、澤口？」

担任が彼を呼ぶ声が聞こえる。

悠早は再びどこぞの遠くの世界へとトリップしていた意識を現実へと引き戻す。

どうやらここ数日で、すっかり現実逃避する癖が付き始めているらしい。

「何か言っておきたいことがあったら言いなさい？」

「はあ……？」

彼は特に『言っておきたいこと』は思い浮かばなかった。

敢えて挙げるとするならば、それは『今まで通り放っておいてください』の一言に尽きる。

しかし、流石にそれをこの場で言うほど空気が読めないわけではない。

構われるのも面倒で嫌であるが、それ以上に無用な反感を買うような事をわざわざする必要はない。学校という自分の意志で環境を選ぶことのできない、ある種の『閉鎖空間』ではそれなりに周囲とは上手くやらなければならない。例えばそれが、一般的に言うところの将来の底辺の集まる学校ではなく、そこから遠い位置にある『進学校』であつても程度の差こそあれそれは変わらない。

悠早は別に、周囲の思いは別にして一匹狼を気取っているわけではない。

人付き合いが単純に面倒であり、特に同世代と話するのが苦痛だといっただけであつた。

結局のところ、仮想世界における人との交わりを彼が好む最大の理由は、普段関わることがないような年上の人間との関係が持てる、と言うその一点に尽きると言っても良い。実際に、彼の周囲は優希ことメイリアなどの数名を除けば、大学生以上、レティーシャなどを筆頭に不通に社会人をしているプレーヤーが多い。そう言った人々から聞く話のほうで、余程彼にとっては有意義であり興味深く、面白かつた。

言い換えれば、同級生達との共通の話題が少ないとも言える。

悠早は『ふう……』と息を吐き出す。

纏わり付くクラスメート達の不愉快な視線に軽く吐き気を覚えながら唇を開く。

「こういう状況ですが、『今まで通りに』よろしくお願いします」

こんな一言で今まで通りになるとは悠早も思つてはいなかった。

教室の窓際の最後部と言う多くの学生が羨む立地条件。

この12月一杯の悠早の席は彼にとって最高であり、そこで過ごすのは至福であった。

何故なら教室の中央や廊下側といった喧しい地帯からは隔離され、教師の目が届きにくい——ように見えて実は目立つ——と言うのは、ワイワイガヤガヤと騒ぐのが性に合わない彼にとっては、それに巻き込まれなくて済むのである。

その条件が今でも彼にとって有利に働いていた。

こちらに近づこうとする生徒や、飛んでくる視線に対して確実に睨みを効かせる事ができる。

後方の安全が確保されていることの頼もしさを実感していた。

悠早はふと左の中指に填った銀の指輪を顔の前へかざす。

本来であれば校則違反なのだが、特例で身に付けることを許可してもらっていた。

それは大粒の紫色の宝石——名は知らない——が特徴的なシンブルな銀色の指輪。あまり高価そうな印象は受けないが、安っぽいというほどチャチな作りでもない。数千円では買えないだろうが、2万円以上はしないだろうと予想できる程度のシナモノである。

しかし、それこそが彼の武器であるSOPの『装備解除』状態である。

そして、コマンドを唱えることで武器の形状へ戻る事も確認済みである。

「外れないか……」

悠早はむだだと判っていないながら、指輪を引き抜こうと力を込める。何度試みても無駄であったように、指輪はうんともすんとも動かない。

校則違反と言われても、外れないものはどうにもならない。

「はぁ……」

盛大に溜め息を吐く。

その原因は指輪だけではない。

むしろ指輪よりも、ついに悠早の唯一に近いこの学校での友人が接近してくる気配に気づいた事のほうが大きい。友人と言って良いのかも怪しいが、知り合いでは疎遠すぎるが、友人と言うほどには仲が良いかと言われると微妙な所である。

入学以来、5年間に渡ってつるんでいる、もとい絡まれている男。悠早と結子の通うこの学校は、中等教育学校と呼ばれ中高一貫教育を行っている。

そのため修業年限は6年であり、前半3年間で『中学校』に、後半3年間で『高校』に凡そ相当する教育を行なっている。実際には一貫校である利点を最大限に活用しているため、厳密に別れているわけではない。

ともかく、その男と悠早はこれまでの5年のうち4年間は同じクラスであった。

「悠早、それなんだ？」

「はぁ……」

「何でいきなり溜め息？ ちょっと酷くない??」

面長の顔に細い目と野暮ったい黒縁メガネ。

そして切るのが面倒くさい上に金もつたいないと言う理由で、無駄に伸ばした余り手入のされていない黒髪。前髪だけは切っているようだが、横や後ろは伸び放題と言って良い。

学校の制服であるブレザーがとことん似合っておらず、まだ学ランの方がマシだろう。

要するに典型的なオタクがそこに居た。

悠早から見れば『豚ではないだけまだマシだろう』と言う評価。

「どうでもいい……それと、これはS O P」

「へえ……それってさ、呪文とか唱ええると武器に変わっちゃったりするわけ！？ あと実は一緒に変身したりするとかあるのかなっ！
？ その時があつたらぜひ録画させて欲しい件について」

「……ない」

クラスメートから同情の視線が集まるのが判る。

何を録画したいんだと、碌でもない妄想を脳内でタレ流している洋二に軽蔑の視線を送ってみるが、全く効果はないように見える。
むしろ勝手に精神が異世界に旅立っているようで、戻ってくる気配
すらない。

悠早はむしろ戻ってくるな、と心の底から念じる。

同時に、洋二の指へ視線を移すが指輪らしきものは確認できない。
他にも、レティィシャは『何となく』と言う理由でイヤリング形状を、優希はブレスレットと指輪と言う形で身につけていた事を思い出す。持ち歩く際の形状は最初に1度だけ指定することが可能で、それはある程度自由に選択することができた。

それを思い出し、腕や首周りなどを観察するがそれらしいものは見当たらない。

ただ1回も呼び出していなければ、そうであっても思議ではない。

（しかし、あれを持ってる洋二の姿は……似合わないな）

そんな事を考えながらゴテゴテしい、如何にもゲームらしい武器の姿を思い浮かべる。

眩い輝きを放つ恐らく日輪をモチーフとした装飾過剰の綺羅びや

かな杖を掲げる、刺繍で飾った純白のローブを纏ったオタク少年の姿。明らかに格好とイメージだけで選んだ光魔法——正属性魔法と光属性魔法はTWでは別物——を主力とし、後光を背負うその勇姿を。

悠早は思わず、可笑しすぎて笑いが溢れる。

そろそろ現実へ引き戻すかと、MPを捏ねて小さな魔力の弾丸を創りだす。

これも一部の間ではよく知られたシステム外スキルで海外では『Mana Bullet』と呼ばれる。

日本では一般的には『MP弾』と呼ばれ、開発者の周囲では『ヴェスマー』と呼ばれることが多い。

その効果は『無属性』魔法攻撃であるが、属性攻撃が容易にできることが売りの魔法攻撃でわざわざ無属性攻撃をする必要性はまずないので所謂『ネタスキル』である。売りは、威力の調整の幅も広く、デコピン程度から最大MPの半分を使用した数十ミリ口径の砲にも匹敵するようなレベルまでを打ち分けることができる事だろう。もっとも、最大威力で打った所で、同じMPを使用した他の属性魔法には攻撃力で遥かに劣る。

それに加えて低威力では淡い光を放つだけで、派手なエフェクトもないので宴会芸にすらならない。

精々が、ちょっとしたイタズラ、脅しに使うのが関の山である。

ちなみにだが効果音もない。

「イテッ!？」

洋二は額に直撃を喰らって——空気銃程度の威力だが——ふらつく。

何が起こったのか全く判っておらず、明後日の方向を向いてキョ

口キヨ口視線が彷徨っている。

一部では有名なスキルであるが、普通の大多数の人間はこういった意味のないスキルに興味を示さなかったため、存在そのものを知らない人間のほうが圧倒的に多い。そしてそれは、洋二も例外ではないか、むしろ聞いたことはあっても記憶には残っていない。

「それで、洋二のあれは？」

「朝から絶好調さ、今日もピン……」

悠早は拳大の魔力弾を洋二の腹部へと遠慮なく叩き込んだ。

威力が少々過剰だったようで、その後まる1日彼が死にかけていたのは別の話である。

しかし悠早は別に反省していない。

01（後書き）

年開ける前に更新できた！！

補足

ヴェスマー（V・S・M・R）

可変速MP銃（Valiable Speed MP Rifle）
の略だと巷では言われるが、諸説あり。ヴェスバー（V・S・B・R）のモジリ。

世界樹（イグドラシル）

イメージは『この木何の木、きになる（ry）の超でっかい版。常緑樹で葉は葉になる。』

蓄えられている膨大な魔力が放出されることで、魔力光と呼ばれる青白い光を放つ。夜は綺麗。

昼休みだと言うのに、何故こんなことをしているのだろう、と彼は思う。

悠早は背にもたれかかるようにして存在している『天敵』に頭を悩ませる。

仲が悪いわけではなく、むしろそれなりに良好だと思われるそれ。それは何を食べたらここまで大きくなるのかと評判の、無駄に巨大に膨らんだ胸を首筋あたりに押し付けながら、楽しそうに悠早の銀の髪を弄くり回している。普通の男子生徒ならばアタフタとしてもおかしくない、そもそもそんな経験をすることは滅多に無いだろうが、仮想世界である程度よくも悪くも慣れている彼は、割と平然とされるがままになっている。

今も長い髪を左右にツインテールに纏め、何処から出てきたのかレースの付いたりボンを留めている。

その存在が極めて鬱陶しいのは間違いない。

しかし、今のところ差して実害がないのだから、無理に振りほどくのも悪い気がしてしまう。

机の上に置かれた手鏡越しに彼女の姿を覗く。

癖のない黒髪を肩の少し上あたりで切り揃えたセミロングの黒髪に銀縁のメガネ。

アニメやゲームであれば、間違いなく委員長タイプと言うのが適切な第1印象。

特徴らしい特徴と言えば、無駄に育った胸くらいのものである。可愛いかわ爱不くないかといえば、悠早からすると『まああんなもんじゃね』であり、『化粧すればそれなりに見えるんじゃ?』等とかなり失礼なコメントを持って評される。要するに素材としては悪くないけれど、味付けがよろしくないと言うところだろう。

悠早から見ればいかにも着飾った彼女というのは想像できないものである。

彼女は片瀬 沙奈と言い、洋二と同じくかれこれ5年の付き合いになる。

そんな彼女の視線が右手で突つ伏したままの洋二へと向けられる。哀れみやら嘲笑やら、色々な感情が混じった複雑な表情……しかし、彼女は笑っている。

悠早は何のことやらと窓の外へと視線を背ける。

「悠早、あれは流石にやりすぎでしょ？」

そんな同情めいた、悠早への非難めいた言葉ながら彼女の表情は『いい気味』と語っている。

実のところ、洋二のあの程度のダメージは『ヒール』で全回復させる事など容易であつた。

しかし、『あのままのほうが静かでいい』と言う理由で放置されているのである。そしてクラスメート達もそれを『善』として受け入れており、悠早を非難するものはいない。洋二という人間の普段の行動を容易に察することができる良い証左だろう。

悠早は時折、沙奈に一発打ち込みたくなるのを必死に堪える。

流石に『一応』は女の子（笑）に攻撃するのはという、無駄な理性が正常に機能している。

「神様と言うか、イグドラシルが許してくれるなら、今この場であなたにも一発叩き込みたいところなんですが？」

彼の微妙にドスの利いた声に沙奈は肩をすくめる。

その割には呑気に鼻歌を口ずさんでいる余裕があるのだから、大して効果はない様子。

「ああ、怖い怖い……TW内のホワホワ可愛いユーリちゃんは何処に行っちゃったんだか」

「そんな可愛い生き物は何処にもいないけどね？」

悠早は口調やら振る舞いやらをどうするかと昨日1日随分と悩んでいた。

リアルワールドでゲーム内のように振る舞うのは違和感があったが、この容姿で男言葉で話すのはそれ以上に違和感があつて仕方がなかった。何よりも明らかな男言葉で話すたびに結子に悲しい表情をされてしまったのがそれなりに効いていた。

結局は、可能な限り中性的に話そう、と言う無難な結論に落ち着いた。

立ち居振る舞いについては流石に『それらしく』しないと落ち着かないという結論に至った。

結子の評価は『及第点』である。

そんな悠早を眺めながら、沙奈は年末恒例行事の話を切り出す。

「でも、今年の冬コミのコスプレは完璧だよ、うん。是非ともビシヨの戦闘衣装で売り子やって欲しいんだけど。絶対人目を引くし、売上アップ間違いなし！ ちょうど今回、そっち系の本だし完璧すぎる、私の計画完璧、一片の隙もないわ」

「いやさ、やらないから？」

悠早は『やはり来たか』と露骨に嫌そうな表情に変わる。

沙奈の熱い語りに、クラスメートの冷ややかな視線が集中するの
がわかる。

「やってくれるなら、漏れ無くサークルチケットで入場させてあげ

るからっ!？」

その言葉に心が傾く。

「コミケそのものに目的があるわけでもないが、彼はお祭り事はそれほど嫌いではなかった。

ただ並ぶのが嫌いなためにこれまで参加したことはない。しかし、サークルチケットを使えば並ばず、一般参加者を尻目に悠々と入場できるのは美味しい。流石に何時間も朝の寒い時間帯から並んで待つなど、寒いのが嫌いな――暑いのも嫌いだが――彼から見れば正気の沙汰とは思えなかった。

しかし、それ以上に彼は人混みが嫌いであつた。

そもそも、コミケにそこまで苦勞して行きたいほど思い入れもない。

「……………」

「どう?」

「……………」

「終わったあとに、何処かでお茶を奢ろっじゃないですか」

「……………」

自分でも安いなと思いつつも、悪くもないかと思えてくる。

「今一瞬揺らいだでしょ」

「……………気のせいだね、うん」

ここで釣られたら負けだろうと、悠早はとりあえず否定をしておく。

そんな彼の様子をあともう一押し、と沙奈は彼女の切り札を切ることを決める。

「ちなみに今回の薄い本は、ビショ同士の百合モノです！！一応はR18です、ゲフゲフ」

流石に学校の教室と言う場を考慮したのか後半はトーンダウンしている。

クラスメートの幾人かがピクリと反応した件については、悠早は見なかったことにしようかと心に決める。良くも悪くも沙奈がマンガやイラストなどを描いていることは広く知られており、ネット上でも積極的に公開していて、固定ファンもそれなりにいる程度には彼女は絵が上手い。おまけで学校の催し物などのパンフのイラストは大体は彼女が描いている。

それに加えて何冊かはラノベの表紙なども担当していたりもする。彼女もある意味で有名人なのである。

しかし、それ以前に『お前18歳未満だろ！！』と全力で野暮なツッコミを入れるべきなのかどうなのかと真剣に考えこむ。

「……ああ、これだから腐女子って生き物は」

「ああ？」

悠早は地雷を踏んだらしいと背筋が寒くなる。

「あんなホモ好きの生き物と一緒にしないでくれる？」

「……………はあ」

「ここ10年ほどは完全に腐女子」女オタってされてるけど、本来は腐女子」ホモ好きな連中なわけだよ、おーけー？ 私は、あくまでも、『かわいいおにゃのこ』が大好きなんだよ！！普通のカッブルもいいし、百合もいいよ！！ただし2次元に限る」

「教室で叫ばない」

クラスメートが明らかにドン引きしているのが判るほどに空気が

冷たい。

悠早はとりあえず、心の中で平穏な昼休みを掻き乱したことに對して詫びを入れておく。

しかし、沙奈の言葉は終わらない。

「ホモが嫌いな女子はいない、あれは嘘だ。なぜならわたしや嫌いだ！！」

「はぁ……」

ここで『どうでもいいよ』などと火に油を注ぐ度胸はさすがにない。

「ハアハア……そういうわけだから私を腐女子とか呼ぶな！」

「わかったから、わかりましたから」

そう呟く声には泣きが混じりつつある。

悠早は教室中から集まる冷たい視線に耐え切れず頂垂れてしまう。むしろこの状況で平常心を保っている、保っていられる沙奈や、それが可能な洋二は一体全体どれだけ頑強な精神構造をしているのだろうと常々思つのである。少なくとも、悠早はそこまで強靱かつ周囲を気にしないような精神は持ち合わせはない。

彼はまだまだ一般人であり、そこから外れるべきでないと心に誓う。

「と言うわけだから、売り子お願いね！！」

「了承した記憶はありません」

抵抗してももう無駄だと判りながらも、とりあえずは抵抗せずにはいられない。

幸いないのは、そんな彼に直接向けられている視線は『同情』が

明らかに多いことであらう。

そんな気が重い悠早を尻目に、沙奈が真剣な表情で考え込んでいる様子が鏡越しに映る。

「今回は私もコスプレしようかなあ……せつかく衣装あるんだし」

そんな言葉が沙奈の口から飛び出す。

悠早は全力でその姿を想像して見るが、微妙な表情に変わっていない。

仮想世界における『聖職者』系資格の所有者には2種類の衣装が用意されている。

一つ目は『儀式装束』と呼ばれる如何にも聖職者然とした印象を与える物であり、純白のシルクっぽい生地を使用した全身をすっぽりと覆うデザインのものである。地面に裾が引きずるほどに長く、機能性と言う言葉からは程遠く戦闘にはまるで向かない。メイリアこと優希などはこの衣装を平常時は好んで着ていた事を悠早はよく覚えている。

もう一つが『戦闘装束』と呼ばれるもので、動きやすさを重視したデザインの物であり、一般的に防具・装備と言った場合にはこちらの衣装を指す。2次資格である『Priest』ならば黒を基調とした修道服であるが、全体的に身体のラインがはつきりと出る上に、スリットが際どいなど動きやすいが、余り好んで着たくないと言うのが悠早の感想であつた。これが『Bishop』になると生地が白と青を基調とした随分と華やかな物に変わる。

そして沙奈は2次の『Priest』が現在の地位であつた。

悠早から言わせれば、『3次元だと大概に合わないよね、これ』と言うシナモノ。

そんなこんなで自然と同情一杯の表情に変わってしまう。

「……………」

「……………何その可哀想なものを見るような目はっ！いくら自分が可愛いからってひどくない!?」

悠早は随分と思考が顔に出やすいらしい。

彼はすぐに気を引き締め、何のことやらと言った表情に戻すが既に遅い。

「ああでもギリギリ有りと言えば有りなのか……でも、あの服って結構際どいよね？」

「じゃかましい！」

沙奈の絶叫が教室中に響き渡った。

「まったく……兄さんは」

諦めにも似た呟きは誰にも聞かれることはない。

そんな冬場の冷たい空気を更に凍りつかせるアホな遣り取りを、結子は呆れ顔で眺めていた。

沙奈の腐女子じゃないトークの辺りからドアの付近に居たものの、顔を出すタイミングを測り損ねてそのままズルズルと今までその場で待機していた。しかし、そう言う時ほど兄は片っ端から地雷を見事に踏み続けているのだから、彼女としては呆れるしかない。内心で『何でそこでそれを言うんですか!』やら『それは違います!』やら、ツツコミを入れるのを我慢するのも楽ではない。

悠早のクラスメートからの生温い視線が痛かったが、ペコペコと頭を下げて乗り切った。

むしろ彼らとしては、結子に適当なタイミングでさっさと間に入って欲しかったのであるが、そこまでは上手く伝わっていなかった。ともかく、沙奈の絶叫は彼女に丁度よい介入の機会を与えた。

ツカツカとわざとらしく足音を立てながら結子は二人の元へたどり着く。

「沙奈先輩と姉様は相変わらず騒がしいですね……」

何時になく随分と厳しい表情の結子に悠早はただ怯える。

言い訳を必死に考えるが、そもそも自分は悪いことは何もしていないという結論にしか彼の思考回路は行き着かない。

それを言うのは明らかに命取りだと、それだけは確実だと言えた。

「あのね、ゆい……騒がしいのはこいつだけ」

「おお、ゆいちゃん。素晴らしいいいタイミングでいいところへキ・タ・ワア」

そんな空気を讀まないのが、後ろの沙奈という生き物である。

結子は危険を察知し、仮想世界で身についた軽やかな且つ優雅、見事なステップをもって身を翻す。

その姿が男子生徒たちの視線を惹きつけるのに彼女は気づいていない。

「姉様、私帰りますね？」

「ゆいちゃん、逃さないからね……？」

「……ヒッ!？」

平熱の低い沙奈の手が結子の手首をガシリと掴む。

見事に三日月型を描く薄い唇に、ボブカットの前髪が彼女の瞳に深い影を落とす。

恐る恐る振り返った結子が思いついたのは『髪が長ければ間違いなく、サダコ』と言う、大概大概どうでも良いことであつた。

悲鳴が『キヤ』と言うような可愛いものでなかったのは、純粹な恐怖から来たものであった。

「沙奈先輩、それでご用件は何でしょうか……？」

「あのね、ゆいちゃん」

「はい」

結子はゴクリと息を呑む。

「冬コミでコスプレして売り子してもらえないかな？ サークル入場チケットに加えて、終わった後のお茶も奢っちゃうよ？ 更衣室使用料はもちろん私持ちで！」

肩がガクリと砕けそうになるのを必死に堪える。

横目に見える、遠い目でイグドラシルを見つめる悠早の表情、そして彼女に集まる生温い同情の視線が全てを物語っていた。女子生徒などからは、時折『可哀想』などと言う言葉が聞こえてくるのがわかる。

結子もまた、それなりにシステム外スキルは鍛えていた。

彼女は別にオタクというほどオタクではない。

確かにTWが趣味になっただけはいるが、特にアニメも見なければマンガを読みあさるようなこともなく、それ以外のゲームも殆どやることはない。それでも、ネットの様々なサイトを巡る中で得た『どうしようもない』知識だけはそれなりに豊富であった。少なくとも沙奈の発言の意味を正確に理解できる程度には彼女はオタク方面にも詳しい。

コミケというものにも興味はあっても、特に積極的に行きたいとは思わない。

でも行く機会があるのなら一度くらいは行ってみたい。

一般人でないとは言わないが、一般人であるとも言いきれない。
そういう類の人間であつた。

「ちょっとだけ心惹かれるものはあります……」
「うんうん、そうだよね」

沙奈は何度も嬉しそうに頷く。

結子は息を吸い込み、それを一気に吐き出すと口を開く。
こう言う時の決め台詞を、結子は一つしか思い浮かばない。

「だが断る！」

凜とした声が静まり返る教室に響き渡った。

02（後書き）

すごく中途半端な所でぶつたぎりでした、文字数的な関係で自分ルールってやつです、すいません（棒読み）
次回でオチをつけます（マテ

逐一オーバーリアクションだと、悠早は顔をムンクの叫びのようにしている沙奈の顔を眺める。

どうやら、結子に断られたことがそれなりにショックではあったらしい。

「エエ……………お姉さん泣いちゃう」

「勝手に泣いててください！！」

古典的にオヨヨと目を右手でこすりながら、アホな嘔泣き声を上げている、

それも、鬱陶しいことに悠早の頭の上で、である。

後頭部で頭突きでもして顎力ツクンを力マしてやろうか、でも痛そうだなと微妙にやる気が無くなる思考を繰り返す。しかし鬱陶しいのでいい加減に振り払いたいのだが、適当にお手軽な方法が見つからないのが悲しい所である。

しかし、突然に鏡に映る沙奈の表情がニパツと明るくなる。

（またろくでも無い事を……………）

こいつが女でさえなければ顔面に全力のグーパンチを叩き込みたくなるような表情。

お友達パンチなどと言う生温いものでは到底足りない。

そもそも悠早としては沙奈を友人として認めるつもりは根本的にないのであるが。

横目に見る結子も揃って随分と険しい表情をしている。

「あ、ところで……………」

「なに？」

「何ですか、先輩」

二人の視線が一点に集まる。

そんなに見つめられると照れちゃう、とか宣うて居たのが聞こえた気がしたが、悠早は聞かなかった、聞こえなかったことにする。つくづくこいつは社会に出してはいけない生き物、クリエイターにでもなっていてくれた方が社会のため、世のため、人のため、だと彼は思う。

結子は、半ばキレ気味なのを抑えながら後ろ手に拳を握る。

その目が笑っていない笑顔がなんとも恐怖を誘う。

それにも気づかない、気づいていても気にしないのが沙奈という人間である。

「メイリア様とかコミケ来る予定とかないのかな！？」

二人は次に来る言葉を確信し、目を合わせる。

「……………ゆい、これ半殺しにしてもバチ当たらないよね？」

「そーですね」

悠早は肺の中の空気を全て吐き出す。

回復系の技を殆ど取得していない洋二と違って、こんなでも沙奈は仮想世界では支援を専門とする『Priest』である。一応はそれなりの回復能力があり、最悪でも彼自身がヒールをかければいいかと、半ば諦めた表情になる。

聖職者系のヒールって便利だ、と悠早はしみじみと思う。

内蔵にはダメージが行かないようにちょうど横隔膜の辺りを目標

にして魔力弾を叩きこむ。

それも明らかに洋二に打ち込んだものよりも高威力なものを。

「メイリア様とユーリの超美少女同士の絡みとか、マジで鼻血ものなんですk……………」

「はぁ……………」

沙奈の口から『グベツ』と言う醜い声が漏れる。

彼女もまさか腹部に向けて攻撃が来るとは予想していなかった。ヴェスマーは呪文を必要とせず、尚且つ慣れればであるが、自身を中心にして360度どの方向へも打つ事ができる。それを応用することで、全周に衝撃波モドキを発生させて雑魚を薙ぎ払うといった簡易範囲魔法としても使うこともできる。

知らない人間相手の攻撃には意外と使い道がある。

沙奈の身体が崩れ落ちて床にへたり込む。

タイミングがピッタリであったようで、肺の中の空気を全て吐き出したのかゲホゲホと苦しそうにしている音が聞こえてくる。

クラス中から『良くやった』的な視線が向けられている。

「姉様」

しかし、結子の表情は険しいままである。

「……………うん？」

「もう少し友人は選んだほうがいいと思います……………」

全く以て反論の余地が無い。

「絡まれてるだけなんだけどね!？」

悠早は無意味と理解していても、言い訳だけは欠かさない。

もっとも、言い訳にすらなっていないが。

結子の冷たい視線を一身に受けながら、背後で蹲ったまま咳き込み続けている沙奈へ視線を移す。腹部を抑えたまま小さくなっている彼女は流石に哀れで、少し強すぎたかと雀の涙ほどの同情を向ける。

そんな彼の視線に、『何をしたのよ！』と恨めしげな表情で睨みつけてくる。

洋二が突然『毒デムパ』でも受信したかのように起き上がる。

突然の問題児の復活を誰一人として喜ばないどころか、露骨に嫌そうな顔をする人間のほうが多いあたりにこの男の人徳のなさが判る。そのあまりの人徳のなさのお陰で、悠早はどちらかと言えば巻き込まれている被害者という目で見てもらえるので助かっているのも事実であるが。

洋二が格好をつけて——全くついていないが——メガネを軽く押す。

「いやいや、レティー様に弄ばれる悠早ってのもある……」

ドンという椅子が倒れる衝撃音と共に、洋二が後ろ向きに倒れていく。

教室内で拍手が沸き起こり、よくやったと賞賛の声があがる。

悠早は立派に一仕事したと満足気である。

「ところで、ゆい？」

「はい」

「用事はなに」

悠早は妹が何故わざわざ上級生の教室に来たのかを聞いていなかったのである。

結子はそうそう、と胸の前でパンと手を叩く。

「えっと、英和辞典貸してください」

二人しかいない静まり返った教室内。

BGMはペンの走る音と、ニュースを読み上げる男性アナウンサーの声。

優希は何をするわけでもなく、ただ呆然と空模様を眺めていた。昼ごろまでは晴れであった天気は、いつの間にか曇へと変わり、今では分厚い雲が空を覆っている。そして世界樹の上部を完全に多量に隠しているところから見ても、雲の遥か上にまでそびえる大樹の巨大さが解るといふもの。

空気は一段と冷え込み、一桁台前半だろうといえるほどの寒さ。

そして、何よりも天からちらつく初雪が、より一層その冷たさを引き立たせる。

灰色の空を背景に窓に映る、随分と変わった自身の姿。

今時、随分珍しくなった深い黒色のセーラー服に赤いタイが映える。

それに比べて、その表情は無感情と言うのが適切なほど乏しく、生気のない白い肌は血の気が感じられない程である。今、写真にその姿を納めた写真を人々に見せて、出来の良い西洋人形か何かだと言われれば多くはそれで納得してしまうかも知れない。

文句なしの美少女の姿は未だに現実感に乏しい。

その辺りは、所詮は仮想世界の存在である証左かもしれないと優希は思う。

『警察庁の発表によりますと、18日以降に発生した怪物事件は国内だけでも既に37件、死者326名、負傷は4500名を超えたとのことです。また、この異常事態に対し政府は自衛隊の追加派遣を決定し、警察への重装備の配備を検討しているとコメントします。』

「へえ……」

携帯のニュースから流れるアナウンサーの声は内容に比して随分と淡々としている。

その仕事人らしさはさすがは国営放送と褒めたたえて良いと彼は思う。

少なくともヒステリックに叫び、わざわざ不安を煽るような物言いばかりする各種民放のバカどもよりは余程高評価であった。ニュースと言う物を根本的に勘違いしているとは思えない、その体質は数十年前から何一つ変わっていない。

そう、彼の父親は呆れていたのを思い出す。

「ふう……寒いです」

いい加減に公立高校にもエアコンくらいは導入して欲しいと優希は切実に思う。

ここ20年ほどの間に創設された、改増築したような学校であれば導入されているところもあるそうであるが、文明の利器に頼れない旧態依然とした状態はなかなか変わらない。古めかしいストーブは存在しているが、たった二人しかいないというのに付けるわけにも行かない。

こう言う時に、火属性系の魔法スキルを上げておけばよかったとつくづく感じる。

今更言った所で遅いのであるが。

そんな彼の独り言に近くの席に腰掛けて、日誌と格闘している彼女が気づく。

優希から見れば、まあ凡そどこにでも居るちよつと背伸びをしている女子高生、と言った風貌の彼女。しかしギャル系というわけではなく、運動系の部活動に所属している活発な印象を受ける……その程度の認識でしかない。

彼も大概大概に他人への興味が希薄であつた。

どちらにせよ、少なくとも彼よりは『リア充』と言い切れる人種である。

「本当だねえ……明日はまる１日雪だつて言つてたし」

「寒いのは嫌いなんですけど、ね……？」

「私は好きだけどなあ、冬って……ちよつと寂しいけど、悪くはないと思う」

優希は冬も夏も、そして春も嫌いだった。

暑いのは耐えられず、寒いのは着こめばいいとは言え限度はある。春が嫌いというのは珍しいと言われることが多いが、単純に花粉症があるからというだけのことで大した意味はない。結論としては１年の４分の３が嫌いな季節であり、快適に過ごせるのは精々１０月と１１月の秋、そして初夏の５月の３ヶ月ほどに過ぎない。

真介などは『その思考が悪い』と言うが、嫌いな物はどうにもならない。

（可愛い文字を書くね……）

彼女は黙々とペンを走らせる。

優希はそんな彼女のペン先を何となしに見つめている。

丸みを帯びた丁寧でありながら可愛らしい文字を見ながら、優希は自分がやはり男なのだと実感する。幼い頃から硬筆を習わされていたおかげで、字が決して下手なわけではない。むしろ模範的といっても良い行書体はどうしても堅苦しい印象を与える。これが英語であれば、その筆記体は流麗で美しく、割と女性的だといえるかも知れない。

教師受けが良いが彼はあまり好きではない。

並んでいる2種類の文字を見るとその違いがはっきりと見て取れる、

「よしっ、終わった！」

「おつかれさま」

彼女は日誌で机を叩き、トントンという小気味よい音を立てる。

「藤宮さん、日誌の提出お願い！」

「わかりました」

優希は彼女から光沢のない時代を感じさせる学級日誌を受け取る。私立学校に進学した中学時代の友人の話を聞けば、IT化がほぼ完了していると言うのにこの学校のアナログさはいつになっただら変わるのかと考えこむ。一部の人達に言わせれば、そのアナログさ加減が良いらしいが、彼にはその感覚はわからない。

あと数十年もしたらまた違うのかも知れないが。

そんな思考の海に浸っていると、彼女は革製のカバンを掴み立ち上がる。

「それじゃあ、またね！」

「はい、また」

パタパタと随分と短いスカートを翻らせて、彼女は教室から駆け出していく。

その下に青紫色のハーフパンツが覗いていたのに、優希は苦笑いする。

両腕で学級日誌を抱えて、ゆっくりと階段を下っていく。

昇降口で何やら話し込んでいる数名の男子生徒の中に、優希はよく見知った顔があった。

取り込み中の邪魔をするのも悪いだろうと、本音は面倒くさいことになりそうなので関わりたくないの、気づかぬふりをして素通りをしようと試みる。これが先週であれば気付かれずに通り過ぎることも可能であつただろうが、今の優希は何よりも目立ちすぎた。

一人の男子生徒がその存在に気づき好奇の視線を向けてくる。

慣れつつあるとは言ってもウザいことには変わりはない。

しかし、それなりに出来た人間である彼は嫌な顔の一つも見せない。

「お、メイ。帰りか？」

友人の真介もそれに気づいたようで、手を振って呼びかけてくる。キラリと白い歯の覗く、無駄に爽やかなイケメン面が何とも小憎らしくて仕方がないが、今はぐつと堪える。別に意識して格好をつけているわけでも、悪意があるわけでもなく、彼という人間の自然な振る舞いがこういうものなのだから文句を言っても仕方がない。しかし、女と言うよりも『女キャラ』的な視線で見ると胡散臭くて仕方がない。

この感情は何なのだろうと優希はしみじみと思う。

「ええ、これを提出したらその予定ですよ」

真介に目で合図を送り、軽く会釈をしてそのまま通りすぎる

「そうかそうか……ちゃちゃっと出して帰りますか」

真介は適当に挨拶を済ませて、早歩きで追いついてくる。

特に並んで歩くわけでもなく、数歩後ろの地点を付かず離れずといった距離を保っている。

差詰め、お姫様と従者と言ったところだろうか。

「そう言えばさ、ユーリってどうだったよ？」

「ユーリですか？ そうですね……多分と言いますか、十中八九、中の人は男の子でしょうね」

そんな事は、実際に会うまでもなく判っていたことだ。

優希はユーリ——キャラ名はユリアネだがユーリと呼ぶプレイヤーが多い——が初心者であった頃からよく知っている。そして、これこれ3年近いその関係を一言で表現するならば愛弟子とでも言うのが適切なほどには親しく、付き合いも長い。

そして、彼がW O Yを手に入れるまで、長く愛用していたS O Pを託したのもユーリであった。

出来の良い弟子かと言えば、それは相当に微妙な所であったが。

そしてその妹として紹介された『ユイ』は女の子だと何となくすくに判った。

彼から見たユーリは少々『良い子』過ぎたのである。

「まあそりゃそうだな……うん」

「なんですか？」

「いや、あんな可愛い子が女の子なわけがないなと、ね」

「…………… なんと言いますか、身の危険を感じますが気のせいでしょうか？」

友人の言葉に優希は不躰に嫌な顔をする。

この姿で、ここまで感情を発露するのはこの友人に対して位のものである。

「気のせいだと思うぞ」

「だといいいですけど……」

「まあ、あれだ」

「？」

それに続く言葉は嫌な予感しかない。

「メイは可愛いんだけど、何て言うか怖くて触れないってかな……
こう壊れやすい人形っぽいっていうか？ ユーリのほうがまだ身近
ってか、人間っぽい感じがして、見た目はオレ的には好みだなあと
まあもうちょい、あと3、4歳幼ければ完璧なんだが……」

「はあ……」

雪がちらつく凍えるような空気が、氷点下にまで急速に冷え込んだように感じる。

全身に鳥肌が立ち、凍死してしまうのではないかと感じるほどに体温が下がるのが判る。

露骨にその歩みを早めて距離を取る。

「メイ、何でそこで引くよ！？」

「私は変態さんには関わらないことを是としていますから」

優希は『フン』とそっぽを向いて歩き続ける。

03（後書き）

この話の中で1番の常識人は多分『優希』だと思います。

オチがオチになっていないような気が……むしろ蛇足、げふげふ。

しかし、6万字書いてようやく悠早のキャラ名登場です。

ゲーム内での名前とかその辺の細かいところはそのうち書くかも。

12月23日の木曜日。

明日はクリスマス・イブであり街は何だかんだでお祭りムードである。

悠早は学校から程近い飯田橋にある、チェーンのコーヒーショップにいた。

雰囲気もムードも何もない店であるが、二人のいる一角は別世界のようにある。

そして目の前には、美男美女ばかりのTW内でも不思議と人目をひくと評判の彼女、メイリアこと優希が、何処のお嬢様ですかと言いたくなるほど上品に腰掛けている。英国や仏国の上流階級、貴族のお嬢様・お嬢様と言われても全く違和感がない。

その一挙一動、優雅な仕草に悠早も不思議と目を奪われてしまう。路地裏の緑に囲まれた小さな公園の一角、半球状のドームを戴くガゼボ——西洋風あずまや——の下での光景を思い出す。周囲に多数の猫を従えて、白亜の椅子に腰掛け、いつも優雅に本を読んでいた姿。

午後の一時を人知れず静かに過ごす大司教。

優しい声音で『ごきげんよう』といつも迎えてくれていた。

悠早にとっては戦闘中のイメージよりもそちらの印象のほうが余程強い。

その現実離れた光景に比べれば、現状は随分と馴染みやすい。しかし、時折その姿が今の彼女に重なる。

「それにしても、日本はまだ平和でいいですね」

「平和と言えば、確かに、まあ平和なんでしょうけど……」

世間一般は断続的に発生する異変のお陰で騒がしくはあるが、それでも経済活動は止まらない。

優希はふと何かを思い出したように唇を開く。

「ユーリ、昨日のニュース見ました？ イタリアでしたっけ……」
「大変らしいねえ」

異変が始まって以来、今のところ池袋を除けば最大の災厄の発生があった。

全世界のテレビ局がそれをトップニュースとして報道した。
それまでの断続的かつ小規模な『魔獣』騒ぎとは比べものにならない規模の被害。しかも、それは今後も似たような『異変』が発生する可能性は余りにも高いと、はつきりと断言することが出来た。
だからこそ全世界が恐怖し、混乱の中にあると言つて良い。
それは日本も決して例外ではないのであるが、あまり大きな騒ぎにはなっていない。

北イタリア、ヴェローナ近郊の街でそれは発生した。

過去に土葬された大量の遺骨、それが『Skeleton』系のアンデッド・モンスターとして大量に地上に湧き出したそうである。それは一晩で街を丸一つ文字通りに『全滅』させ、更には死した街の住人達をゾンビという形でアンデッド化してその数を増したのである。今では完全なる死者の蠢く街へと変えていると言つ。

バイオハザードも真つ青な状況が現実を展開していた。

その状況は上空からの偵察によって、街は完全に不死者達に占拠された事が確認された。

更に郊外へと歩みをすすめる姿も目撃されている。

「よりにもよってアンデッドですからね……TW仕様だと相当に厄

介なことになります」

「ああ、そう言えばそうか……」

「ええ、あれは……」

二人は顔を見合わせる。

仮想世界、TWにおけるアンデッド系モンスターは、他のゲームとは大きく異なっていた。

一般的なRPGを含めて、モンスターにしろプレイヤーキャラクターにしろ『HP』が存在し、0になると『死』と見なされて存在が消滅するのが普通である。それはTWにおいても基本的には踏襲されていたが、いくつかの属性を持つモンスターはこの決まりが通用しなかった。

もちろんTWにおいても、7年前のゲーム開始当初は他のゲームと同様の仕様であった。

しかし何故か、2年前の事実上のリニューアルにも近い大規模アップデート後にそれが変化した。

特殊属性として『不死属性』及び『霊属性』を持つ魔物は通常攻撃では倒せない。

物理攻撃や一般的な魔法攻撃ではHPは1までしか減らすことができない。

それでは倒すためにはどうすれば良いかといえば、完全に燃やし尽くしてしまうか、原型を留めないほどに破壊すると言うのが『誰でも可能』な対処方法であった。ただ、それは余りにも手間がかかるため、まともに狩にならない。

そこで最も簡単な方法は『聖職者』系資格を持つキャラクターが使用できるテクニクの中で、『浄化』効果を持つもので止めを刺すと言うものである。例えば『Temple Knight』が使

用可能な各種聖属性攻撃や、プリーストの『Aspersio』によって聖属性付与した武器による攻撃などがある。

この謎仕様について、開発元はこれが本来予定されていた『仕様』であると言い張っていた。

当初は多くのプレイヤーが反発したものの、今ではそういうモノだと認識されている。

もし、それがそのまま反映されていた場合には聖職者資格所有プレイヤーの数によっては、効果的に對抗するのが極めて困難になることを意味している。

優希などは近代兵器による爆撃で対処できるのではないかと考えている。

最悪の場合は『核』でも使用して焼き払えば良いのでは、などとも思っているが。

それがどの程度現実的かといえば、全く現実的ではない。

「あれは日本で起こり得ますからね……」

「そうなんです？」

「ええ、日本も江戸時代までは割りと土葬も一般的でしたから」
「なるほど」

高火力を生み出すことが容易でなかった時代では、何処の国でも『土葬』が一般的であった。

当たり前であるが人体の70%は『水』であり、水を多数含む人体を燃やすのには莫大な燃料が必要である。産業革命以前の時代では『火葬』は困難であり、それは日本でも同じである。

今でこそ火葬が一般的であるために忘れがちなことである。

「でも、日本はまだプリースト系プレイヤーが多かったので、まだマシだと思いたいですね」

「ああ、そう言えば海外はメイジやファイター系が多数ですっけ」

悠早はタブレット端末で去年のワールド統計を眺める。

全世界、各地域、各国ごとのプレイヤー統計情報は運営会社が半年に1度であるが、かなり詳細に公開していた。キャラクターの男女比に始まり、各資格所持者の比率、ランク帯情報などが代表的な項目であり、各国のプレイヤーが好むクエストやダンジョンといった物も含まれていた。

流石に世界で5000万を超えるユーザを有しているため、その情報はそれなりに有意義である。

結論としては、凡その他のゲームと似たような傾向を示す。

日本、韓国、台湾辺りでは比較的、メイン・サブのどちらかで『Priest』を始めとして『支援』キャラを持つ、また魔法職のプレイヤーの比率が高い。逆に欧米だと支援系専門のプレイヤーが少なく支援も少し出来ますという程度の魔法職や、近接戦闘を好むユーザが多いと言う結果が出ている。

それは世界ランク上位プレイヤーを見ても似たような傾向がある。

「その時はその時ですけど……ね？」

「ハハハハ……」

悠早は近代兵器の威力でどうにかなることを願わずにはいられない。

日本国内で大量の砲弾が飛び交うような光景は余り想像したくないが……と言っても、既にそれは池袋近辺で実現してしまっている。それも戦力増強確定のおまけつきである。

何時もの仮想世界のような何気ない日常の雑談。

それがログインできなくなってまだ一週間も経っていないという

のに、数ヶ月も顔を合わせていなかったと思えるほどに懐かしく感じられた。以前はこうして特に何をするわけでもなく、時には何も話すことさえなく静かに揃って本を読む、そんなただゆったりと流れていく時間を愉しんでいた。殺伐とした世界も、一步中心を外れればいくらかでもそんな場所があった。

仮想世界は現代人が失った『ゆとり』を取り戻すには最高の環境だったと、今の悠早は思える。

この所慌ただしかったこともあって、こうした時間が随分と恋しい。

しかし、悠早は今日呼び出された理由が結局なんなのか気になって仕方がなかった。

「ところで、メイさん？」

「はい？」

「なにか話があるとかメールにありましたけど……？」

優希はそうでした、と表情を緩ませる。

同時に何かを期待するような、そんな目付きをしているとも悠早は感じ取る。

「そうそう、ユーリは年末にコミケとか行く予定はありますか？」

悠早はコミケという単語にガクリと肩が崩れ落ちる。

優希の表情が『あれ？』と不安気なモノに変わっていく。

「……………はあ」

「あらら……聞かないほうが良い事でした？」

そんな申し訳なさそうなメイリアの表情に、悠早のほうが悪いことをした気分になる。

「まあええ……はあ、知り合いに戦闘装束を着て売り子してくれと言われましてね？」

「それはそれは……」

「………つて、メイさんも行くんですか？ コミケ」

「私も実のところ似たような理由でして……従姉の手伝いに、何が楽しくてリアルであるの衣装を着ないといけないのか」

「お互い大変で………」

要するに、旅の道連れが欲しいということらしいと理解する。

実際、悠早も彼一人だったならば絶対に全力で拒否していたところであつた。

何せただ参加するだけでなく、『コスプレ』と言うおまけイベントが漏れ無く付いてくるからであり、自分一人——沙奈は人数に入っていない——であの中に放り込まれるのは勘弁して欲しかったのである。

これについては、結子が最終的に折れたことで参加することを決めた経緯がある。

「でも、私はもう3回目なのでそれなりに慣れていきますから」

「慣れたくないんですが？」

メイリアはバツが悪そうに目を逸らす。

「なぜ、そこで目を逸らすんですかっ!？」

「………何故でしょうね」

優希は優希で色々と複雑な心境らしい事を察する。

何度も参加している人間だからこそ色々と思うところもあるのだろつと、悠早は勝手に理解しておく。

彼としては、終了後にすごい勢いでまとめサイトに載せられそうなのが嫌で仕方がない。

コスプレ広場とやらには近づかないようにしようと心に誓う。

「あと、ジャンルのにはTWでいいんですね？」

「そうみたいですけど？」

「それならご近所さんかも知れませんが、よろしくお願いしますね」
「いろいろお願いします……はあ」

仲間が増えるのは喜ばしい筈なのに、嬉しくないのが不思議で仕方がない。

先ほどまでと打って変わって肩の荷が降りたのか、嬉しそうなメイリアを見ると『それも仕方ない』と思えてしまう。それだけで色々と許せてしまうくらいに彼女の笑顔は眩しい。そして、自分が少なくとも『身内』として認められていることにささやかな幸せを感じる。

悠早の打算的には『いろいろと借りもあるし』と言う話になる。

「あまり溜め息ばかり付いていると幸せが逃げてきますよ」

「もう数年分は逃げた気がするのですがもう今更だと思えますけどね」

悠早は窓の外へと視線を背ける。

すると仮面ライダーのショッカーのように、人が放物線を描いて宙を飛んで行く。

「……………ん？」

悠早は見事な吹き飛びっぷりだと、変に感心した様子で吹き飛ばす男の姿を目で追いかける。

汚い金髪のいかにもチンピラ、社会の屑、底辺と言っただらしない服装。

男はガードレールに背中から激突し、これまた見事な海老反りを見せた後に転がって止まるが、手足をピクピクと痙攣させており起き上がる気配はない。一見すると大きな外傷はないように見えるが、彼にははつきりと内蔵の何処かにダメージが入っていることが判る。腹部に正面から随分と高威力の攻撃を食らったのだろう。

（魔術攻撃……プレイヤーが居るのか？）

悠早はいざという時のために周辺一帯に索敵の網を張り巡らせる。それに対して、優希は大して興味がない様子で、素知らぬ顔で力フェラテを味わっている。

（メイさん、落ち着いてるなあ……）

数秒後に更にもう一人、数秒後には一名の追加が入る。

二人共揃って一体何が起こったのか判らないと言った表情をしているのが見える。

彼らも地面に激突して無様に転がる。

起き上がってくる様子はなく、一人は仰向けの姿勢で血に塗れた口を金魚のようにパクパクとさせて、荒い息をしている。転がっている三人ともが致命傷ではないものの、全治数週間以上の重症を負っている。

悠早は助けに行くかどうか悩む。

それ以上に、止めに入るべきかが大きな問題であった。

「その必要はありませんよ、ユーリ」

優希は小さく首を横に振ってその考えを否定する。

「そうですか……」

「別に聖職者資格を持っているといってもTWの中の話……リアルでは関係のないことです」

「……………」

「少なくとも、私には『あれ』に助ける価値があるとは思えません」
「まあ、そうかもですが……」

悠早から見ればこれは一方的な暴行以外の何物でもない。

別に彼が正義感の塊であるというわけでもなく、どちらかと言えば日和見主義的であってもこれを見過ごしてはいけないようなそんな気がしていた。何が行われているかを正確に把握しているからこそ、曲がりなりにも『法治国家』である日本である以上は止めたほうが良いのではないかと思っていた。

眼の前で行われているのは一言で表現すれば『私刑』の類ではない。

それも、ここ数日で全国的に広く見られるようになった凄惨極まらない復讐劇である。

それまでに受けた『イジメ』の苦痛、苦しみを何倍どころか何十倍にも増幅しての容赦のないお返し行為。ただ単純に物理的な攻撃による短時間のものだけならまだ可愛いと言える。中には回復系テクニクを持っているプレーヤーによる、攻撃と回復の無限ループを使用した数時間以上に渡るような拷問も各地で発生している。

治癒魔法を持ってしても、完全に傷が癒えることはない。

代表的な例を挙げれば、表面的な傷は治せても失われた血液は戻らない。

ダメージはゆっくりと、しかし確実に蓄積し身体を蝕んでいく。しかし、その回復テクニクの治癒能力の不完全さが、まだ救いとなっているとも言える。

少なくともマンガやらエロゲやらでよく見かけるような、完全回

復を前提とした永久の攻めは不可能なのだ。どれだけ治癒系テクニクが高レベルでも、長くて4、5時間で限界であるらしい。

それでも、最終的に心が壊れてしまった人間も少なくはないと報道されている。

そうでなくても、二度と日常生活を送ることが困難なほどに身体を破壊されるのが標準である。

今ではすっかりお茶の間の常連となっている。

甲高く耳障りな女の悲鳴が聞こえてくる。

しかし、周辺一帯の道行く人々は誰一人として彼らを助けようとはしない。

関わればどうなるかを誰もが知っている。

この一帯でこれを止められるのは恐らく二人しか居ない。

「今は『彼』の好きなようにさせてあげれば良いでしょう」

そう静かに言葉を紡ぎだす『メイリア』の瞳は笑っていない。

彼女は明らかにこの状況を肯定しているように見えた。

「でも……アレのせいで評判悪くなるのは………流石に」

「今更だと思えますよ？」

ここまで感情のない彼女の声を聞くのは、それなりに付き合いの長い悠早も初めてだった。

その表情は人形のように無機質で余りにも冷たい。

04（後書き）

相変わらず半端な所でぶった切り。

この後の公開処刑を書くかどうかで悩み中、悩むなって？

↓なくなりました。

悠早は全身はたつぷりと湯を張った浴槽に身体を横たえる。
流れるような銀髪も、今は頭頂部にタオルで纏められている。

温まって平時よりもほんのりと桜色に色づき、血の気のある肌は健康的で艶かしく見える。

ほんの1週間ほど前まではギリギリであったバスルームそのものの規格も、身体が全体的に小さくなった今となつては随分と余裕がある。170半ばあつた身長も今では162しかなく、体積的にも体重的にも7割程度でしかない。随分とコンパクトでありながら、高性能と言つ日本製品のようなスグレモノである。

贅肉のない均整のとれた身体つきは女であつても見惚れるほどと結子は表現する。

と言つてもガチガチのモデル体型というわけでもなく、スリーサイズを測つてみた結子曰く『中途半端に現実的なラインを狙つて来ましたね……兄さんらしいです』と何とも微妙な評価を下していた。追加するならばウエスト50センチ台後半が現実で標準だと思つているような、そんな意識が夢の中のオバカさんよりは数段マシなのだそうだが、何がマシなのかはよくわからなかった。

そして、冬場でも瑞々しく、シミ一つない白磁のように滑らかな肌は水を弾く。

それもまた、羨ましくて仕方が無いらしい。

彼が言えるのは、現実よごめんなさい、と言つ程度である。

「はあ……」

悠早は天井をボーッと見つめながら溜め息を吐く。

何時もなら、思い切り身体を伸ばしてリラックスしている所だが、今日はとてもではないけれどそんな気分にはなれなかった。

夕方の光景と、彼女の表情が脳裏にこべり付いて離れない。

女のようにみつともない悲鳴をあげながら、順番に身体の各部を破壊されていく男達の姿。

手首、足首はまず最初に1撃のもとに粉碎され、それに続いて徐々に身体を中心へと近づくように骨を粉碎していく。顔面も腫れ上がり、鼻の骨も折られ、ほぼ間違いなく顎の骨も砕かれ、歯は全て抜け落ち、最後には原型を留めていなかった。

あれでは確かにもう2度とまともな生活は送れない、それは間違いがなかった。

そして、『彼』に引きずられるようにして路地裏から引き摺り出された女の姿。

全裸にひん剥かれ、何もかも公衆の面前に晒された上で——その時点で既に両足両足の腱は切られており自力で動くのは困難だった——、彼は女達を犯しはしなかった。代わりに、最初に何を思ったのか性器を破壊すると言う行動に及んだ。

その時の絶叫は道行く人の全てが、その歩みを止めたほどに強烈なものであった。

最終的には男たちと同じ道を歩んでいた。

本能的な恐怖に立ち去る事も出来ず、ただ立ち尽くす人々の姿。警官すら『何も』しなかったし、出来なかった。

「うつ……」

吐き気が込み上げてくる。

喉元まで上がってきた内容物を辛うじて再び飲み込み、抑えこむ人間が肉片に変えられていくのを見せ付けられて、平然としていられるほど彼は丈夫ではない。

そういう意味では『二人』は異常だったとは思えない。

彼は愉しくて仕方が無いという様子だった。

三日月型に歪んだ口元からは所々欠けた歯が覗いていた。

満面の笑みを浮かべながらの復讐劇に、人間はこんな表情でこれほど残酷な行いが出来るものなのかと、背筋が寒くなった。一体どれほどの恨み辛みを蓄積させればこれだけのことが出来るのか、しようと思うのか疑問であった。

そいつは同じ『プレーヤー』である悠早を見とめると告げた。

『邪魔をするな』

他にも恨み節を延々と呟いていた気がするが、それは覚えていない。

ただ、恨めしい表情をして悠早を見ていたことだけは、無駄にはつきりと覚えていた。

彼は誰にも止められる事なく、何処かへと消えていった。

「でもメイさんの……あれも」

彼女の表情を思い出すと、震えが止まらない。

メイリアはその状況にあって唯一人、余りにも冷静であった。

ただ、何を思っているのかも解らない無表情で、その光景をただじつと見つめていた。

それこそ虫けらが羽をもがれ、足をちぎられていく様子を遥かな高みから見下ろしている……悠早はそんな印象を受けた。そこには変人奇人口クデナシや人間の屑の跋扈するTW上層プレーヤーの中では唯一の『常識人』と崇められた彼女の姿はない。

彼女の見せたあの表情は悠早にとっては衝撃的だった。

「あれでよかったのかなあ……ああでも、ゆいもこんな時に肉料理

にしなくても良いのに」

事情を知らない結子に文句を言っても仕方がない。

たった1文、事前にメールを出しておけばそれで済むだけのことをしなかった悠早が悪い。

自分の名前が呼ばれたのが聞こえたのか、湯気で曇った擦りガラス越しに結子が覗き込んでいるのが見える。テキパキと何かをしていたようであるが、悠早には何をしているのかは判らず、同時にさして興味なかった。

悠早は特に意味もなく、顔を湯に沈める。

「大丈夫ですか、兄さん？」

その声音は何時になく不安そうなものに思える。

そんな彼女にごめんと呟くが、その声はただの気泡となって消えていく。

「たぶん大丈夫……じゃないかな、きっと」

「食欲もなかったみたいです……何があったかは知りませんが、程々にしてくださいよ？」

「わかってるよ、ゆい」

どれだけ綺麗事を並べても、ああ言う連中を法は裁かない。

裁くことはできても、上っ面だけ反省している振りさえすれば許されてしまう。そして、のうのうと暮らしてまた同じ事を繰り返す。ああ言う連中は反省などしないし、自分たちの行為を悪いとすら思っていない。むしろそれを誇りさえもする。2000年代以降に普及したインターネットは『バカ』を炙り出すにはお手軽なものだった。

それは20年以上経った今でもまるで変わっていない。

どちらにしても、法が裁かないなら自分の手で裁く、ただそれだけの事にすぎない。

それが法治国家の根底を揺るがすとしても、仕方ないと思えてしまうのも妙な気分だった。

それをやったらお終いだよ、と悠早は呟く。

「わかってるけどね……そんなこと、どうしようもないし」

こんな事をしていたら上せると判っていながら、再び全身が沈んでいく。

「本当に、仕方のない姉様ですね……」

結子のそんな呟きは届くはずもない。

これ以上、何も考える気が起きず悠早はそっと目を閉じる。

どれだけの時間そうしていたか、暫く経った頃にガラガラとドアの開く音が聞こえる。

悠早は何か注文したつけ、やら特に何も頼んでないはずなどと目を閉じたまま思考する。

しかし何も思い出せない。

流れこんでくる冷たい外気が肩に触れる。

「姉様、失礼しますね？」

妙にクリアに聞こえる結子の声に、亀のような動作で頭を上げる。横目に映る、結子の姿に『まだ幼い感じだな』などとピントのずれた感想が浮かぶ。

いい加減に見慣れたユリアネとしての自身の身体や、彼女の妄想

世界の姿である金髪の美少女である『ユイ』の姿に比べれば随分と幼い印象を受ける裸体。全体的に丸く、出るところはそれなりに、引つ込むところもそれなりにであるが、やはり女の子らしい身体つき。

それなり以上に肌には気を使っているようで、標準よりも随分白いが健康的な肌。

彼女が本当に母親似であることがよくわかる。

現実感があるようで現実感の全くない光景。

「……………」

悠早はこう言う時にどういう反応をすべきなのだろうか、と真剣に考えこむ。

アニメやマンガならば『おい！？』やら『なにやってんの！？』

みたいなノリと様子で慌てふためくのだろうが、良くも悪く不思議と慣れているからこそ反応に困ってしまう。それは、もちろん現実世界の話ではなく、仮想世界の中の話である。

流石にこの年になって一緒にお風呂に浸かる兄妹と言うのは世間的におかしすぎる。

しかし、不思議と仮想世界TWだとそういう機会も多かった……それも自分の身体であって、そうでないという不思議な感覚のなせる技かもしれない。これがTW以外のVRゲームであればまた違ったのかも考えられるが、悠早はTW以外をプレーしたことが無いのでよくわからない。

このくらいの事は割とよくあることだった。

だからこそ、TSしてから1週間も経っていないというのに随分と冷静である。

現実と仮想世界の境界が相当に怪しい。

しかし何もツツコミを入れないのは野暮だろうと、悠早は言葉を

ひねり出す。

「それで、ゆい……なにしてるの？　せめてバスタオルくらい巻いたら？」

その言葉は結子の期待には沿わなかったようである。

後ろ手にガラス戸を閉めた姿勢のまま顎に手を当てて、真剣に考えこんでしまっている。

しかし、悠早も言い終わってからそれは違うだろ、と気づく。

「姉様、それは微妙にツツコミどころがずれている気がします」

「そう言えばそうかも……じゃなくて」

こういう場合に正しいツツコミは『兄妹』なのにおかしいよね？
と言う系統のものだろう。

同時に、今の状況を兄妹とするか姉妹とするかは相当に微妙な所であつた。

何よりも、かれこれ仮想世界ではあつてもこの姿の場合は、3年以上に渡って『姉妹』として過ごしてきているのだから尚更に判断がつかない。現実では仲が良い兄妹としての距離感以上に近づくようなことはまず無かつたが、仮想世界では明らかに姉妹の距離感、同性同士の距離感であつた。

悠早は否定も肯定の言葉も思いつかない。

しかしやはり、色々とオカシイという感情が支配的であつた。

「せっかく姉様になったわけですから、こういうのもたまには良いかな？、と思っただけです」

「たまにゆいの思考回路がわからなくなるよ……」

それでも、この行動は悠早の予想外ではあつた。

頭を抱える彼の呟きを尻目に、結子はちょこんとイスに腰を下ろす。

「そうですねえ……私、妹……姉でもいいんですけど、そう言うの欲しかったんです」

「はあ……？」

「だからこれはチャンスだなあと……そう思いまして？」

「前後の繋がりがちよつと怪しい気がする件について……それは気のせい？」

「はい、気のせいです」

少々温めが好きな悠早と違って、彼女は随分と熱い湯加減を好む。全身にシャワーを浴びながら、鼻歌交じりに湯の温度をほんの少し熱めに調整する。

そんな気持ちよさそうな妹の姿を見ると『まあこれも仕方が無いか』と思考が傾きかけるが、それは何か違うだと否定する思考が割り込んでくる。

なかなか1週間そこそこでは割りきるのは難しいらしい。

「でも、意外と……と言いますか、反応が薄すぎて寂しいんですけど」

「お約束な反応が欲しかった？」

目を細めながら見せる、何処か残念そうな表情にどう反応すれば良いのかわからない。

そんなものを求められても困るけどね、と心の中でツッコミを入れる。

「かなり」

「なかなか難しい注文をしてくれるね……」

悠早はここ数年で話題になっている一つの言葉、症例を思い出す。それは結子も同様である。

「TW症……」

「たぶん、それかな？」

正式な症状名となっていないわけではないが、そう呼ばれる物が確認されている。

この世界でVRゲームと呼ばれるものが一般的になりだして、暫くした頃からポツポツと聞かれるようになった症状である。ただ、技術的な問題で仮想現実には程遠い物ばかりであったため、その症状が見られることは極僅かであった。それが一躍有名になったのはやはり『TW』の登場と、2年前の大規模アップデートがキツカケであると言われている。

概要としては、仮想世界の実感が現実側の意識・感覚に強い影響を及ぼすと言うモノである。

それが『TW症』と呼ばれるようになったのは、やはりVRMMORPGである『TW』が現実との差を感じ取るのが困難なほどに出来過ぎた仮想世界であったために、症状が現れるプレイヤーが随分と多かったからである。

特に、性別を変えてプレーしている場合に、現実側が仮想側の意識に引きずられるように変化することが多い。例えば、行動や考え方、趣向、立ち居振る舞いなどの変化に始まり、ロールプレイをしている人であれば、2重人格に近い状態になる者も居るという。

悠早は、半年ほど前にこれを知ってなるほどと納得してしまった。

「今だから言いますが……私すごく心配していたんですよ？」

「なにを……？」

「兄さんって、実はホの付く人だったりするのかなあって……1回

だけ思わず、あのバカ母に相談しちゃうくらいには」

「ハハハ……………それは重症だね」

身体を洗いながら、結子は呆れ顔を向ける。

そして何かを思い出すように、遠くへ視線を向けてから語り始める。

「だって、部屋を掃除してる時にさり気なく漁ってもAVも雑誌も含めてそーいうのが全く出て来ませんし。ネットの履歴とかいろいろ見ても、それらしいものを見る形跡もなく……………まあでも、ホモとかゲイとかそっち系のサイトの痕跡もなかったんですけど。あと、映画とかドラマなんかのラブシーンもすごく淡々と見てますし？」

「……………あのね、ゆい」

「あと沙奈先輩とか、結構ベタにスキンシップしてたのに平然としてたり……………ああ、あの人って結局どうだったんでしょね？」

「……………知らない、それに知りたくもない」

「沙奈先輩が聞いたなら泣きそうなセリフですね……………」

「それでいいと思うかな？」

悠早にとって沙奈の扱いはその程度のものであるらしい。

「そんなわけで……………実は、不能なのかな？とか……………流石にちょっと心配になったわけですよ……………こっち側開けてください」

「ちよつと……………さすがに狭いから？」

結子はバスタブに腰掛けると、全身を捻ってそのまま湯に足を浸ける。

緩やかな坂を描いている側面にそって滑り降りるように、足技で無理やり自身の身体の収まるスペースを作りながら全身を潜りこませていく。湯がザバツという音を立てながら溢れるが彼女は全く意

に介さない。

一人であればそれなりに広く感じられるが、流石に二人で入ることとは余り考慮されていなかったために狭い。

「細かいことは気にしないでください」

細かくないよ、と言う悠早のツッコミは結子に華麗にスルーされる。

すぐに予想通りに、彼女の表情が険しくなっていく。

「……………相変わらず温いですね、ほんとにもう」

結子は遠慮なく、断りもなく温度調整のツマミを捻り熱い湯をダバダバと流し込む。

ゆっくりとした速度で、しかし確実に広がって侵食してくる湯の温度変化に悠早の表情が歪む。

彼はぬるま湯にだらだらと長時間浸かるのが好きな人間なのである。

満足気な表情の彼女を恨めしげに睨みつける。

「ちょっと、ぬるま湯につかるのがいいんじゃない!!」

「はあ?」

「なんでもないです……………」

ガクリと肩を落として口元まで湯に沈んでいく。

ぬるま湯が好きだが、熱いのも決して嫌いではなく、むしろ温泉などは大好物なこともあってこの行動を全面的に非難することでもできないのが辛い所であった。

そして、結子の満足気な表情を見ると、これも許してしまいそうになる。

悠早は妹に甘いなとシミジミと思う。

「でも、TW症って言葉を知ってるほど、と納得しちゃいましたけどね?」

「まあ、うん……」

もうそんな事はどうでも良かった。

05（後書き）

エロにならないように頑張ってみた。
次で第2章終わりの予定。

温風が悠早の髪と、肌を撫でていく。

彼も人に髪の手入れをしてもらうのが、ここまで心地よいとは知らなかった。

結子の手が髪の束を掬い上げ、順番に馴れた手つきで、しかし壊れ物を扱うように繊細に水気を飛ばしていく。お風呂上りの兄の髪を乾かすのは、今ではすっかり結子の日常の仲の二コマになっている。長いだけあって乾かすのには時間がかかるが、その内にうとうとし始める姿を見るのも彼女は好きだった。

理由は単純で、初日の悠早の髪の扱いがA型とは思えないほどに、『余りにも雑』であったからである。その様子を見た彼女は、『このままだと折角の髪が痛む』と、悠早の腕を掴むと椅子に座らせていた。

最初は教えるだけのつもりだったが、彼女にとっては思いの外楽しいらしい。

悠早の髪は乾燥具合を見るには実に便利であった。
濡れると何故か、彼の銀髪は淡い青紫色に染まるが、水気が飛ぶに従って色が抜けていく。

この現象はTW内では見たことがなかったので、現実になって発現した仕様だろう。

どちらにせよ、髪の乾き具合を見るのにこれほどわかりやすいものはない。

「でも、ゆい……やっぱり、これは落ち着かない」

そうボヤきながら、悠早は視線を落とす。

素材は光沢からシルクだと思われる、淡いライトベージュのネグリジェ。

一見するとシンプルなデザインなようで、開いた首元や袖、そして裾を過剰にならない程度に花模様のレースが飾っている。長いスカートは丁度膝のあたりまでの長さで、程よく華やかでありながら大人っぽさを兼ね備えている。

結子が母親の寝室から『無断』で引つ張り出してきたものである。悠早などはいっ購入したか知らないが、年考えろよなどと思わず心の中でツツコミを入れた。

それ以上に、そもそも『家に帰って来ないんだから必要なくね』である。

もしくは『寝袋で会社に泊まりこむ』人間らしくないである。

「いいじゃないですか、似合ってますし？」

「それはそうだけど……ううん」

「何処かの国のお姫様みたいですよ？ 私はどうみても従者ですけど」

「ご丁寧にも正面に置かれた鏡の中の悠早は、そんな感じである。前から見るかぎりでは大分髪が乾いてきたようで、ほぼ何時もの銀色に戻っている。」

「ゆいも自分で着ればいいじゃない……」

「イメージ的なものです」

「そうですか」

「はい、せっかく可愛いんですから私を楽しませてください！」

「それが本音ね……」

悠早は肩をすくめながら、横髪を手持ち無沙汰な左手で弄ぶ。鏡から視線を上げると、テレビの国営放送がいつものようにニュースを淡々と報道している。

ニュースの内容はここ数日は大して代わり映えがしない。

ほんの1週間前であれば凶悪事件であつたようなモノですら、今ではトップを飾ることはまずない。人を2、3人殺したとか、一家惨殺とか、どこかで魔獣が出現し数十人死亡やら、その程度は日常茶飯事になりつつある。

そんな今日のトップニュースはまた頭が痛くなる類であつた。

『本日、午後……男が**県**の小学校へ押し入り、児童数十名を人質にとつて立て籠もる事件が発生しました。警察は説得を続けていますが、男はそれに応じることはなく沈黙を守っているのとです』

そんな、くだりから始まる事件である。

総合すると、TWのプレーヤーの一人——それも無職の引き籠もりらしい——が、何を思ったのか小学校に乱入し、恐らく教師数名を殺害した上で立て籠もつたということになる。脱出した児童の話によれば、男は反抗した者は容赦なく刃渡り1メートルを優に超える片手剣で叩き切り、女子児童に暴行と言う名の陵辱を加えているらしい。

悠早などはせめて中学校か高校にしろよと、また何処かピントの外れた事を思う。

近辺のプレーヤーが警察に協力し、解放を目指しているとも聞く。そうなれば男の命はないだろう……TWベースの戦闘はそこまで生温いものではない。

本当に、最近は年末だというのに、こんなニュースばかりである。今、二人の周辺が平和なのはある意味で奇跡的なのではないかと思えてくる。

「失う物のない人間つてのは怖いねえ……」
「そうですね、ほんとに」

今はその幸せを精一杯享受しようと悠早は思う。

いずれ、これが崩れる日が来るのだと……本能がそう告げている。
目蓋が重い。

テレビの淡々とした声と、髪の手入れの心地よさが悠早の意識を
微睡みの中へ導いていく。

そのまま目蓋を閉じてしまえば、そのまま深い眠りの世界に誘わ
れてしまいそうになる。

結子は髪を撫でながら物思いに耽る。

「また髪伸ばそうかなあ……」

悠早の耳が結子がそんな事をボソリと呟くのを捉える。

彼としては今の髪型のほうが余程結子らしいと思っていた。

1年ほど前までは、彼女の髪も今の悠早と同じ程度——肘の下あ
たりまで——のロングヘアだったことを思い出す。ある日、本屋へ
立ち読みに行つて戻ってきた時には、それはもうバツサリと髪を切
った妹の姿があつて驚いたことを思い出した。何かあつたのだろう
かと思つて聞いてみれば『重いですから』と言う答えが帰つてきて、
微妙な心境になったものだった。

それが本心かは別として、彼女はそれはもうあっけらかんとして
いた。

髪の長い悠早としては、TW内ではシステムによつてそれほど重
さを感じなかった髪が、現実の重力下ではここまで重いとは思つて
なかった。TWがそれなり以上の現実感とプレーのしやすさのバラ
ンスを取っていたことが、今ではよくわかる。

できればバツサリと切りたいところであるが結子は認めないだろ
うと考える。

「確か重いから切ったんじゃない？」

「そうなんですけどね……姉様もメイリアさんも、レティさんもみんな長いですし？」

「やっぱり、いいなあって」

そう言う結子の声は、何処か遠い物が感じられる。

「実は切った翌日に後悔したんですよねえ」

「そう……」

ドライヤーの風の向き先は毛先へと移っていく。

髪を痛めないように細心の注意を払って、彼女の手順で進む。

悠早は微睡みに耐えられずに閉じかけていた目蓋をそっと降ろす。

「でも、今のゆいの髪型好きなんだけどね……」

悠早は深い闇に落ちていく中で、ポツリと呟く。

結子はそんな兄の姿を微笑ましく眺めながら仕上げをしていく。

癖のない髪は梳けば絹のように滑らかであった。

そして最後に、端に避けてあったネグリジェと同色のカーディガンをそつと肩にかける。

それなりに厚手といっても、暖房が利いてないければ肌寒いほどにそれは薄い。

このままお姫様抱っこでもして部屋まで運べないこともないのだけれど——補助魔法を使った身体強化と充分に高いster値から考えれば可能——、それをするのもどうかと言うことでいつもの様に部屋へと毛布を取りに向かう事にする。

横目に見るその寝顔は余りにも穏やかで、本当に天使のようだった。

そんな姿を見ながら結子は小さな溜め息を吐く。

「相変わらず、仕方のない兄さんですね……」

この1週間、ずっとこの調子であった。

それまでのように、食べてTWにログインし、風呂に入ってTWにログインしと言う生活は完全に過去のものとなってしまった。以前よりも、規則的かつ模範的な生活リズムが生まれつつあり、現実世界で二人で過ごす時間も随分と長くなった。

他のゲームに手をだそうとは二人とも思っていない。

それだけTWは特別なのである。

彼女はそつと耳に唇を近づける。

起きていれば騒がれそうであるが、幸いなことに起きる気配はない。

「そう言われると伸ばしにくくなるじゃないですか……」

結子は嬉しそうに兄への抗議の言葉を吐き出す。

こんな生活も悪くはないと、そう思えた。

明日で学校も終わり、ちょうどクリスマスのその日から冬休みとなる。

少々面倒なのは、学校が二期制を採用しているために、まる1日しっかりみつちりと授業があるということくらいだろう。そして、クリスマスが終わればすぐに年越しの準備があり、今年はコミケへの参加と言うイレギュラーなイベントもある。

準備するものは大してないのだが、一応は1度くらいは着てみるべきだろうと考える。

そもそも、無事に開催されるという保証もないが。

それ以上の懸念が彼女だけでなく、世間に広く広まっている。
クリスマス中止を掲げてデモやらアホなことを繰り返す連中や、
無駄に大きな力を手に入れた引き籠りやフリーター、大して失うモ
ノのないプレーヤーたちによる『大規模テロ』行為の可能性は高い
と言われている。

クリスマスの行動を自粛すべきだという呼びかけも行われている。
しかし、それがどれほどの効果があるかは定かではない。
警察をどれだけ配備しようとも防ぐのは難しい。

「明日は24日……クリスマス・イブ」

手に嫌な汗が吹き出してくるのがわかる。
どれだけの被害が出るかなど、まるで想像がつかない。

「どれだけの血が流れることになるんでしょうね……あまり考えた
くはないですけど」

結子は耳障りなテレビの電源を落とす。
暖かな空気を送り出すエアコンの動作音だけが室内に響いている。

「はあ……」

窓の外を見れば、青く淡い光を纏ったイグドラシルの大樹がある。
目を凝らせば、それは単なる靄ではない事がわかる。

万病に効く薬となると称される葉から零れ落ちた無数の魔力の塊、
それが青い花びらのように散っている。ゆっくりと東京都心の明る
い闇夜に溶けて、淡い靄となって消えていく。それが、大樹全体を
覆って輝いている。

それはライトアップされた夜桜が散るような、幻想的な光景。
これがゲーム内であればどれほど良かっただろうと彼女は思う。

「兄さん……姉様？」

正面から、悠早の細い首に腕を回す。

起こさないように、注意を払いながらゆったりとその身体を預けていく。

ほんの少しだけ、まだ冷え切っていない体温の暖かさが伝わってくる。

結子は再び耳元へ唇を寄せる。

「私は、余程のことがない限りは兄さんの味方ですから。それだけは覚えていてくださいね」

この年が、このまま無事に終わることを彼女は祈る。

06（後書き）

ちよっとしんみり纏めてみた。

次回、幕間？……ティッシと西澤が色々語る？

その後、第3章で『聖夜に死神は舞い降りる』。
最強の雑魚と呼ばれるGGRが相手になります。

人物紹介＋TWの設定など（読まなくても問題なし）（前書き）

適時と言う名の、気が向いたときに更新します。
これ以降の登場人物は適時別途紹介。

人物紹介＋TWの設定など（読まなくても問題なし）

《登場人物》

澤口 悠早 （17） ♂

たぶん主人公。

今ではストリートロングの銀髪が特徴の美少女。

それほど強くないがぎりぎり3次資格持ち、作るよりも応用する方が得意。

メイリアの数少ない愛弟子の一人で、武器のSOPは彼女のお下がりである。

愛称はユーリ。

キャラ：Juliane Elnest （ユリアネ・エルネスト）

資格1：Bishop （司教） 格：Bishop （

司教）

資格2：Sharmann （シャーマン）

ランク：91

Weapon：杖 - Staff of The Prop

het - Elaris Almacina S - （預言者ア

ルマキナの杖）

澤口 結子 （15） ♀

悠早の実妹、黒髪セミロング＋プチツリ目気味。

風属性＋斬撃特化のアタッカー、3次資格を目指しているが先は長い。

キャラ : Yui ElneSt (ユイ・エルネスト)
資格1 : Sord Fighter (ソード・ファイター)
ランク : 79
Weapon : 片手片刃直剣 - Howling Wind
A+ (ハウリング・ウィンド)

安祥 優希 (17) ♂
プラチナブロンドの東欧系美少女、かなり人形っぽい。
国内ランク33位、国際ランク247位、Meilia Family(=Meilia Spelling Diagram)のElder。

支援職としてはTOP3の一角、それ以上に下手な近接戦闘職よりも強いことで有名。

キャラ : Meilia Sylphed (メイリア・シルフィード)

資格1 : Bishop (司教) 格: Arc Bishop
p (大司教)

資格2 : Sharmen (シャーマン)

ランク : 108

Weapon : 杖 - The Wand of Yggdrasil S+ (世界樹の杖)

杖 - Staff of Elnia S-

(エルネアの杖)

レティーシャの中の人 (28) ♂

黒髪の美人だが、見た目はかなりキツく怖い。

国内ランク1位、国際ランク3位、最強の聖職者、唯一の『Car

d i n a l 格所持者。

二つ名は『ボス狂』、『Boss Freak』などなど。
愛称はティッシ。

キャラ：L e t i t i a H i r v e l a （レティーシャ・
ハーヴェラ）

資格1：D o m i n i c a n i s （異端審問官） 格：

C a r d i n a l （枢機卿）

資格2：D a n c e r （ダンサー）

ランク：116

Weapon：メイス - The Grand Cross

- N e m e s s e i a S + （グランドクロス・ネメセイア）

高柳 洋二 （17）♂

悠早とは5年来の付き合い、悪友の類で何処からどう見ても立派な
オタク。

あんまり強くない。

キャラ：未定

資格1：W i z a r d （ウィザード）

ランク：74

Weapon：杖 - B

片瀬 沙奈 （17）♀

悠早の悪友その2、腐女子じゃないBL以外ならなんでも食べる雑
食女オタ。

見た目は立派な委員長だが、中身は結構どうしようもない。

キャラ：未定

資格1：Priest（プリースト）

ランク：76

Weapon：杖 - B

遠野 真介（17）♂

優希の付き合いの長い友人、無駄な超イケメン、ロリコン、マッチョ好き。

TW内では大手ギルド所属のアタッカー、それなりに強い。

キャラ：Physalis（サイサリス）

資格1：Court's Knight（宮廷騎士）

資格2：???

ランク：94

Weapon：片手両刃直剣 - MysticKanon

A+（ミスティック・カノン）

《解説色々》

1．システム基本

■名前

全てのキャラクターはFirstnameとLastnameを持ち、アカウント内では共通となる。

Lastnameは共有が可能で、家族であることを示すことができる。

結婚した場合には夫婦同姓、夫婦別姓、好きな方を選ぶことができる。

上記の紹介で英語名をIN（InternationalName）、

日本語名をJLN（Japan Local Name）と呼ぶ。

キャラ作成時にどちらか入力すれば、もう片方はシステムが勝手にどうにかしてくれる。

■ランク

スキル制のTWにおけるプレイヤーやモンスターの強さの指標である。

現在時点における最大値はプレイヤーが120、モンスターが150となっている。

その判断はシステムが勝手に判別しているため、基準などは不明である。

プレイヤーの最高ランクは世界で116が3名である。

■スキル

スキルというのは熟練度を表すパラメータである。

TWは純粋なスキル制のゲームであり、ステータスに影響するような『レベル』は存在しない。

他のゲームでは独立している『Str』『Agil』と言ったステータスに関わるものもスキルである。

プレイヤーはステータスと技能、生活のそれぞれのスキルを自由な割合で上げることが出来る。

そこで、自信があるプレイヤーはステータスを抑えて、技能に多く回すということが出来る。

■システム外スキル

システムで定義されていない様々なプレイヤースキルの総称である。どこまでが仕様で、どこからがバグか判らないほどに大量に存在している。

むしろシステム外スキルのほうがシステム定義スキルよりも遥かに自由度が高い。

その代表が詠唱で紹介する『SpellingDiagram』である。

■テクニク

他のゲームで言うところのアクティブスキル・パッシブスキルにあたる。

テクニクはスキル値と資格に紐付いており、反復使用することで効果が上昇していく。

システムで定義されていない、プレイヤーが開発したテクニクを『オリジナル』と呼ぶ。

■オリジナル

主にアクティブスキルにおいて、プレイヤーは独自にテクニクを編み出すことが可能である。

物理＋魔術の融合攻撃や、連続技などが知られている。

■格

2年前に導入された比較的新しい概念で、『資格』に紐付く。強さそのものには関係がなく、どちらかと言えば権力的な強さを示す。

Priest系3次資格は『HighPriest』『Bishop』『Dominicanis』『Pontifex』がある。格は『HighPriest』『Bishop』『ArcBishop』『Cardinal』の4種類があり順に権力が強くなる。メイリアはArcBishop格のBishop、ティツシはCardinal格のDominicanisである。

■MainCredential

人物紹介内の資格1が該当し、他のゲーム的に言うと1stジョブである。

1次から3次まで順にランクアップすることができる。

■ SubCredetinal

人物紹介内の資格2が該当し、他のゲーム的に言うと2ndジョブである。

3次資格を取得することで、1つだけ取得することが出来る。

場合によっては3次資格の取得と同時に自動的に割り振られることもある。

ただし、組み合わせによる制限があり、好き勝手に取れるわけではない。

■ ギルド Guild

最大メンバー数は50人で、ゲームにおけるプレイヤー組織の基本単位である。

基本的には仲の良いもの同士、目的を共有する者同士で集まって構成されるのは他のゲームと変わらない。

■ クラン Clan

特に強大な実力も有するギルドが盟主になり、その下に多数のギルドを従えて構成される。

大規模なものとなると盟主の下に中小規模クランを従えるようになり、階層構造を形成する。

4大クランと呼ばれるものは全体で数百のギルドと、万に近いプレイヤーを従える。

確保した街や鉱山などの利権を守るために大型化し続けている。

■ アライアンス Alliance

階層構造を取り封建制度的なクランに対して、名目上は対等な同盟関係を結んだものである。

実質は幾つかの有力ギルドによる合議制であり、彼らによる支配体

制であつた。

その構成要素はより規模の小さなアライアンスやギルドなどからなっている。

民主主義的なのは良いが、クランに比べるとどうしても意思決定速度が劣る事が多い。

最大規模のアライアンスである3大アライアンスは4大クランの規模と同程度である。

■ 独立系

4大クラン、3大アライアンスに所属しないギルドや小規模アライアンスは数多存在する。

その中でも、それらの大組織に所属する必要性がないほどの実力のあるものを指す。

■ Japanese Seven Sisters (JSS) or big7

4大クランと3大アライアンスを纏めての呼び方。

単純に「Sisters」と呼ばれることもあるが、日本人は「big7」の方を好む。

何故「姉妹」と言えば、クランとアライアンスがこのゲームでは女性名詞扱いのため。

■ 4大クラン

規模の大きなものから順に列挙する。

- ・ アスカリア聖会：通称は「聖会」
- ・ 黒龍幻想旅団：通称は「黒幻」
- ・ プロキシマ騎士会：通称は「プロマ」
- ・ Heaven's Gate：通称は「天門」

■ 3大アライアンス

規模の大きなものから順に列挙する。

- ・北部イルネス自由都市同盟：通称は「イル同」
- ・東ルグルヴェリア海上同盟：通称は「東ルグル」
- ・西ルグルヴェリア海商会連合：通称は「西ルグル」

■三猫同盟

独立系最強と呼ばれ、プレイヤーの平均ランクは95を超える。主人公帯の所属する独立系アライアンスであり、以下のギルドからなる。

- ・Cat's Living：ギルマスはメイリア
 - ・ARIA Company：ギルマスは氷の魔女アリア
 - ・子猫のお茶会：ギルマスはユアナ
- 多数のトップクラスプレイヤーを有することでも有名。国際ランク100位以内に6名が名を連ねている上に、真祖が二人——メイリアとアリア——いる。

レティーシャが言うにはラスボスは「アリア」だそう。通称は『三猫』である。

■3大グループ

世界的に規模競争の様相を呈し始めた状況に対応するために結成された。

- ・ルグルヴェリア海上連合会Ⅱ東ルグル＋西ルグル
- ・イルネス大同盟Ⅱ天門＋聖会＋イル同（三猫はオブザーバー参加）
- ・蒼き宝石の帝都連合Ⅱ黒幻＋プロマ

規模最大は帝都連合であるが、資産的にはルグルヴェリア海上連合会が最大。

■Gift（恩寵）

盟主やそれに近い位置にある有力ギルドは、他のギルドを従わせる

ために『Gift』を使用した。

高性能な装備品や、オリジナルのテクニク、諸々のアイテムを貸し与えていたのがそれである。

それらは無償付与であり、大人しく従っている間は好きなだけ使うことが出来た。

そしてそれを反抗すれば奪うと言う、飴と鞭の使い分けである。

2・詠唱法

TWを象徴するものは『詠唱法』である。

■ Spelling Diagram (Family) 〃 呪文系統
TWを象徴する魔法体系である。

システムに依存しないオリジナルの魔法詠唱が可能になるTWにおける詠唱技術体系。

その基礎技術開発者を『Elder』『真祖』と呼び、そこを頂点にツリー状に多くのプレイヤーが利用する。

頂点に近いほど核心に近い技術と知識を持つことが多く、効果的な詠唱ができると言われている。

同時に、人間関係の縮図でもある。

複数の系統を混ぜて利用するプレイヤーは背教者と呼ばれ嫌われる傾向がある。

古くからのプレイヤーはSDと呼ぶことが多く、新しい者はFamilyと呼ぶことが多い。

SD間には互換性はなく、サポートしている機能にも差がある。

今のところ最も高機能なのはAriaSDであるが、難易度も最も高い。

■ Elder

元々はSDの開発者を称していた言葉。

Mag e系の『格』の最高峰にE l d e rが追加されたため近年は『真祖』の方が使われることが多い。

確認されている範囲で18人おり、その全員がランク100を超え
る上位プレイヤーである。

日本人ではメイリア、氷の魔女アリア、狂人ユイギスの3人が該当
する。

■ 詠唱法

TWにおける詠唱法は大きく2つに分類される。

1つはシステム上で定義された日本語呪文による標準詠唱である。

2つ目は、魔術古語と呼ばれる謎言語を直接用いて詠唱する方法で
あり、古語詠唱と呼ばれる。

全てのSDの詠唱方法論は古語詠唱を前提としている。

M u l t i C a s t i n g (M C : 多重詠唱)

複数の魔法を同時に構成する方法論の総称で、以下の利点がある。

・ M P 的な面から見ると、多重度を2、3と上げても消費M P は平
方根程度にしか増えない。

・ 詠唱のワード数も同様であり、多重度を上げれば上げるほど攻撃
密度が上がる。

・ 使用後デレイは、M C した技の中で最もデレイの長いもの1
回分のみが適用される。

しかし、多重度を上げれば上げるほど詠唱の難易度は急上昇する。
普通に読み上げるだけでは3重詠唱あたりが限界と言われる。

F r e e C a s t i n g (F C : フリーキャスト)

これはSDに依らない技であり、魔法詠唱しながら動きまわる技術
のことである。

これについては習うより慣れるである。

CastingStatusChange(CSC:詠唱中断・再開)

詠唱途中の魔法を中断する場合は通常はフアンブルさせる事になる。その場合でもMPなどは僅かながら消費されるために無駄になってしまう。

魔法詠唱の状態を一時的にスタンバイ状態に落とし、必要なときにアクティブ化させる詠唱法。

CantareCasting(CC:歌唱法)

MCの多重度が3多重程度で限界に達するのを打破するための技術。古語詠唱は詠唱時のリズムや音程などを正しく刻むことで格段に安定性が上昇する。

正しく歌えう技術が高ければ高いほど多重度を上げられることを意味する。

これにより実現する5多重以上のMCをSMC(SuperMC)、7多重以上をUltraMC(UMC)と呼ばれる。

10多重以上の詠唱可能なプレイヤーは世界で数名しか居ない。

ValiableCasting(VC:可変詠唱)

MCも大多数は事前に教えられている呪文を詠唱する形を取る。

それに対してVCは変幻自在にMC用の呪文を構成する技術のことを指す。

ProgressiveProvisioning(PP:随時発動)

CSCの応用技であり、魔法の発動タイミングをMC中に自由自在に制御する。

これによって時間差をつけての攻撃、緊急時の防御魔法発動、などを行う。

Castling Linkage (CL:協調詠唱)

複数人で一つの魔法を詠唱する方法である。

非常識な規模の範囲殲滅魔法の詠唱などに稀に使われることがある。

■古語詠唱とSpelling Diagram

古語詠唱を構成する要素は『EC』『Elemental Code』と『CC』『Control Code』の2つである。

このうちECは実際に『火を起こす』『水を出す』『凍らせる』と言った事象を生じさせる要素である。

ECの命令はCISC的であり、例えば『水を出し凍らせる』と言った物が多数存在している。

そして、CCはプログラムで言う『if』『for』『jump』と言った制御命令に相当する要素である。

古語詠唱の呪文はECとCCがほぼ交互に繰り返され、繋がっている構造を取る。

Spelling Diagramの基本原理は以下の通りである。
すべての呪文でCC部分はほぼ共通であるので、この部分を共用化する。

基本的にはECを連続で唱え、収束させた上でCCを唱え、拡散させ次のECを唱える。

その中で食い合わせが悪いECとCCの組み合わせがあった場合には、互換性のあるコードに置換する。

また必要に応じて呪文の詠唱順序を入れ替えて、それらを正しく制御する。

これらを実現する方法がプログラム言語が様々な存在するように、

いろいろある。

そのために、多数の系統のSDが存在し得る。

MCが詠唱時間、消費MPの劇的な減少に繋がる理由は以下の通りである。

ECは1ワード、もっと正確に言えば1音節であり、同様にCCも1音節である。

結局のところ、古語詠唱においてはECとCCの比率が5:5から6:4程度である。

そしてMCの場合はCC部分の長さが多少増えるが、そこが共通化される事になる。

2重の場合はEC部分が10に対してCC部分は4から6程度になることが多い。

よって、元は20かかっていたものが14-16程度に短縮される。これはMP消費量にもそのまま当てはまる。

そして多重度を上げれば上げるほど1魔法辺りの効率は高まっている。

■標準詠唱

標準詠唱は古語詠唱のようにECとCCの区別が存在しない。

完全に連続した一つの呪文となってしまうので、呪文を変えることができない。

箱によって定義された古語詠唱の上に、無理やり開発者が追加のレイヤーを被せたようなものである。

この辺りは、ゲームシステム開発者である西澤の魔法への理解不足であると言える。

それでも、わかりやすいために魔法職の間口を広めるという意味で意味はあった。

3・武器

■武器ランク

上からS+、S、S-、A+、A、B、C、D、E、Fである。

S+：神器

S：準神器

S-：伝説級

A+：準伝説級

Aランク以上の武器はすべて古代金属製である。

■古代金属

ゲーム内で加工はできても、現在では生成することが不可能な金属の総称。

オリハルコンやミスリル、ホワイトゴールドなどがこれに当たる。

4・モンスター

■MBM = Magnificent Boss Monster
ダンジョンやフィールドの最奥に潜むボスの総称。

強さはピンキリでソロでも比較的容易に撃破可能なQueen Antから、果てはランク100以上のプレーヤー数百人でかからなければいけないThe Worldまでレンジが広い。
倒して金銭的に割りに合うかと言うと結構微妙。

■MAMB = Major Arcana MBM

全部で22種のMBMであり、TWを象徴する。

MBMの中では最も弱いものでもMBMとしては中位の難易度。別にコンプリートしても特典はない。

No.02 The Priestess Elnia in Oblivion（忘却の女教皇エルネアの亡霊）
ランク113 属性：不死、闇 種族：不死 型：人型 特殊：不死属性

No.06 The Lovers in Captivity（囚われの恋人たち）

ランク114 属性：闇、念 種族：悪魔 型：無形 特殊：結晶体

No.13 The Scarlet Shadow of Grem Reaper（死を呼ぶ深紅の影）

ランク122 属性：闇、炎 種族：悪魔 型：無形 特殊：霊属性

No.15 The Archfiend Baphomet（魔王バフォメット）

ランク124 属性：闇 種族：悪魔 型：亜人

No.21 The W.O.R.L.D.（世界と呼ばれたモノ）

ランク150 属性：無 種族：無 型：無形 特殊：混沌

《資格紹介》

- - 2nd Credential - -

■ Priest

基本的な支援・治癒・退魔・聖属性魔法の能力を有する。

基本支援と呼ばれる物を提供する、PTの縁の下の力持ち的な存在。

■ Sord Fighter

汎用戦士である『Fighter』からクラスアップすることになれる剣の専門家。

非常に大きな括りであり、ビルドの幅は異常に広い。

細剣使いから両手持ち大剣使いまでの全てがこれに含まれる。

■ Knight

汎用戦士である『Fighter』からクラスアップすることになれる騎士の基本系。

Sord Fighterに比べると資格取得条件が厳しいので普段の行いに注意が必要。

これもまた異常にビルドの幅が広いので自己紹介するのが面倒。重装鎧を纏ったタンクから攻撃特化のアタッカー、バランス型となんでもあり。

武器も剣、斧、槍、鈍器、鎌、及びその複合武器と幅が広い。

■ Wizard

Mageからクラスアップする汎用魔法職、何でも屋、器用貧乏。攻撃魔法、防御魔法、治癒魔法、補助魔法、召喚魔法と何でもできる。

扱える属性も火・水・風・雷・地に加えて、光・闇まで扱える。

これも自己紹介が面倒くさい。

- 3rd Credential from Priest -

■ High Priest

Priestからランク80以上でクラスアップ可能で、プチ強いPriest。

ランク95以上でBishop、Dominicanis、Pon

ti f e xにクラスアップできる。
事実上の2.5次資格。

■ B i s h o p

P r i e s tからランク90以上でクラスアップ可能で、支援と治療を専門とする。

単体支援が中心のP r i e s tに対してP T全体支援能力が高い。

■ D o m i n i c a n i s

P r i e s tからランク90以上でクラスアップ可能で、退魔戦闘を専門とする。

悪魔、不死などに圧倒的な攻撃力を誇り、魔法系ビルドと近接戦闘ビルドの2系統がある。

前者は退魔プリ、後者は殴りプリと呼ばれる系統の発展型である。

■ P o n t i f e x

P r i e s tからランク90以上でクラスアップ可能で、聖属性魔法を専門とする。

退魔特化のD o m i n i c a n i sに比べるとかなり汎用性が高いが、中途半端とも言われる。

P r i e s t系4職の中では人口が最も少ない。

- - 3 r d C r e d e n t i a l f r o m K n i g h t - -

■ C o u r t ' s K n i g h t (宮廷騎士)

K n i g h tからランク90以上でクラスアップ可能で、攻防のバランスが1番良いと言われる。

癖が無いので迷ったらとりあえずこれがおすすめ。

■ T e m p l e K n i g h t (聖堂騎士)

KnightとCrelicの複合クラスであり、Knightからランク90以上でクラスアップ可能。

基本的な支援・治癒・退魔能力を持ち、持久力ではCourt's

Knightを上回り、攻撃面で劣る。

Knight系の中ではMPが多い。

■ Paladin（聖騎士）

Knight系の中では最も資格取得が困難で、圧倒的に数が少ない。

Court's Knightの事実上の上位互換資格であり、Knight系最強と言われる。

■ Baron（重装騎士）

男爵が転じて重装騎士の意味であり、Knightからランク90以上でクラスアップ可能。

全資格中で最高の防御力を誇りタンクに最適、ただし忙しくなる動くような戦闘には向かない。

■ Conquistador（征服者）

Knight系においてPT支援能力を持つ特殊なクラスで、ランク90以上でクラスアップ可能

防御力に少々難があるが、攻撃力は高く、魔法攻撃・防御や治癒魔法も限定的ながら使用可能。

他いくつか

時間は夜も10時を既に回っており、辺りの人影はまばらだった。気温は氷点下まではいかないもののほぼ0度に近く、人々の吐く息は白い。

近くに10年ほど前に再開発されたオフィス街があるが、この一帯はその中心から外れている。

そのせいか人通りは疎らで、年齢層もパツと見るかぎり高めである。

最終的に失われた30年と呼ばれた時期を、生き抜いてきた人達だろう。

彼女のその鋭い視線は彼らの姿をはつきりと捉える。

その存在は、この場には些か場違いであった。

道行くサラリーマン達の視線が明らかに彼女の姿を見止めては、様々な感情を向けてくる。

レティーシャこと新条は店の古風さに肩をすくめる。

昭和の時代を感じさせるような、くすんだ赤煉瓦の外壁と年代物の木製の扉が迎える、小洒落たガード下のバーが静かに彼を迎えている。近代的なビルの中に収まるようなお洒落なバーや居酒屋は数あるが、まだまだこの国にもこう言う場所が多く残っている。

そのためには都心部であれば数本裏道に分け入る必要はあるのだが。

この辺りは行動圏内ではないため、このような店の存在は知らなかった。

この場所を選んだのはあの男らしいと彼は思う。

仮想世界TWを生み出した『IZANAMI Entertainment』の本社はこの界限にある。

だからこの界限に呼び出されるのは必然であつた。

ドアを開けるとまた古風な鐘の音がカランカランとなって客を迎える。

一部の客の視線が『彼女』の姿に釘付けになる。

それを一顧だにせずに、新条は目的の人物の姿を追う。

（居た居た……湿気た顔をしてるねえ、無理もないが）

新条の第一印象はそんなものであつた。

カウンター席にゆつたりと力なく前屈みになって、酒を仰いでいる男の姿が目に残る。

そこには世界最大のVRMMORPGを作り上げ、エンジニアとしても一個人としても充実した、自信に満ちた表情で街を闊歩していた彼の面影は微塵も存在していない。それどころか随分と急に体重が落ちたせいなのか、ストレス的なものなのか明らかに以前よりも頼りがけている。事業に失敗し、全てを失い多額の借金を背負い込んだ経営者のような、一人の中年男性の姿がある。

その表現はあながち間違つてはいないだろう。

彼とその友人達が築き上げた会社はもう長くは持たない。

救いはほぼ無借金経営をしていたことと、十分なキャッシュフローが存在していた事だろうか。

少なくとも借金で首が回らなくなるような事はあるまい。

それよりも彼らは自分達がどう裁かれるかの方が、よほど差し迫った現実的な恐怖だろう。

「はあ……見てられない」

さすがに暖かな店内では邪魔な、羽織っていたPコートを脱ぎ去り、右腕に抱える。

彼はツカツカと辛気臭い彼の友人であり、大先輩の元へと足を速

める。

「久しぶりですね、西澤さん」

「……ん？ レティーシャ・ハーヴェラ……………そうか、新条か」
「その通りで」

西澤は一瞬誰だかわからないと言う表情だった。

基本的には開発者側である彼はTWに一般プレーヤーとしても口グインしていたが、それほど頻繁でもなかった。仮想世界においてレティーシャと実際に顔を合わせることなど殆ど無く、普段はWISでの遣り取りが中心だった。

キャラクター名が表示されるわけでもない現実世界で、すぐ判るようなものではない。

そして、それに気づいて苦笑いが漏れたのを新条は見落とさない。少々意地悪をしてやろうと、悪戯心が疼く。

（さて何を頼むかね…………）

新条が壁掛けのメニューを見てみると、西澤は『好きな物を頼め』と弱々しい声で呟く。

その言葉にニヤリと口元を歪めて、西澤の酒を横目に観察する。

「ああ、マスター。これと同じのをロックで」

西澤は大の酒好きである。

特に高い酒を飲んで、湯水のように金を酒場に落とす。

それを新条もよく知っており、こういう形の注文になるのである。それが何処の国産のなんて銘柄か、そしてその金額が1杯幾らかは知った事ではないが、少なくとも安いものではないと断言できた。

間もなく失職する人間がいい気なものだと新条は苦笑いするしか

できない。

西澤の表情が陰しく歪むのが露骨にわかる。

「お前なあ……相変わらず遠慮が足りないな？」

「あら、迷惑料としては安すぎると思いますか？」

新条はわざと、とびきりの悪女のような笑みを浮かべる。

「はあ……………まあいいさ」

溜め息をつきながら、ここは西澤が大人しく折れる。

そして、珍しくチビチビと、それも頻繁に溜め息をつきながら酒を飲んでいる。

時折、何かを口に出そうとしては、何も発することなく閉じられてしまう。

（小さいな…………）

かれこれ10年近い付き合いの中で、西澤の様々な姿を新条は見てきた。

東工大を主席で卒業し、外資系S I e rへ入社し順調に出世を重ねたと言うのに、それを捨てて退社後は世界最大、並ぶもののないゲームを創りだし、エリート街道で胸をはってきた男の姿とは思えない。

良くも悪くも『半端な天才』と呼ばれた新条からすれば羨ましいことであつた。

凡そ10年前の当時、ようやくVRゲームの可能性が広がりつつあつた時代。

その当時最も活気のあつた非VRのMMORPGで出会い、VR

と言う時代の波に乗って幾つかのゲームを渡り歩いた果てにTWの開発へと至った。新条もTWの開発を聞かされた時、そしてそれを動かすマシンに『箱』を使用すると聞いたときは驚きと共に、期待が膨らんだ。コンセプトは『真なる異世界を創造する』であった。莫大な演算能力を持つ『オーパーツ』をサーバに使用した前代未聞のオンラインゲーム。

全ての演算をサーバで完結させ、クライアントはただ送られてきた情報を処理し、それを脳へとインプットするだけに留める。仮想世界を表現するには余りにも貧弱なクライアントマシンの演算能力を、当時最速のスパコンよりも最低でも数百桁高速の『箱』で補い、圧倒的な情報密度に基づいたリアリティを実現する。

数百万のプレイヤーの同時接続にすら『箱』なら耐えられる。

本当の意味で仮想世界が実現する。

それを聞いて心躍らないわけがなかった。

しかし、最初期のTWは意図的に技術水準を抑えたために不完全だった。

それも年を経るごとに徐々に『箱』の機能を開放することで、TWは現実へと近づいていった。

真の姿が解放されたのは2年前のことになる。

全てのNPCに人に極めて近い高度な人工知能が搭載、NPCも仮想世界で生活する。

決められた動作しかなかったモンスターの挙動も別物に変わった。

空気感は完成され、唯一『酔わないVRゲーム』を冠するに至った。

その余りに圧倒的な現実感に、本当の異世界に迷い込んだのではと恐怖したプレイヤーが山のように居たほどである。ログアウトボタンが存在し、それが正しく機能することでプレイヤー達は安心した。

あらゆることが可能となった。
唯一実装されなかったのは、それこそ『性行為』関連位のものである。

それも単にプロテクトが掛けてあっただけで、それをシステム側で外せば可能だったのだが。

（それにしても、一体何を実装しようとしたんだ？）

新条の疑問の一つはそれであった。

既に完成していたものに継ぎ足すようなものがあつたとは到底思えないのである。

（まあ今さらどうでもいいか……）

彼は長い思考を絶ち切って、西沢へ視線を向ける。

西澤も同じように彼を見ていた。

ついに重い口を開く。

「ところで新条、悪い事実と、かなり悪い事実がある」

新条は世界が滅ぶとか言い出すなよ、と苦い顔をする。

「またベタな事を……」

「本当だな……」

「それならお約束に従って、悪い事実から聞きましょうか」

一体何が飛び出すやらと、興味半分恐怖半分といった状態である。彼にただひとつはつきり言えるのは、何が起ころしてもおかしくない、それだけに過ぎない。

「うむ、悪い知らせと言うのは……オレのPCに表示されるログの中に『SSGR Create』を含むログがあった」
「SSGR……それはまた難敵だね」

新条はSSGRと略されるその姿をはっきりと思い描くことが出来た。

実際に仮想世界では何度も剣を交えてきた相手だからである。

2年前のMBM大幅強化前は2度ほどはソロで撃破に成功し、その後もメイリアを含めて身内十数名で挑んでの討伐に成功していた。それを一言で表現するならば『真紅の死神』である。

正式名称は『The Scarlet Shadow of Grem Reaper』であり、JLN（日本語名）は『死を呼ぶ深紅の影』である。大アルカナになぞらえたMAMBの13番、ランクは実に122にも達する化物。ランクの低いプレイヤーであればその姿を見ただけで、動くことすらできなくなると言われる。優に2メートルを超える体躯と、3メートル近い大鎌を武器とする。

紅い靄のような身体を薄汚れた漆黒のマントが覆い隠す。

その中で一際強い輝きを放つ真紅の瞳。

そして、もう一つこれの討伐が厄介な原因がある。

旧SSGRにも匹敵する強さを持つモンスター、SSGRを守護する『蒼き死神』であるGRこと『Ghost of Grem Reaper』が7体も取り巻きとして付いているのである。それ単体でもランクは107にも達すると言う、多くのMBMよりも遥かに強力な『雑魚』モンスターである。

それが原因でSSGRの討伐難易度は、ランクから想定される物よりも遥かに高い。

「出現場所によってはこれまでのモンスター騒ぎの比じゃない被害

が出るのは間違いない」

「そりゃ、そうでしょう？」

それが出現した時に、どれだけの戦力を揃えられるかを新条は計算する。

彼自身とメイリアを中心として、彼らのギルド『Cat's Living』の中で東京近郊に居住しているメンツの顔を思い出す。何人もソロで時間をかければGGRを撃破可能なプレイヤーが揃っているため、とりあえず抑えこむには充分であるが、倒すには明らかに『火力』が足りないという結論に行き着く。

彼は頭を抱えるしかない。

そしてそれ以上に悪い話があるというのが、気を更に重くする。

「それで更に悪い事実ってのは？」

西澤はすぐには答えない。

はつきりしたことは言えないが、と前置きをした上で言葉を紡ぎだす。

「あの箱の中で何か巨大なプログラムが起動を始めている臭い」

「はあ？」

「今までに見たことのない規模のところを見ると……嫌な予感がする」

西澤は自宅のPCのモニタに流れ続ける不気味なメッセージの流れを思い出す。

ログの解析が全く終わっていないために、何が起こっているのかの全体像を掴めていない。それでも端々に見当たる語句を見る限りだと、まるで世界そのものを根本的に作り変えようとしているような、そんな印象を受けていた。

しかし確信は全くない。
少なくとも、現実世界は一応の均衡状態に陥っているように彼には見える。

世間一般から見れば異常なこの現実も、彼から見れば異常なほど安定しているのである。

「西澤さんの危機感の程度がわからない……でも、あなたがそう言うなら相当なんだろう」
「うむ」

西澤は重々しく頷く。

「オレも注意はしておくが……」

その言葉は余りにも歯切れが悪い。

今、世界中でこの事態の進行に関する最も精密で、重要な、そして最も多くの情報を有しているのは間違いなく彼だった。その次が、彼から情報を得ている『日本国政府』であり、ついで同盟国の米国だろう。それ以外の国々となると、まともな情報は流れていない可能性が高い。

しかし、彼がこの場で新条に語れる内容は多くない。
政府から山ほど釘を刺されているのである。

それを最後に会話は途切れる。

西澤は時折、その頭脳で何を考えているのかウンウンと頷いているがその理由はわからない。

まるでそれを話すべきか、話さないべきかを迷っているように、その表情は見える。

新条は、そんな彼を横目に極上のウィスキーを――他人の懷で――
――気持ちよさそうに味わう。

流石に水のようにとはいかないが、次から次へと遠慮無く注文しては飲み干していく。

「これは……機密にしておいて欲しいんだが」
「……………ん？」

彼はそういう類の話は出来れば聞きたくはなかった。
こうした場合の機密事項とか言うものには碌な物がないと、勘が告げている。

しかし、一人で抱え込めないのだろうと大目に見ることを決める。

「それと、この国ではないんだが……中位MBM級のヤツが近いうちにもう1体顕現する」

「……………は？」

新条の動きがグラスを手にしたまま見事に硬直する。

中位のMBMと言えば、MAMBの下位と強さ的にはほぼ同程度に当たると考えることが出来る。

具体名を上げるのならば、2番のPEOことINが『The Priestesses Elnia in oblivion』、JLN『忘却の女教皇エルネアの亡霊』辺りが同格になる。恐ろしく強いと言うわけではないが、取り巻きなしの単体であっても、ランク100以上の上位プレイヤー5名程度のPTを最低でも編成しなければ倒せない程度には手強い。

しかし、日本でないなら別に良いかと彼は思う。

「場所はわかってるのか？」

「ああ……恐らく、始皇帝陵だ」

世界遺産である兵馬俑が突如動き出すのは、年が開けて暫くした

頃の話である。

01（後書き）

幕間をもつ1本入れるか悩み中。

↓後日追加予定、3章に進めます。

12月24日、深夜。

間もなく日が変わる時間帯であるが、まだギリギリでクリスマス・イブである。

街はカップルで溢れ、家族たちがその一夜を楽しんだ後。

一部では『聖夜』をモジッて『性夜』等と呼ばれる時間帯。

今年のクリスマスは24日夜から25日にかけて予想されていた降雪もあつて、見事なホワイトクリスマスの様相であつた。これが何もない、平年であれば街は沸きに沸いただろう。

大雪とはなっていないが、空から白い氷の結晶が落ちてきている。東京都心部でも1センチ程度の積雪が予想されていると、ニュースが報道していた。

多くの人々が幸福な1日を夢見ていたし、そうなると確信していたことだろう。

ほんの1週間ほど前までは、である。

そんな平和な予想は、残念ながら凡そ大方の予想通りに否定された。

既にこの一夜の惨劇を何と呼ぶべきかとネット上では論争が繰り広げられている。

無難な『血のクリスマス』『血塗れの聖夜（性夜）』に始まり『カップル共ザマー見る記念日』『我が人生最良の日』などと言う露骨なものから、『審判の日』などまで多種多様な案が寄せられている。しかしどれも決定打には欠けており、議論が収束する見込みはない。

そんなくだらない議論で盛り上げられる程度に、ある程度は平和なのであるが。

去年までは恒例行事となり、笑って済ませていた『クリスマス中

止デモ』は笑えない形で収束したと言える。
どれだけの血が流れたかは、明日に明後日にもなれば判明するだろう。

「ハアハア……………なんだよ、あれ……………」

彼は舞い降りる雪の中を逃げていた。

それも全力で、ひたすらに走り続けている。

立ち止まれば、少しでも速度を緩めれば命がない……………そう思えて仕方がなかった。

振り返ることもしない。

今日ほど、深夜にわざわざ『なにかつまむ菓子が欲しい』と言う理由で、コンビニへ出かけたことを後悔する日は2度と来ないだろう。

これまでの人生で初めて人の『死』を確かに見た。
それも安らかというには程遠い、忘れたくても忘れられないような凄惨な死に様をである。

（死神……………あれは、そうとしか）

彼が目にしたのは、腹のあたりでバツサリと真っ二つに両断された人であったものだった。

帰宅途中のカップルが何かだったのだろうと予測する。

まず最初に見かけた小奇麗に着飾った男。

そこから暫く離れた地点に転がっていた今時の女。

そして、蒼く輝く大鎌を掲げる、感情の感じ取れない亡霊のような『死神』の姿。

（でも、あれってモンスターってやつだよな……………）

彼も、頻発する化物騒ぎをニュースでは知っていた。

しかし、それがどれほど危険なものかはまるで認識ができていなかった。

目の当たりにして、初めてその恐ろしさに気付かされる。

死神は音を立てることなく追ってくる。

空中をホバリングしているのだらうと、彼はそんな事を考えている自分自身がおかしかった。

大声で叫んで助けを求めたい、しかし助けが来たところでどうにもならない。

あれにこの辺りに住んでいる住人が対抗できるとは到底思えなかった。

家に帰れば助かるとは到底思えなかった。ドアを締め鍵をかけ、チェーンを付けたとしてもあの化け物は容易く、決して薄くはないドアを裂いてしまうだろうと彼は思う。警察署、交番へ駆け込むのも意味はないだろう。あの化け物たちに対して警官達が無力だというのは公然の事実であり、だからこそ対応のために自衛隊が出てきているのだ。

それこそ戦車砲まで使わなければ撃退できない相手に、拳銃程度で立ち向かえるわけがない。

あれに生身で対抗できるのは『プレイヤー』達だけだった。

（どうするよ……家の中へ逃げても）

助かる可能性は限りなく低いが、それがベターだろうと判断する。少なくとも余計な犠牲者を増やさずに済むのだから、死後に文句を言われるようなことはないだろう。

死んだ後にまで『あの男のせいで』などと陰口を叩かれるのは堪ったものではない。

見慣れた家の姿が目に入る。

ドアの前へにたどり着くと乱暴に取っ手を回して、一気に引っ張る。

精々10分程度しか出かけないのだからと、鍵をかけなかったことがこんな所で幸いするとも思っても見なかった。

ドンという鈍い音を立てて、乱暴にドアを閉じる。

視界の端に蒼い死神の青い手が映っていたような気がするが、もう気にしない事にする。

鍵をかけ、チェーンを繋ぎ、靴を履いたまま玄関から続く廊下を走る。

階段を駆け上がる。

自分の部屋に駆け込み、更に内側から鍵をかける。
窓が正しく施錠されている事も確認できた。

「ハアハア……まだ死にたくねえよ」

彼はその場に崩れ落ちる。

ベッドの掛け布団を引っ掴むとそれを頭からかぶる。

あんな死に方は真っ平御免だった。

あの二人は即死できたのだろうか、そんな嫌な想像を巡らせる。もし万が一にも暫く意識があったとすればそれは地獄だろう……そんな状態、死に方は想像したくもない。これから自分が同じ目に会うかも知れない。差し迫った死の恐怖に、体温が下がり体が震える。心臓が早鐘のように打っているのが感じられる。

頭の中に思い浮かぶ自身の死の光景を必死に振り払う。

どれだけの時間が過ぎたのか、彼には判らない。
数分かも知れないし、数十分かもしれない。
彼の精神は少しづつ落ち着いていく。

「……………来ない？」

その夜、部屋の片隅で小さくなる彼のもとに『死神』は姿を表さなかった。

24日、夕方。

「ねえ、姉様……それにしてもオタクの妙な結束力って凄いですよね？」

結子はシミジミとした表情でそんな事を言う。

「そうだねえ……」

「見事にオールスター勢揃いです……しかも海外からの支援もありますよ？」

「これとか、フランス系の大手じゃないっけ？」

「だと思いません」

悠早は目の前の情報が示す事実、呆れを通り越してもはや笑うしかない。

二人はタブレット端末に表示されたとあるページを見ている。

ここ数日のネット上におけるTWの——自己中で有名な——日本国内4大クランと多数の——自分本意な——大手独立系ギルドの動きを見て、そう評さずにはいられなかった。

VRMMORPGであるTWにおいては他のゲームと同様に、プレイヤーの創設できる組織が存在していた。少々変わっているのは『Guild』に加えて『クランClan』、そして『アライアンスAlliance』の3種類が用意されていた事である。一応はギルドが構成の基本単位で、大きくても50名以下の規模であり、仲間内のための組織で

ある。それに対してクランは、特に強力なギルドを頂点、つまり盟主として多数のギルドを傘下に治めて纏めたものである。逆に多数のギルドが名目上は対等の関係——実際は有力なギルドによる合議制である——で同盟を結んだものがアライアンスと呼ばれる。クランは戦闘職による組織で、アライアンスは製造者や商人達の組織であることが多い。

クランやアライアンスも小規模なものは数ギルド、大規模なものは数百ギルドからなる。

巨大な物になると数千入、下手をすると万を超えるプレイヤーに参加に傘下に納めている。

クランやアライアンスは彼らが勝ち取った街を始めとした様々な利権を共有し、他の巨大組織から守るために組織されるものである。特に外国勢力との抗争も頻発していたTWでは、大規模な対抗組織の創設は必須だった。

日本国内に目を向ければ、4大クランと3大アライアンスが特に巨大化した。

それらは中規模クラン・アライアンスを巻き込んで、更に同盟関係を結び3大グループとなった。

しかし、全てのプレイヤー・ギルドがそこに属していた訳ではない。

それら大組織に属さないギルドの中でも、特に大きな戦力を有する上位ギルドは『独立系』と称される。その数はそれほど多くはないが、大組織からの圧力を跳ね返すために、独立系ギルド同士は緩やかな協力関係を敷くのが標準であった。

悠早や結子が所属するメイリア、レティーシャ、そしてマリアの3名を創設者とするクレリックギルド『Cat's Living』もそうした独立系の1つである。一応は、レティーシャの友人である氷の魔女アリアの魔法使いギルド『ARIA Company』とマリアの友人が作った『子猫のお茶会』の3ギルドで小アライア

ンス『三猫同盟』、通称『三猫』を形成している。

もともと、ソロプレイヤーの集まりなので、まとまりとか集団行動と言う言葉からは無縁のギルドである。個人の戦闘能力は無駄に高いが、PTとしてのバランスも悪く——何せ前衛職が異常に少ない——集団としてはお世辞にも強いとは言えない。しかし、たまのギルドイベントで行う狩りやMBM討伐でもなければ揃うことはないので、大した問題ではないらしい。

かつて4大クランの1つとのいざこざがあった際に、その主戦力と正面衝突した事もあった。

それに対しても、アライアンスでこれに対抗し、洒落にならない損害を与えている。

それ以来、触れるべからずな雰囲気蔓延している節があった。

「あの、黒幻が……」

「びつくりですよね……本当に」

「三猫も賛同者に名前上がったってけどね？」

結局何かと言うと『コミケ警備賛同クラン・アライアンス』の話である。

様々な行事に対して破滅的思考、愉快犯的なプレイヤーによるテロ活動の宣言が各所で行われている。それはコミケも決して例外ではなく、10万単位の人間がああ狭い空間に集まるのであるから、むしろ格好の標的となっていた。

それに対して、4大クランの一つである『アスカリア聖会』がプレイヤー達にコミケに積極的に参加し、警備を行いテロリスト共を叩き潰そう、と提唱したのである。それに対しての反応は気がついてみれば『4大クラン、3大アライアンス』の全て、更に中堅クラン・アライアンスや独立系ギルド等が次々と賛同を表明している。

このまま行くと日本国内のプレイヤーの多くが、会場の治安維持に参加することになるのは確実であった。

何故なら、彼ら大組織の下っ端を縛る『鎖』が存在しているからである。

上層部の意向に背けないのである。

その『鎖』をそのまま残したシステムは性質が悪いと上層部の人間は笑う。

仮想世界において頂点に座る盟主達は『恩寵』『Gift』と言う形で様々な物品を無償で貸し与えた。

それは、例えば超高難易度ダンジョンでしか産出しない古代金属や上級金属製の優秀な武器や防具と言った物から、製造などに必要な高級材料、時にはオリジナルのテクニクなどまで様々だった。一般プレイヤーにとっても有力組織の下につくことは、強くなるうえで大きなメリットがあった。盟主達はそれを餌にして、次々と勢力を拡大していったのである。

そして、それらは恩寵を受けていた者が反抗すれば、ボタン一つで『回収』して奪い取る。

そのシステムは現実にゲームが投影された今でも『有効』である。優秀な武器や防具がなければいざという時に、モンスターやプレイヤーに対抗できない。

装備が失われれば、奪う側から奪われる側に落ちる。

多くのプレイヤーがそれを恐れていた。

殺生与奪の権利を盟主を始めとした上位ギルドが握っている。

それが現実においても、そのまま盟主達の権力を保証していた。

すでに毎日の参加者の名簿作成が進んでいる。

そうなれば半端なテロリストでは太刀打ちができなくなる。

仮想世界での畦み合いや軋轢は、一体全体どこへ行ったのかと思えてくる。

「今日の夜は寂しい限りだっというのに……」

「笑うしかないですねえ」

「笑っちゃいけないんだけどね？」

悠早はロイヤルミルクティで喉を潤し、体を温める。

そして時計へと視線を送ると、すでに7時を回ろつかという時間になっている。

「でもメイリアさんが知らんぷりするとは思いませんでした」

肩を寄せて隣に座る結子の表情は、本当に心底以外というものだった。

「何となくそんな気はしていたかな？」

「そうですか……」

「メイさんも、めんどくさがりだからね……それも相当重症な、ね？」

「確かに……」

「でも、期待されたら期待されたなりに、それに応える人でもあるんだけど……」

しかし、クリスマス・イブを前に緊張が高まっている。

コミケ賛同者リストの盛り上がり比べると、クリスマス護衛などは賛同者が集まらずに苦勞を強いられている。

確かに、何が楽しくていちゃついているリア充共を横目に、大して感謝もされない活動をしなければならないのかと、そういう話である。割りとナチュラルにリア充どもがどれだけ死のうと知ったことじゃない、と言う意見は多い。

結局は権威あるプレーヤーが号令をかけないために大きな動きには成り得ない。

三猫も個人の意志に任せます、とメイリアとユアナが共同で宣言

してしまっている。

アリアは音信不通状態が続いているが、『ARIA Companion（以下AC）』もそれに従うと表明している。

これは一部には大きな失望を与えた。

ソロプレイヤーが中心の三猫は、個々の索敵能力が異常に高い。ほぼ全員が程度の差はあるが、魔力探査のシステム外スキルを身につけている。

特にメイリアや、レティシヤを始めとした『殴りプリ』、ACの魔法使い、魔法剣士集団は半径100メートルを遥かに超えるような広大な索敵能力を有している。これは警備を行う上で圧倒的に大きなアドバンテージとなることは間違いない。

しかし、揃いも揃って各個人が不参加を表明している有様であった。

要するに『誰がただ働きするか』と言う考えである。

ソロプレイヤーというのは何だかんだ自分本位の人間が多い。

マスコミなどはそんな彼らの行動を当たり前のように非難する。それに対して、アスカリア聖会の代表は『お前らが給料をきっちり払ってくれるなら、いくらでもやってやる。ついでに、それ前払いな』と、全てのメディアを煽っている。彼らトップから見れば、力のある人間の力を懷も傷めずに、タダで借りようとするのがおかしいのである。

やるならボランティア精神に溢れている人間だけでやれば良い。利がなければ彼らは動かない。

そういう思考回路だからこそ、彼らは頂点にいる。

「ティッシとか、『そんな事やってて給料減ったらどうしてくれるんだ!？』だっただけ……」

「仕事が大変なんでしょう?」

「そう、なんでもこれから大晦日まで職場に缶詰だとか」

二人は仕事って大変なんだとしみじみと思う。

これで納期が伸びれば数百万単位の赤字になると、レティーシャがWebカメラの前で頭を抱えていた姿を思い出す。そして、そうなったら減給間違いなしだとかで、『ふざけるな!』と珍しく怒り狂ってもいた。

数人がかりでなだめすかして居たのは昨日の夜のことだ。

仮想世界に入れない代わりに、ギルドのメンバーたちはまめに連絡を取り合っている。

むしろゲーム内よりも緊密になっているほどだ。

「もうすぐ……か」

止まることなく、黙々と時は刻まれていく。

惨劇の幕開けまであと数時間。

01（後書き）

すごい勢いで地の文ばかりです。

今まで出てこなかったゲームシステムの部分の解説がこれから少し増えるかも？

鎖の記述を追記。

システムが現実世界に実装した『Gift』は大別すれば2種類である。

しかし、今のところ大多数の一般的なプレイヤーが認識しているのは『プレイヤーがプレイヤーに与える』ギフトだけである。これらは明確にわかりやすい形式で実装され、ご丁寧にもイグドラシル・システムによる『周知』まで実施されたからである。

それが行われたのは21日の事である。

それまでは無制限に大きな力を入れたと喜んだプレイヤーの多くは一転して恐怖した。

しかし、これが副次的なものに過ぎないと言う事は、勘の良いプレイヤーは気づいていた。

制度としての『Gift』の本質は『System Yggdrasil』が『プレイヤー』に与えるモノである。

事実上の新たな神であり、主たる『System Yggdrasil』を頂点とした、もう一つの『Gift』システムは静かに極少数のプレイヤーにのみ周知される形で実装された。

それが今日24日の明け方のことである。

それまで、『聖職者』系資格を含め『格』は意味を持たなかった。実際のな力の象徴である『資格』に対して、仮想世界での『権威と権力』の象徴であった『格』は現実世界において意味のないものと見なされていた。実際に顕現当初それらしい何か力が与えられていたわけではなかったのだから当然である。

システムは現実世界に、データを投影するにおいてプレイヤーの『格』を調整した。

仮想世界では単純にランクによって『格』は決定されていた。システムは多数のプレイヤーの『資格』はそのままに『格』の格

下げを行った。

神の代理人として相応しいものに相応しい地位をである。

その結果として聖職者系では格の階層構造が見事なピラミッド型に整形された。世界中で5000を超える数が居た『Bishop 格』所持者は僅か300名程度へ減少した。多くのプレイヤーは『格』のみが『High Priest』や、更にその下の『Priest』へ格下げとなった。そのため仮想世界ではシステム上有り得なかった『資格』よりも『格』が低い状態が一般的となったのである。

それをプレイヤー達は特段気にしなかった。

意味のないものを気にしても仕方がなかった。

しかし、ついにそれが本当に力を得たのである。

仮想世界では『教会監督官』と呼ばれた制度の実装である。

主たる『System Yggdrasil』は、その権威と権力の代行者に『教会監督官』の代わりに『Servus Servorum Dei』の称号を与えた。キリスト教から引用されたそのラテン語の意味は、日本語に訳すならば『神のしもべのしもべ』である。

オセアニアから東南アジアを経て台湾、日本までの一帯『東太平洋管区』の『代理人』は2名が選出された。

その権限は『プレイヤーが与えるギフト』等とは比べものにならないほどに大きい。

『システムの与えるGiftの与奪をSystem Yggdrasilに進言する権限』

システムのな名称を使えば『破門』を宣告する権限である。

言わば、プレイヤーからあらゆる力を奪う権限そのものであった。そして、逆にプレイヤーでない人間にプレイヤー達と同様の『シ

システムに乗る権利・ギフト』を与える権限も同時に付与された。また、他の『Bishop格』を所持するプレイヤーを『代理人の補佐官』としてシステムに『推薦』する権利も当然のように加えられた。

これらは『代理人』が『破門』を宣告すればそれがただちに有効になるわけではない。

その是非の最終的な審判は『System Yggdrasil 1』が行う。

システムが認めて初めて有効となる。

それでも盟主達が有する権力と比べるのもあほらしいほどの権力、そして権威。

新たな神であるシステムの力に裏付けされた強大な力。

しかし忘れてはいけないのは、システムはこの権限をいつでも取り消すことが出来ると言う事。

余りにシステムの意に沿わない行動を取れば権限は剥奪される。

大多数のプレイヤーが『格下げ』をくらった中で、優希は数少ない『格上げ』を受けていた。

仮想世界での『Arc Bishop格』から『Cardinal格』への1階級特進である。

彼の他にも10名ほどのプレイヤー達が同様の格上げをされていた。

「はあ……………」

ベッドに仰向けに体を横たえながら、胸元のネックレスを弄ぶ。材質はオリハルコン、希少な薄水色の宝石『イグドラシルの欠片』を使用したレアアイテム。

今日の朝になって突如として現れたそれは、システムの代行者の

証明であつた。

そんな権限を仮想世界に引き続き与えられた、メイリアこと優希はたまったものではなかった。

しかも、北米の有名プレーヤーがそれを既にネットを通じて公表してしまつたのだから、優希としては頭が痛かつた。彼としては、何もせずに可能な限り『大人しくしてしていよう』と思つていたのである。教会監督官が北米『管区』に登場し、その権限の内容と共に、他の地域にも居ると宣言されてしまつた以上は、日本国内であれば『メイリア』の名が挙がるのは必然である。実際に日本を含む東太平洋管区の監督官の一人はメイリアで間違いないだろうと、ネット界限では満場一致で結論が出てしまっている。

下手をしなくてもほぼ間違はなく、山のような苦情や陳情が舞い込んで来るのは明らかである。

いや、すでに舞い込んできているのである。

その最たるものが、昼頃にメールが飛んできた『クリスマス護衛企画』の代表のものだった。

「ああ、もう知らない……やってられない！」

優希は何時になく荒れていた。

普段のメイリアとしての表情はそこにはなく、歳相応の幼を感じさせる。

「何が楽しくて、あんな仕事やってたと思つてんだろうね？ もう、どいつもこいつも勝手なことばかり……」

寝返りを打ち、枕に顔を沈める。

今の優希の指示は日本国内のプレーヤーにとっては『勅令』その物であると言つて良い。

彼にその意志があるかどうかは関係なく、彼らの力を剥奪する権

限を持った存在が居るといふのは純粹に脅威でしかない。4大クラ
ンや3大アライアンスの掌を返して、締め付けと脅迫に変わった『
やり方』の問題で、多くのプレーヤーが疑心暗鬼に陥っている。

とにかく、今現在においてプレーヤーの多くを動かす最も効果的
な方法は『メイリア』に勅令を発して貰うことである。

どう見ても、10代の未成年に任せるべきことではない。

「頑張ってください！とか他人事のように……それに、おめでとう
ございます、とか喧嘩売ってるのかな」

激励のメールも各所から山のように寄せられていたが、それは明
らかに逆効果である。

既に旧来のメールアカウントは既に使用しておらず、新アカウン
トは極親しい信頼に足る人達——三猫同盟関係者が中心——のみに
しか教えていない。流石にアカウントごと消してしまえば不審がら
れると言うことで、沈黙を守っていることにするための措置であっ
た。

世界各地の『代理人』達の中で知らん顔を決め込んでいるのは、
実はメイリアだけである。

それに対して東太平洋管区のもう一人の代理人は苦言を呈してい
る。

理由は単純で『地域の担当者』を決めるためには『代理人双方の
同意』が必要なのである。

そう、『メイリア』が承認しなければ何も決まらない。

それを優希は完全に失念していた。

その時、携帯の着信音が響く。

出来れば出たくはなかったが、LEDの青点滅が親しい人物だと
示していた。

優希は重たい身体を引き起こすと、ベッドの宮に置かれた電話を

乱暴に掴みとる。

「電話……誰からだよっ!?　って、……ティッシ?」

たった1度だけの深呼吸。

それだけで、スイッチが入ったように『優希』であつた表情が『メイリア』へと切り替わる。

「はい、メイリアです」

『おお、めーの字。こん』

電話越しに聞こえるレティーシャの声は徹夜明けのナチュラルハ
イのように思えた。

そして実はその予想は全く間違つていない。

「仕事は大丈夫なんですか?」

『大丈夫ではない』

「もう……」

ほどほどにしてくださいね、と呆れ気味の声で労る。

忙しいのは理解できるがしつかりと休みをとって、健康に気をつ
けて貰いたいところだった。

よくあることではあつたけれど。

『まずは、代理人の就任乙』

「ありがたくないですが、おつありです」

レティーシャがハハハと豪快に笑う。

『そうそう、オーストラリアの代理人がぶち切れてるぞ?』

「どうしてですか？」

「めー」の字が、承認しないと地域担当への権限委譲ができないと？」

「.....」
「どうした？」

優希は怒り心頭ですっかり忘れていたその事実をようやく思い出す。

現実問題として、地域担当を少しでも多く任命しなければ自分の仕事が増えるだけなのである。

基本的に地域ごとの顛末な問題は彼らに処理させ、どうしてもその地域内だけで完結できない、もしくは重要度の高い問題を処理するのが『代理人』の仕事である。そして地域担当が居なければすべての事案が彼らのもとに上がってくるのである。

彼はこの電話が終わったら早速、地域担当承認の決済を始めようと決める。

そして日本国内に居る『Bishop格』所有者達を地域担当に推薦しなければならない。

そこまで考えて、一つの事実気づく。

日本国内の『Bishopp格』所持者の多くが何故か三猫、それも彼のギルドに集まっている。

システムが決めたことなので仕方が無いとは言え、体裁は余りよろしくない。

それもとで考えようと、問題を先送りにする。

「いえ……実はそれをすっかり失念して……」

おいwwwwwwまでwwwwww

その声には明らかに草が生えている。

優希は穴が目の前にあれば入りたい気分になってくる。

「それから、ティッシ」

『なんだ？』

「ティッシのこともしつかりと地域担当に推薦しておきますからね？」

『仕方ない、そのくらいは受けてやるさ』

「ありがとうございます」

レティーシャは即答した。

流石に断られることはないと思っていたが、万が一の可能性はあった。

彼女は仮想世界においてメイリアが管区から離れる際には、教会監督官の地位を委譲されて引き継いでいた。それはもう多数のプレイヤーに恐れられ、レティーシャが監督官をしている間は明らかに風紀が引き締まっていたと言われるほどである。そして、メイリアに再交代すると治安も悪化するが、それ以上に活気が戻っていた。メイリアははっきり言ってしまうえば甘かった。

そうして権限を一時委譲するたびに、随分と嫌そうな顔をされたのを覚えていた。

優希は心から感謝の言葉送った。

しかし、その後レティーシャの口調が旧に歯切れの悪いものへと変わる。

短く『心して聞け』とだけ言うと、深呼吸するの音が聞こえる。

『それで、重大かつ非常にマズい報告がある』

「もう、今の状況以上にマズイって……どれだけですか？」

『そうだなあ……例のヘルハウンドが生まれたての子犬に見えるくらいに化物が出現する』

「へっ？」

今のところ、日本国内で最大の被害を出したモンスターは初日の『ヘル・ハウンド』である。

獣系では上級のランク88のNMであった、それを上回る物となれば……それも、レティーシャがヘルハウンドを子犬とまで表現したくなるシナモノが何であるのか予測していく。その辺りから推定できるのは『ランク100以上』であり、PT向けのモンスターであろうという事。

すると可能性は事実上はMBM以外には存在しない。

問題は、それが何であるかという点に集約される。

『SSGRがついに降臨するぞ?』

「……………ええ、っと……………」

『生きてるか?』

「……………」

呆気に取られて言葉が出てこない。

ギルド、アライアンスと言う単位で、討伐可能な組織は世界を探しても片手で数えられる。

それは、MAMBMの16番以降——塔、星、月、太陽、審判、世界——の色々が強さがオカシイ奴らを除けば、現状では最も難易度が高いと言われるモンスターである。単体での強さは勿論であるが、それ以上に取り巻きとして付き従う『GR』は強化前のSSGRにも匹敵するほど強力で、強化後の半数以上のMBMを上回る強さを有する雑魚であった。

事実上SSGRはMBMが取りまくMAMBMである。

優希はレティーシャがどうしてそんな事を知っているのかと疑問に思う。

何が出現するのか判るのなら、もっと効果的な対処を打てるはず

であつた。

「本当ですか？」

『まああの男がSSGRの現出が完了したと言っていたからな……まあ間違い無いだろうな』

「あの男？ 何故そんな事を知ってるんですか？」

彼はレティーシャの知り合いの顔を当たるが、それらしい名前と顔は思い浮かばない。

『実は、長い付き合いの大先輩がな……今だから言うが、TWの開発者だ』

「……………」

『いや、実は自分もさ……TWのゲームデザインに暇つぶしに関わってたんだが』

「なっ!？」

優希は言葉を失う。

何年前の話かは知らないが、初耳であり衝撃の事実である。

少なくとも『暇つぶし』で関われるようなレベルの事ならば、本当に初期段階で関わっていたのだらうと推測する。無駄にどうでも良い思考を巡らせていたことに気づくのは、数十秒という長い時間を要した。そして、それが終わっても尋ねたいことが後から後から湧いてきて収集がつかなくなっていく。

レティーシャは硬直して、話が頭に入ってこない彼を他所に言葉を続ける。

『で、その人にイグドラシル・システムってのがご親切にも大きなイベントを告知してくれるらしい』

「……………」

『それで、SSGR降臨の可能性は3、4日ほど前に聞いてたんだが……ついに正式においでなさったらしい』

何でそのことをもつと早く話してくれなかったのかと、ぶつけたくなるがなんとか堪える。

問題は、それが何処に出現するかである。

場所によっては人をかき集めて、PTを編成するのも困難であるう。

招集をかけて、討伐へ向かうとしても大人数となりかなりの困難が予想される。

レティーシャが話さなかった4日と言う時間があれば、最低限の準備は可能だった。

出現地点が東京都心から近いことを優希は祈る。

「ティッシ、降臨場所はわからないのですか？」

『そこまでは無理らしいな……』

「……そうですか」

優希はそれを聞いて肩を落とす。

三猫だけでなく、盟主ギルドの上位プレイヤーを含めて招集可能な面子の顔を思い浮かべる。

必要なのは何よりもSSGRのタゲを持つタンクを務める重装騎士と、近接攻撃でダメージを与えるアタッカーである。魔法職は『Aria Company』があり、GGRの相手であれば彼のギルドでの人員で充分に対抗できる。それでも討伐しようと思うと、交代要員も組めて三猫のほぼ全戦力を投入する必要がある、安全マジンを確保するには、それでもかなり足りないと思積もる。

何よりの不安要素は氷の魔女に連絡がつかないことだった。

討伐が可能か不可能かの答えは可能である。

しかし死者が出る可能性が余りにも高い。

優希だけで結論を出せるような問題ではない。

『しかし、雪降る聖夜に死神は舞い降りる……か、システムも粹な事をしてくれるもんだ』

レティーシャの言葉に優希は唇を噛む。

02（後書き）

こんなクリスマスは勘弁して欲しいですね。

そろそろ急転直下でゆるい話を書きたく（え

後に言うところの『流血のクリスマスイブ』が明けて25日の土曜日。

東京では渋谷や新宿を始めとした繁華街で1000人を優に超えるほどの被害は出たが、それでも幸いなことに当初予想されていた最悪のシナリオまでは被害は拡大しなかった。

特に大きな被害が出たのは渋谷であり、システム定義された、氷と風属性の複合魔法であり、最大級の範囲攻撃である『Storm Gust』による物であった。吹き荒れる氷塊の直撃で即死できた者はまだ良かったが、死にきれなかった者や、程度の差はあるが凍傷を負った者などは悲惨であったと言える。それを撃ち放ったプレイヤーは、警戒に当たっていたプレイヤーによってその場で始末されている。

他にもラブホテルに武器一振りを片手に切り込み、ドアを蹴破り室内で行為に及んでいた客が多数惨殺すると言った事例も多数確認されていた。たった一人のプレイヤーにより一つのホテルの客が全員死亡すると言った事もまああったと言われている。

未だに被害の全貌は明らかになっていない。殺害まで行かなくとも、強盗・強姦などは想像を絶するような件数だという。

犯人グループの死者は東京近郊で37名、全国で54名に上り、検挙者はその数倍に達した。

その数が多いのか少ないのかは評価が分かれる所である。

最大の問題点として、索敵能力の不足が大きかったと言う声は多い。

その理由は単純でシステム定義スキルの『索敵』では、システム外スキル『ステルス』を会得し、使用しているプレイヤーを発見する

ことはできない。それを見破ることが可能なのは、同じくシステム外スキルである『魔力探査』だけである。

警察や警備側ブレイヤーも無傷とは言えず、少なくともない被害が出ている。

そんな彼らを英雄のように讃えるメディアを、盟主達は鼻で笑っていた。

悠早と結子は、暖房のしっかり効いたリビングで寛いでいる。

窓の外を見れば一面の雪景色、数年ぶりの積雪である。

今も、深夜に比べればマシになったが、今日1日は雪のぱらつく天気になると言う。

こんな日は、家の中でゴロゴロとだらしない生活するのが王道である。

コタツと猫が居ないのが少々残念なところだ。しかし、何故か冬場は常備されている――祖父母からの支援物資――オレンジ色が鮮やかな、ミカンだけでこの場はよしとする。今も、テーブルの上に置かれた、竹製の籠に6つほど入れられている。

しかしやはり片手落ちであることに違いはない。

悠早は朝食というにはずいぶん遅い、ブランチと言うのが妥当な軽食をちまちまと口へ運ぶ。

ほんの1週間前であれば、休日であっても7時には希少し朝食も摂らずに仮想世界へログインし、ゲームない時間で凡そまる1日を過ごし、昼食を取って更にまる1日、夕食後にまる1日、と完全に仮想世界が中心の生活であった。それなしで過ごすなど考えられないと思っていたが、実際そうなってみると意外と生活できる物だと悠早はしみじみと思う。

それ以前に、このところネットで何かをする時間も減っていた。

「拒否権がないって辛いですね……」

「全くだね……何でこんな事になったのかすごい不思議だわ」

二人もそんなメディアの報道姿勢が不愉快極まりなかった。もつとも、今現在の二人にはそんな事は割りとどうでもよかったのである。

何せ、彼らにとってそれ以上の厄介事が降り掛かっていた。

「日本国内だと67名が対象なんですね……見事にキャラ名全員分出てます」

「これは名誉なのか、嫌がらせなのかどっちだろうね？」

「システムのささやかな嫌がらせじゃないですか？」

「……………はぁ」

メイリアのブログを見ながら二人は口々に感想を漏らす。

途中から悠早はこめかみを押さえて、何処かに沈んでいたのであるが。

理由は単純で、メイリアが日本国内の全ての『Bishop格』以上の格所有者を代理人補佐官に任命すると宣言してしまったためであった。この宣言そのものはSeven Sisters——4大クラン、3大アライアンスをまとめてそう呼ぶ——からも、即日で賛同を得られていた。そもそも、代理人であるメイリアの最初の『勅令』に文句を言う度胸のある人間は居なかった。

そして運悪くイシステム・イグドラシルによる『格下げ』をくらわなかった優希もその頭数に入っていた。

彼としては心底勘弁して欲しかったが。

しかし、メイリアとしても補佐官を身内だけで固めるわけにもいかない。かと言って、今から対象者リストと過去実績を元に人選をするような面倒な事は嫌だった。

そんな半ば投げやりな決定で、このような処置となった。

「うちのギルドは多いですよ……16名ってどうなんです?」
「ああ、イリユさんも入っているんだ……なむ」

リストには見慣れた、もしくは知っている名前がずらつと並んでいる。

聖職者系プレイヤーの中ではそれなりに名の知られている——これもなく悪くもである——有名人達に混じって、自分の名前が並んでいるのが彼には何とも違和感がある。これも、システムが恐らく雀の涙程度の善意で『メイリア』の補佐をさせるために『格下げ』が無かつたんだろうと言うことが予想でき、こうなつて初めて納得が行った。

その中にある優希の兄弟子の名前も当然のように入っていたのがその確信を強めた。

彼女も悠早とランク的には大差はない。
ギルド『Cat's Living』の平均レベルを押し下げているような、一般人ではない。

1番の押し下げの原因は『結子』なのであるが。

「でも、コミケで沙奈と洋二をしばかないと……ね、ハハハ」

深夜3時という時間に送信された『就任祝い(笑)』のメールの内容を思い出す。

「兄さん、ちょっと怖いんですけど……」
「今まで生きてきた中で、あれ以上に殺意の沸くメールはなかったと思うよ」

その時、タイミングよく悠早の携帯の着信音が響く。

「って、誰だろ……どうせ洋二だろうけど」

「あれじゃないですか……姉様の声で罵られたいイケナイ願望に目覚めちゃったとか？」

「あのね、ゆい。ありえそうな怖いこと言わないでくれる？」

「でも、この所毎日のように悶絶していたじゃないですか」

「……………」

脳内で女王様に踏まれて悶えるバカの姿に、全身に悪寒が走る。

またろくでも無い事を想像してしまったと、激しく後悔するが既に遅い。

しかも何故に、彼がユリアネの姿で行為に及んでいる光景を想像してしまったのがわからない。少なくとも悠早は、アブノーマルではないと自負していた。確かに、洋二を吹き飛ばしているのは、ナカナカに爽快感はある事は否定できないのであるが。

しかし、それをやるとすれば、それはレティーシャの仕事だろうと彼は考える。

明らかにその方が『似合う』からである。

実際に、彼女が原因で妙な性癖に目覚めてしまったプレイヤーも居るとか居ないと言う。

「ふふふん♪」

結子は何を考えているのか、なぜか妙に楽しそうである。

何を考えているのかは聞きたくもなければ、想像もしたくはなかった。

「……………ん？」

「？」

携帯を手にとると、ディスプレイには見たことのない番号が表示されている。

悠早はその番号に全く心当たりはない。
可能性としては間違い電話か、TWの知り合いからだろうと予想する。

「はい、ユリアネですが……」

ここ最近はTWの知り合いしか電話などかけてこない。
携帯で知らない電話に出る時は、自然とキャラ名で対応するのがデフォルトになっていた。

別にリアルネームで会話していても問題はないのであるが、やはり姿がゲーム内のものであるので『なんとなく落ち着かない』と、話し合いの結果としてそうなっている。

今では、ギルメンやその他の個人的な知り合いも含めて、主要なメンツとは連絡を取れるようになっている。

まだ数人の番号が不明だったが、それもいずれ埋まるだろう。
とにかく、この1週間は悠早はそれで全く問題はなかった。

何せリアル知り合いでかけてくるのは洋二か両親、あとは祖父母くらいのものである。

彼は友達が少ない。

「……………え？」

表情が「やってしまった」と言うものに変わっていく。

まさかクラスメートの一人から、それも根本的に番号すら教えていない相手であった。番号を交換する以前に、この4月からの間で片手で数える程度、それも恐らく挨拶を交わしたとかその程度のことしかないクラスメートという以外は接点がまず存在しない相手。
彼のような日陰で生きている人間とは対極にある、交友関係の広い

リア充である。

それも女生徒と来た。

悠早は『何でこの番号知ってるんだよ』と内心でキレる。

彼女は『ユリアネ』と言うキャラ名を名乗られて、その声は明らかに混乱しているようだった。

その名前はクラスメートだと沙奈は別クラスであるので、洋二しか知らない。

この家には固定電話などというものは存在しない。

どうやら様々なルート経由で、悠早の携帯番号をわざわざ調べたらしい。

悠早にとっては、一体どんなルートで番号の情報が漏れたのかは気になるところだった。

1番可能性が高いのは教師経由である。

しかし、休日にわざわざ担任に連絡をとってまで聞くかということ少々疑問が残る。

「って、佐倉さん？　なんでまた？」

結子は随分と希少な相手からの電話に興味津々といった様子で、瞳がキラキラと輝いている。

彼の表情が徐々に曇っていく。

「え、魔物？」

「何かあつたんですか？」

結子は『魔物』と言う単語に不穏な気配を察する。

時間が経つに連れて、悠早の表情が『めんどくさい』から『ちよつとまで』へ、そして『マジですか』と確実に悪化していく。電話の声も『ええ』とか『はい』とか『そう』と言う小さな呟きだけに減っていく。

兄の背筋が震え、全身から血の気が引いていくのがわかる。
携帯を持つ手が小刻みに震えている。

「……………えっと、確認しますけど、それ本当です?」

電話越しの彼女の声も、深刻な事態だと判ったのか不安が見え隠れする。

その、兄のただならぬ状態に、結子がそつと悠早のセーターの裾を摘んでいる。

「わかりました……………ああ、一人知り合い連れていきますけどいいです?」

結子はそれが『メイリア』の事だと理解する。

彼女を引っ張り出さなければならぬ事態というのが、その深刻さを表現している。

大抵のモンスターであれば、悠早の気はあまり進まないが、最悪は悠早と結子を前衛、洋二を後衛、沙奈を支援としてPTを組めば対処できる。ランク80くらいまでであれば、多少手こずる可能性はあっても倒すには十分な戦力がある。それでダメなら、学校の漫研辺りに所属しているプレイヤーに協力を依頼すれば良い。

それで対処ができない化物が出たと言うことを意味していた。

最低でもヘル・ハウンドクラス以上。

彼女の脳内で、様々な上級モンスター達の姿が次々と思い浮かんでは消えていく。

しかし、曲がりなりにも——武器性能の助けはあるとは言え——ランク90を超えた3次資格取得者がここまで恐れる化物となると、それなりに数が絞られる。

竜族ならばその大きさや威容からもつと話題になるだろうし、既に大きな被害が出ているだろう。そういう意味では大型獣に属する

『フェンリル』なども除外される。小型中型となってくると、悪魔系やオーガを始めとした亜人種などの名が上がる。

彼女は直感的に『悪魔』もしくはそれにちかい類でないかと推理する。

実態を隠せる化物であれば、普段は目立たないために話題にも上りにくい。

どちらにしても、その感情は『怖いもの見たさ』に近い。

裾を掴む手に力が籠る。

「それでは、今日の午後2時に飯田橋の東口で」

メイリアの予定も都合も確認せずに、日時を決定してしまう兄に結子は少し呆れる。

それだけ、悠長なことを言っている余裕もないほどの強敵というのが何であるのかが気になって仕方がなかった。

めちから眼力で悠早に回答を催促する。

「それで？」

悠早はその名前をここで出すべきかどうか悩む。

数分間の睨めっこと、結子の根気に彼がいつものように折れる。

「GGRが出たつばい……みたいだよ？」

「あの青い死神ですよね……超嫌がらせモブの」

二人もそれには何度かPTを全滅させられた痛い経験があった。結子も全てを納得する。

03 (後書き)

最後のほうをばっさりカット。

場所は今週3度目となるチェーンのコピーショップ。

こうして彼女と顔を合わせるのは何回目だろうと悠早は思う。

始まりの日からまだ1週間ほどしか経っていないというのに、銀座での初日も含めればもう実に4度目である。

ベージュのタートルネックのセーターに、膝下、灰色のプリーツスカートと言う、随分と色味のない地味な装いの彼女を目の前に眺める。仮想世界では髪を下ろしている事ばかりであったので、今のように黒いレースのリボンでポニーテールに結んでいる姿はなかなか新鮮だった。何時もの大人っぽい雰囲気も和らいで、歳相応の幾らか可愛らしい印象が強い。

地味であるが、初日の黒一色に比べればまだ色見がある。

それに比べると悠早は、若緑色の膝下丈のワンピースの上に、襟や裾に多様なフリルをふんだんに使ったクリーム色のガーディガンと随分と可愛い。21世紀初頭風に表現するのなら『森ガール（笑）』とでも表現するのが妥当そうな、そんな姿。

今ではすっかり結子の着せ替え人形にされているのは間違いないが、それもいい加減に諦めが入りつつある。彼女が着ないような、もしくは似合わないような物までも遠慮なく何処からともなく調達してくる。

鏡を見ている分には、ただ単に可愛く見えて、妙なテンションに乘せられてしまう。

外に出てから後悔するのももうお約束だった。
メイリアの生暖かい視線が微妙に痛い。

クラスメートとその知り合いの男子生徒との面会が終わっても、二人は話を続けている。

相変わらず店内やら道行く人々の視線を集めているが、気にしな

いことにしている。

当初に彼らが思っていたよりも、ゲーム内の容姿が現実に反映されたプレイヤーは随分と少なかったということが判明しつつある。確率的には三千人に一人と言ったところだろうと言うのが定説になっている。それが正しいとするならば、120万人のプレイヤーが居るという日本国内では4千人程度ということになる。

ラッキーなプレイヤーを見かけることは思いの外少ない。

そんな二人の話題はと言えば、目と鼻の先の問題である『GGR討伐』と『SSGR潜伏先の割り出し』そして、近く行われるだろうMAMBである『SSGR』討伐が主な話題であった。前者は遅くとも水曜まで、後者も可能であれば新年開けてすぐの実施が目標となっている。

少なくとも見た目は見目麗しい少女である二人でするような会話ではないが仕方がない。

やりたくもない事だが、やらざるを得ない。

「それで、メイさん……SSGR討伐PTはどんな感じになるんです？」

「えっと……今のところですが、取り巻きを抑えるPTが7つ、SSGRを抑えが2つ、支援PTを2つ、魔法攻撃PTを2つ、予備戦力1で、計画上は14PTの編成ですね」

「はあ……」

メイリアを中心として進むSSGR討伐計画は悠早の予想を遥かに超える規模の物になりつつある。

これが仮想世界内であれば、現状の計画の半分程度の人員でも十分に討伐が可能であることから見て、彼女がいかに慎重に慎重を期しているかが見て取れる。

「レイドの人数は130人を超える予定です」

悠早はその数字に思わず息を呑む。

仮想世界でこれまでで組織された中で最大規模のレイド——ボス討伐などの大集団——は、過去2回実施されたMAMBであり、全モンスター中最強の『The W・O・R・L・D』討伐である。その時には、世界中のランク100以上のプレイヤー540名、50PTからなる前代未聞の規模のレイドが編成された。この規模がすごいのか、この規模でも戦力的にギリギリだったと言う『The W・O・R・L・D』が恐ろしいのかは判断に悩む所である。

それから見れば、小規模のように見えるが難易度から見ると明らかに過剰である。

しかもその規模ともなれば、日本国内の上位プレイヤーをほぼ根こそぎ動員することになる。

「随分と大規模に……」

メイリアはコクリと頷く。

彼女の表情はどうにも冴えず、何かを口に出すのを躊躇っているように見える。

「タイミングと当たり所が悪ければ……即死しかねませんから。どうしてもゲーム内よりも多めにバッファを見ないと、ですね」

「そうですね……」

「ええ……、私もこの規模のレイドの指揮を取ったことがないので

……」

「聖会のあの人に頼むくらいしか？」

「それが無難だと思います」

メイリアはいけ好かない軽薄な男の顔を思い浮かべる。

あんな男がどうして4大クランの一角を占める通称『聖会』こと

『アスカリア聖会』の盟主ギルドのギルマス——ギルドマスター——が務まるのか不思議で仕方がなかった。もともと、ギルマスなどと言うのは凡その場合は盟主ギルドをまとめる為の単なるお飾りではなく、クランの実務的な部分はその他の人間が取り仕切るのが常である。

それだけ回りに優秀な、人間的に良く出来た面々が揃っているとと言える。

三猫の面々は大規模レイドを指揮した経験はない。

あるのは、教会監督官権限を使用した中華系業者等の討伐作戦の企画程度でしかない。

それも、あくまでも企画までであって、具体的な編成や実践指揮は大手ギルドに丸投げしていたと言うのが実情である。彼らを直接指揮するのも不可能ではなかっただろうが、何から何まで経験が物を言う世界であり、まるで勝手が違う。かと言って、大手クラン・アライアンス間の戦争行動ともM B M討伐は異なる。遥かに秩序だつて、統制のとれた行動が必要である。

実際のところは、M B M討伐を指揮できる人間は随分と限られる。メイリアもレティーシャもM B M戦などは、大イベントを除けば身内での経験しかない。

大抵の場合は、その身内だけでどうにかなつてしまっていたのだが。

そのお陰で『善きに計らえ』以外の指揮らしい指揮もなかった。

「今回は、三猫が主力で大同盟の協力を得る形ですね……それ自体は何時ものことです」

「他の面々は？」

「コネがありませんから……あつた所で、何を吹っ掛けられるか解つたもではないですね」

「……………まあ、それもわかりますけど」

この状況だからこそ、多くの上位プレイヤーの力を借りたいという気持ちは勿論あった。

しかし、同時にある程度は顔の知れた面子での討伐のほうが連携が取りやすくなるとも言えるのが中々に難しい所だった。それ以上に、ある程度力関係、役割分担のはつきりしている大同盟こと『イルネス大同盟』だけの方が指揮の一本化も容易だった。

ここで、他のクランやアライアンスを巻き込めば、最悪主導権争いが起きる可能性もある。

もう一つに、ドロップアイテムの問題もある。

モンスターがこの世界でも素材などをドロップするのは既に広く知られている。

それがMAMBのドロップやMVPアイテムともなれば、優秀な装備や材料であることが期待できる。

そう言ったゴタゴタはとりあえずは避けたい所である。

「それと申し訳ないですが、東京近郊に居住している補佐官は強制参加ですので……ユーリや、イリュちゃんにも参加してもらいます」
「……やっぱりそうですよね？」

悠早はやはりそうかと溜め息が漏れる。

予想していたことだったが、実際に言われてみると気が重くて仕方がない。

「身内に甘いと言われると、尾を引きそうですので……純粋に『支援』としてなので、まだ安全だと思います」

「仕方がないですね……イヤですけど」

「すいません……」

メイリアが深々と頭を下げる。

「メイさん、あの……ですね」

「謝るくらいしか出来ませんから……」

そう言われてしまうと、悠早としては返す言葉を思いつかない。

ここで『気にしないでください』などと言う訳にも行かず、ここで文句を言うほど事情を判っていないわけでもない。

「あとは……私は、前に回るので、W o Y はユーリかイリュちゃんかどちらかに託します」

「W o Y ですか……」

「高性能装備を遊ばせておく余裕はありませんからね？」

悠早のスキル値的には装備するのに問題はない。

ただ、神器級の武器と言うのじゃ往々にして、武器が使用者を選ぶと言われる。それはこのメイリアのW o Y は勿論であるが、レテイーシャのネメセイアや氷の魔女の『The Wand of Aria』なども同様であった。それらの武器の一群は所有者以外が使用すると、本来の性能を発揮できない。それでも、隔絶した性能を出せるが故に神器なのである。

悠差にとってW o Y は余りにも『重い』のである。

あれは暴れ馬の類いだと彼は思う。

武器に振り回されるような奇妙な感覚をよく覚えている。

「ただ……」

「？」

メイリアは深い溜め息を吐く。

その深刻な表情に、悠早は身構えてしまう。

「アリアちゃんが参加できそうにないんですね……困ったことに」

「アリア様がですか」

「お陰ですごく戦力ダウンなんです」

悠早は氷の魔女の戦闘を間近で見たことはない。

様々な噂を聞いてはいたが、どれも背ヒレ尾ヒレが付いているように、メイリアやレティーシャなどはそれを聞くたびに大笑いしていた記憶がある。それでも、そのうちの幾つかは事実であつたらしく、複雑な表情で苦笑いしていたのも思い出す。

しかし、その姿は何度となく見かけたことはあつた。

箱入り娘と言うのがぴたり当てはまる、黒髪の旧華族令嬢。

特注品と思われる鮮やかな和服姿が、ファンタジー世界に不思議と溶け込んでいた。

「ずっと音信不通なんですっけ？」

「ええ……何処でどうしているのか気になります」

イグドラシルの現出が始まつた先週土曜日以来、氷の魔女との連絡はとれていない。

メッセンジャーやメールなどに対しても返信が一切無く、近況が全く掴めていない有様である。

仲が特に良かったレティーシャにすら同様であるという。

「どちらにしても……」

彼女が聞いた限りではタイムリミットはそれほど遠くはない。

それはレティーシャの大先輩であり、TWの開発者であるらしい西澤という男が語つたと言つ。

それによると、今現在SSGRはゲーム内で言つたところの『世界の狭間』に存在しているらしく、そこで力を蓄えている状況ではないかと言つところらしい。ゲーム内では『表世界』は『狭間』を

通して『イグドラシル界』と呼ばれる場所へと繋がっていた。そして、イグドラシル界へと繋がる『門』を守護していたのがMAMB Mであった。

そこから化物が現実世界へ出てくるまでのリミットが遅くても1月半ばくらいであるそうだ。

そして、表世界である『現実』から狭間へと繋がる『門』も既に開いているらしい。

リミットというのはこの門をSSGRが自由に行き来できるようになるまでの時間だと言う。

彼と国などの必死の努力でログの解析が進んだことで、判った成果であるらしい。

「遅くても来年、1月10日までの討伐を目標としていますが……門を探さないといけません」
「そうなりますよね」

その前段階として取り巻きであるGGRと門の発見である。
可能であれば、その上でGGRを討伐し取り巻きの数を減らすことができれば尚良かった。
要するに上位プレーヤーで追い回そうという話である。

「ええ、とにかくあれがこの世界に出てくる前に決着を付けないと……」

悠早はただ小さく頷く。

「でも、終わったら国から報酬が出るそうです」
「はあ……」
「このくらい、ですね」

メイリアは左手の指を3つ立ててみせる。

3万では安すぎるが、30万でもまだ危険性を考えると随分と安いと言わざるを得ないと悠早は思考する。しかし一人頭300万はありえないだろうとも思える。その次に、これで死亡した場合は保険金やらのお金は貰えるのだろうか、などと現実的な方向へ思考が傾いていく。

しかし、SSGRの危険性から見ると成功報酬300万でも安いように思える。

生きて帰ることが出来れば、暫くは不自由のない生活ができるのだが。

それ以前に、そもそも既に国と話が付いていると言う状況が少々意外でもあった。

政府は未だに事実上の大規模武装組織であるクランやアライアンズに対して有効な手立てや懐柔策が示せずに居る。30ミリ以下の砲ではまともなダメージの通らないモンスターに対抗するのが困難なのはまだ仕方がない。実際にはそれどころか、この一大事に、国会はと言うと無責任な罵倒大会を繰り広げ、内閣不信任だなんだと意味不明な政争を繰り広げている。

金を積んでも懐柔するべきだと叫ぶ者も多いがそれも中々に難しい。

あの既に支配者気取りの盟主達が、たかが端金で国に大人しく従うとは、彼には到底思えない。

しかし彼らを敵に回して討伐するのも困難であった。

どちらにしても、そんなアホ共の下で働かされている警察や消防、自衛隊には頭が下がる。

「あの……メイさん、あまり言いたくはないんですが。それ、割りに合わなく無いですか？」

メイリアはただ、肩をすくめて苦笑いするしかなかった。

当面の目標であるGGR討伐日程が確定するのは翌26日のことだった。

04（後書き）

次からGGR討伐の予定、と言っても余興ですが。

あと数十分もすれば日が変わる。

間違いなく氷点下と言う凍える寒さの中で、総勢13名が思い思いに一時を過ごしている。

白を基調としたゲームの聖職者らしい格好を中心に、皮鎧を身に付け腰に鞘を下げた剣士、チャイナドレスのような物の上に全身をすっぽりと覆うローブを纏った魔法使い風の女。その様子はさながらコスプレパーティーか何かのようであり、ここがこの一帯を管轄とする警察署のロビーや、駐車場であつたりすると言う事実が奇妙な違和感を感じさせる。

三猫の面々がこれだけ揃うのはいつぶりだろうと悠早は思う。

そもそも彼の所属するギルド『Cat's Living』のメンバーですら、殆ど顔を会わせる事がなかった。精々が四半期に一度だけ、集会的な催しで全員が揃うことがあつたが、それだけだった。そのまとまりの無さゆえにメンバーの平均的な強さはトップクラスだが、集団として見るとバランスも悪く異常に弱い『はず』等と言われる。そう言つて喧嘩をふっかけ、数倍の戦力で返り討ちにあつた『聖会』の例もあるのだが……。

彼が割りと頻繁に顔を会わせる人物となると、メイリア、レティシア、カイヤ、そして今、抱きついて頬ずりしている、天敵のアコくらしい物だろう。

本日の主催者のメイリアはと言うと挨拶回りをしている。

悠早もそんな中で、Bishopの戦闘装束に身を包んでいる。

白と瑠璃色を基調とした格調高い印象を与えるようでいて、動きやすさを重視した太腿の付け根辺りまでの左右のスリットが随分と際どい。そしてその隙間から、白のオーバーニースとガーダーベルトが覗いている。激しく動きまわるような戦闘行動を取れば、服装

の重力演算が制御——と言う名の制限——されていた仮想世界なら
ともかく、現実ではパンチラなんてものではどうみても済まない。

防御力が皆無のように見えて、魔法防御は勿論だが、付与魔法効果で鉄や鋼製の下手な金属鎧も真つ青なほどに物理防御も強化されている。もちろんそれだけでなく、重要部位には革製の軽鎧が裏側に仕込まれ、防御をより厳重にしている。

雑魚に挑むならともかく、相手がGGRである以上は身に付けていなければ危険過ぎる。

こんなデザインそのまま現実に持つてこなくても良いのにと彼はボヤク。

「やめて、離れて、ああもう!!」

瑠璃色がBishopを象徴するなら、Dominicansを象徴するのは『緋色』である。

背後から彼を羽交い絞めにいる彼女は随分と楽しげである。ライトブラウンに染めたロングヘアは緩やかなウェーブを描き、明らかに手間暇のかかっている化粧が目鼻立ちのはっきりした美人と言う印象をより強めている。160半ばより少し高い身長と、スラリと伸びた長い足、胸こそ小さいものの正規の3次元としては均整のとれたモデル体型。

彼女が『モデルやってます』と言えば、凡その人は『なるほど』と納得するだろう。

情報が正しければ年齢的には20代半ばだと言うのに、その姿は随分と若々しく見える。

彼女、キャラ名は『アコ』が言うには、仮想世界の容姿こそ貰えなかったが、7、8歳分くらい若返ったらしい。

本人はそれを『残念賞』にしては豪華だねと笑っていた。

「もう、ほんとメーたんもそうだけど、このまま襲いかかりたくないくらいに可愛い、肌もぷにぷに、真っ白でスベスベ、お姉さん羨ましいわ」

「ヒッ……!?!」

もう襲い掛かってるじゃないかと言うツツコミは野暮である。

彼は、肌に触れる息や首筋を撫でる髪がくすぐったくて仕方がなかった。

右手に握った神器『The Wand of Yggdrasil』で頭部を引っぱたきたい感情に襲われていたが、流石に自分の持ち物ではない神器でそれをやるのもどうかと必死に堪える。そんな使い方をしてもメイリアは何も言わないだろうが、どちらかと言えば杖の機嫌を損ねたくないのである。

神器持つプレーヤーは揃いも揃って『神器には意思がある』と語る。

その意味は悠早には解らないが、要するに大切に扱えということであるらしい。

そんな様子がアコの被虐心を刺激しているのだが、解っていてもどうにもならない。

その様子は昭和の世の酔っ払いセクハラオヤジにしか見えない。そんな二人の様子を、男性陣は苦笑いしながら時折チラ見しては視線を逸らし、女性陣は『またやってる』とでも言いたげな生温い視線で見守っている。メイリアですらも出来れば関わりたくはないようで、知らんぷりを決め込んでしまっているのが見える。

端の方では『何故か』付いてきた結子が合掌している。

「怯えなくても大丈夫、優しくしてあ・げ・る、からね?」

「あなたが言う冗談に聞こえないんですけど!?!」

「あたしが冗談なんて言うわけじゃない?」

親指をピンと立ててのドヤ顔に、逆に気力が抜けていくのを感じる。

「なんでそんな得意げなんですか……」

「かぁいい子は別腹？」

「あんた旦那持ちでしょうが!？」

悠早は腹の底から叫ぶ。

彼女は三猫でも珍しい既婚者であり、旦那共々TWプレーヤーである。

そして、バイ・セクシャルと呼ばれる人種であり、特に可愛い女の子が大好物、最近の趣味はエロゲと言う少々困った人種でもあった。そんな彼女に取つれば『宗教上の理由』でストライクゾーンからは少々外れていたが、それでも今では見た目は美少女な悠早やメイリアは美味しい餌であった。

しかし、遊ぶには比較的ツンと澄ましているメイリアは彼女から見るとあまり面白くはない。

反応の良さの差で悠早が仮想世界以来ずっと犠牲になることが多い。

「大丈夫、女の子相手なら多分浮気にはならないからね!」

悠早はどうしてこんな人間が『弁護士』なんてやってるんだろうとつくづく思う。

それ以上に、いくら5年以上もやっているとは言え、最近では月に数日しかログイン出来ないような環境でプレーしている割に、何故かランク110の大台にも達しているのが不思議で仕方がない。巷の噂ではレティーシャ並にプレー時間が取れば、互角のところまで行くのではないかとモッパラの評判の彼女。

ランクの差はほぼ所有している武器と防具の性能差だけとも言われる。

世の中いろいろ間違っていると周囲は皆思う。

「旦那さん泣きますよ……？」

「もう諦めてるみたいだからダイジョーブ！」

周囲の視線が一斉に『何も大丈夫じゃない』と訴えかけているが彼女は気にしない。

これで、夫婦関係は良好と言うのだから、なんとも心の広い旦那さんだと誰もががしみじみと思う。

「何が大丈夫なのか聞いたら負けですよね……？」

「もち」

彼女の辞書にも大概大概『反省』とか『自省』とか『自重』とか言う類の言葉はない。

仮想世界、いやゲームとしてのTWにおける最上位プレイヤーは『キチガイではない』が『いろいろ間違っている』、しかし不思議と『何故かそれなりにまともに社会生活を送っている』、そんな人間の集まりだと、そんな風に特に日本では評される。

基本的にTWの上位にいるの一言で表現すれば『天才』なのである。

それがないプレイヤーは精々がランク90半ばまでしか上がれない。

それが通説であつた。

そういう意味では、一般人の悠早は限界線に近いところまで既に到達している。

「ああ、もう……ユリたんはこれだから、やめられない、ダ・イ・

ス・キ！」

悠早を抱きしめる腕に力が籠る。

不意に頬から肌の感触が離れたかと思うと、すぐに全身に電流が流れたような衝撃が走る。

不意打ちに、思わず女の子らしい可愛い悲鳴が上がる。

「ちよつとま、噛むな！」

すぐ横には、美味しそうに耳朵を甘噛みしているアコの顔がある。舌が触手のように蠢き、弱いポイントを探り当てては重点的に攻めてくる。

「誰か止めて!？」

逃げ出そうにも『S t r』値的にどう考えても勝ち目はない。

いつもの事だなど、生温いやら苦笑いやら呆れ顔やら様々な表情を向けてくる討伐隊の面々は勿論であるが、詰めている警察官も苦い表情で知らぬ顔をしている。ここに比較的常識人のレティーシャ辺りでも居れば止めに入ってくれるのだが、今日はその頼みの綱もプロジェクト現場に軟禁状態が続いていて、ここには居ない。

むしろ彼女が居ないからこそこの状況であるとも言える。

メイリアは『反応せずに澄ましてればいいんです』と言うがそれが出来れば苦労はしない。

アコの手が、悠早のしつかり自己主張している胸を下から鷲掴みにする。

防御力の高いインナーやら下着やらのお陰で、その感触はダイレクトには伝わらない。

彼女のコメカミがピクリと動く。

「と言うか、この胸ホント腹立つんですけど!？」
「知らんわ……って、揉むな、バカ!!」

彼女は美少女好きであるが、それ以上に貧乳好きである。
むしろコンプレックスとも言える。

悠早は手袋位は持つてくるべきだったと後悔していた。

何時ものようにサイズの合っていないPコートを戦闘装束の上から羽織って居るが、それでも寒いものは寒い。それ以上に肌に突き刺さるような冷たさが、防御力的に心許ない足を襲っていた。特に剥き出しの太腿などはすでに感覚が無くなってきているように感じられる。

つくづく膝上丈スカートの女子高生の感性が信じられなくなる。

一体何が彼女たちをああさせるのだろうか。

仮想世界では冬場も戦闘装束だけで、それほど寒さを感じなかった。

それも現実には反映されていて防寒効果くらいはあるだろうと踏んでいたが、その読みは余りにも甘かったと言わざるを得ない。

残念なことにそんな素晴らしい効果は存在しない。

多少暖かい普通の服であった。

そして、夏場はどうするんだろうかと頭を悩ませる。

内側に防御を仕込んだこの衣装は、間違いなく夏場は地獄だろう。

それはメイリアも大差ない様子で、小刻みに震えているのが解る。それに比べるとリアル女性陣の二人、結子とアコは慣れているのか随分と足取りがしかりとしている。身体の構造的には大差はない筈であるのに、この差は何だろうと悠早は考え込む。

それでも警戒の手を緩めるわけにはいかない。

今日は13人を3人づつ4PTに分けての索敵となっている。

本来は参加予定の無かった結子が——何故か来たがったので——居たために、悠早のいるPTだけは4人の編成である。悠早が支援、メイリアが遊撃手、レティーシャ等と同じ順戦闘型聖職者、Dom inicanisの殴りプリであるアコが前衛を務める。

他のPTの編成も似たようなもので、メイリアの部分が魔法職に変わる程度である。

基本的に純粹な前衛、つまりタンク型のプレイヤーが『居ない』、少ないのではなく皆無という三猫の問題点が浮き彫りになる編成であった。聖職者系と魔法職、そして魔法剣士が全体の九割以上を占め、残りも弓職などが中心で『騎士』系のプレイヤーが居ない。

「いませんね……」

「何処だろうねえ……怖じ気づいて出てこないとか？」

今のところGGRの気配をかからない。

結子の索敵能力は大したことがないので——彼女曰く、ちまつこい事は苦手——3人で全周を3分割して凡そ120度づつを受け持っている。

システム外スキル『魔力探査』はレーダーのような感覚で、使い方を場合にに応じて変化させることができる。例えばソロプレー時には、全周に向けて索敵の網を巡らすようにして使用する。この場合は探知距離は短くなってしまふ。もう1つが要するに指向性を持たせることで、索敵範囲を絞る代わりに、遠距離での索敵を行うというもの。

人によっては後者を応用して、回転式レーダーのようにする事で全周カバーをしているプレイヤーもいる。その場合は1周の走査に数十秒かかるので情報の精度では劣る。

時と場合に応じて使い分けるのが重要であつた。

そして、今は後者を使用し索敵範囲の広いメイリアとアコが前方警戒、悠早が後方警戒を担当している。

「姉様……出ると思います？」

「出てくれないと困る……メイさん、ここ数日は連続で出現しているんですよ？」

「はい、警察の話ではそうらしいです」

続けて小声で、犠牲者が既に17名にも達していると呟く。

それが多いのか少ないのかは判らないが、1体による被害としてはそれなりに大きいらしい。それでも、仮想世界での設定が踏襲されているようで、きっちり戸締まりした建物の中に居れば追撃してこないために解つていれば安全である。そういう意味で可愛そうだったと言えるのは深夜のコンビニ店員だった。自動ドアが災いしてGGRの店内侵入を許してしまい、大学生のアルバイトが死亡する事例が発生していた。

今は、警察が深夜の歩みに注意を呼び掛けているお陰か、人の気配は全くない。

これがSSGRであればこうはいかない。

あれはあらゆる障害物を切り裂き、破壊して追撃してくる。

その時、アコは正面の一点を凝視したまま肩を竦める。

前方50メートルほど先、街頭の灯りが2つの物体を闇夜に薄っすらと浮かび上がらせている。

その周囲だけ雨に濡れたように地面の色が心なしか違う。

「さて、めーたん？」

「……あれが、18人目……ですか」

悠早や結子には犠牲者の切断遺体ははっきりとは見えない。

しかし、前に行く二人はアコ開発の魔力直接制御系オリジナルによつてその姿を捉えていた。

それまでの被害者と同様に、肩から脇腹にかけて斜めに一刀両断された惨殺死体。

あまりに鮮やかな切り口に血は滲むことなく、切断された血管から流れだす。

「姉様……」

「……うん、まあ……うん、そうっぱいのかな？」

彼は神器『W O Y』を持つ右手を強く握る。

はっきりとは見えないが、確かにそこに遺体が転がっているということだけは辛うじて掴めてくる。1週間前の凄惨な現場の原型すら留めていないような、そんな遺体に比べれば随分マシな死に方であるかもしれない。

あの人はすぐに死ぬことが出来ただろうか、とそんな事に思いを巡らす。

普通に暫くの間は意識があつたのかも知れない、それが途方もなく恐ろしかった。

下手をすればあれと同じ状態になる。

「何て言うか、ネジが数本飛んでそうな、すごい頭の弱そうな女だねえ……お水？」

そんな中であつて、彼女一人は何も変わらない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1926z/>

ネットゲエの世界よ、ようこそ！（仮題）

2012年1月13日21時54分発行